

かわさきの 男女共同参画に関する アンケート調査報告書

平成28(2016)年8月
川崎市男女共同参画センター

調査の目的と実施概要

【調査目的】

本調査は、川崎市常住市民における男女共同参画に関する意識と行動を把握し、市の男女共同参画関連施策、センター事業、さらには市民・市民活動団体・事業所等の活動に活かすことを目的とする。

【母集団】

平成26(2014)年9月1日時点で満20～79歳の市民(外国人市民含む) 1,120,316名

【対象者】

住民基本台帳(外国人市民を含む)より抽出された3,500名

【抽出方法】

単純無作為抽出

【調査方法】

郵送配布・郵送回収法(督促状1回)

【調査期間】

平成26(2014)年9月10日(火)～29日(月)

【回収数】

有効 1,093票(31.2%) 無効 5票

調査不能 25票(転居20, 病気・障害4, 受取拒否1)

調査内容

【調査内容】

「第3期 川崎市男女平等推進行動計画」(平成26～30年度)の進捗状況把握に必要な項目、および「川崎市DV防止・被害者支援基本計画」(平成27～平成31年度)策定のための基礎資料となる項目、さらに前2版の調査結果から引き続き推移を把握しておく必要がある項目を中心に、次のような調査内容とした。

●〈生活の状況や考え〉

生活満足度／パートナーとの間での家庭での子育てや家事等の分担状況／悩みや困りごと、相談先、相談しなかった理由／ワーク・ライフ・バランスの希望と現実／生活時間

●〈男女共同参画社会の現状や制度〉

男女の地位の平等感／女性の働きやすさとその理由／男女共同参画に関する用語や制度の認知

●〈夫婦や家庭に関する考え〉

性別役割についての意識／女性が職業をもつことについての考え／夫婦の望ましい分担の意識／男性の育児休業取得についての考え、理由／結婚・家庭・子育て観

●〈男女の人権の実態と意識〉

DV内容についての認識／DV相談窓口の認知／DV被害経験、相談状況、相談しなかった理由／デートDVの認知／DV防止に必要なだと思うもの

●〈属性〉

性別／年齢／居住区／同居者／同居の要介護者／職業／年収／婚姻状況／パートナーの職業／意見・要望

回答者の構成

【回答者の構成】

本調査の有効回答者の構成は以下のとおりであった。

	合計	川崎区	幸区	中原区	高津区	宮前区	多摩区	麻生区	無回答
合計	1093	158	114	180	156	165	148	145	27
	100.0%	14.5%	10.4%	16.5%	14.3%	15.1%	13.5%	13.3%	2.5%
女性	639	82	80	101	94	95	91	91	5
	100.0%	12.8%	12.5%	15.8%	14.7%	14.9%	14.2%	14.2%	0.8%
男性	428	74	33	79	62	68	57	54	1
	100.0%	17.3%	7.7%	18.5%	14.5%	15.9%	13.3%	12.6%	0.2%
性別 無回答	26	2	1	0	0	2	0	0	21
	100.0%	7.7%	3.8%	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	80.8%

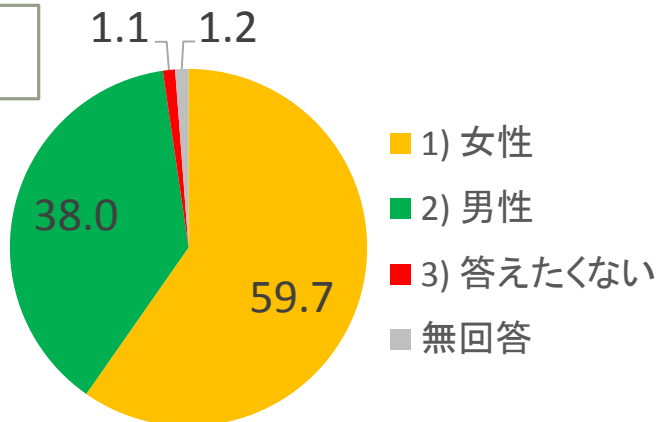
※小数点以下を四捨五入しているため、各区の構成割合の合計が100%にならないことがあります。(以下同様)

対象者属性

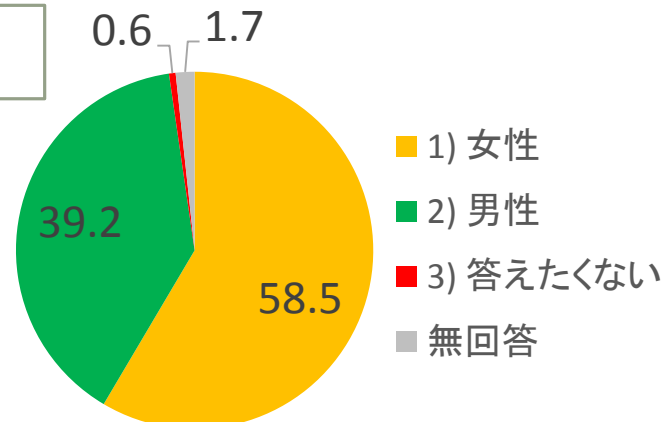
回答者の属性(1):性別、年代

性別

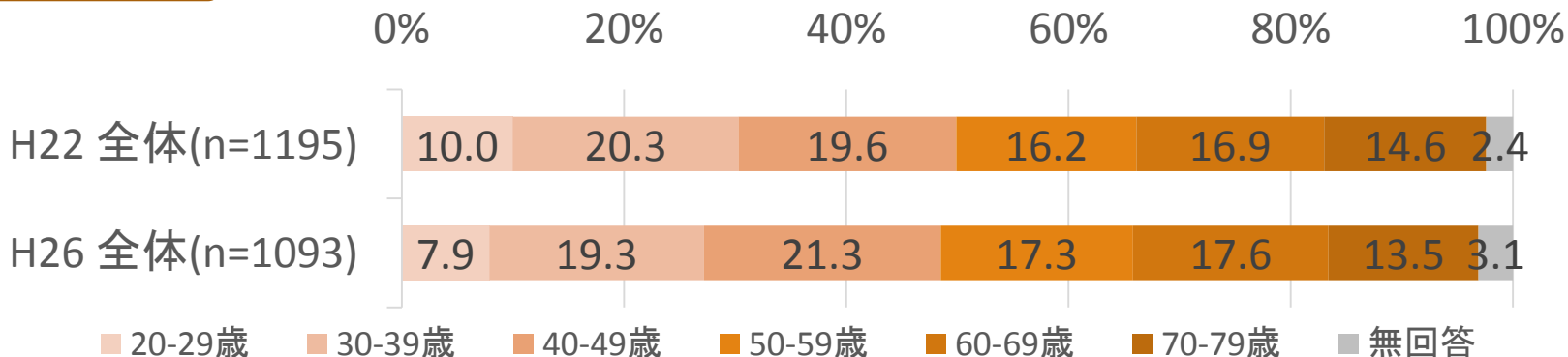
H22全体
(n=1,195)



H26全体
(n=1,093)

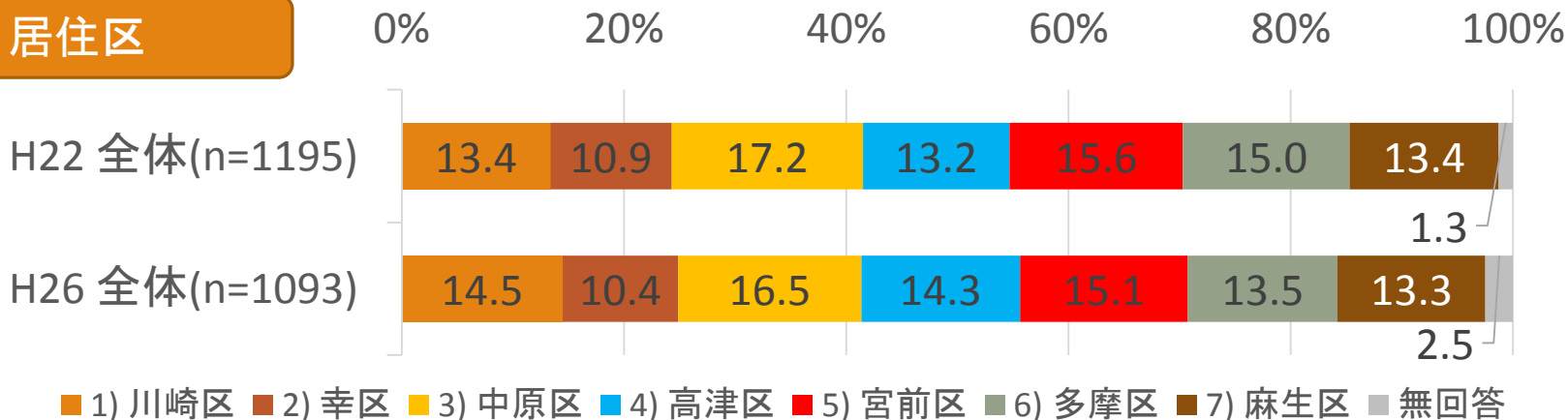


年代

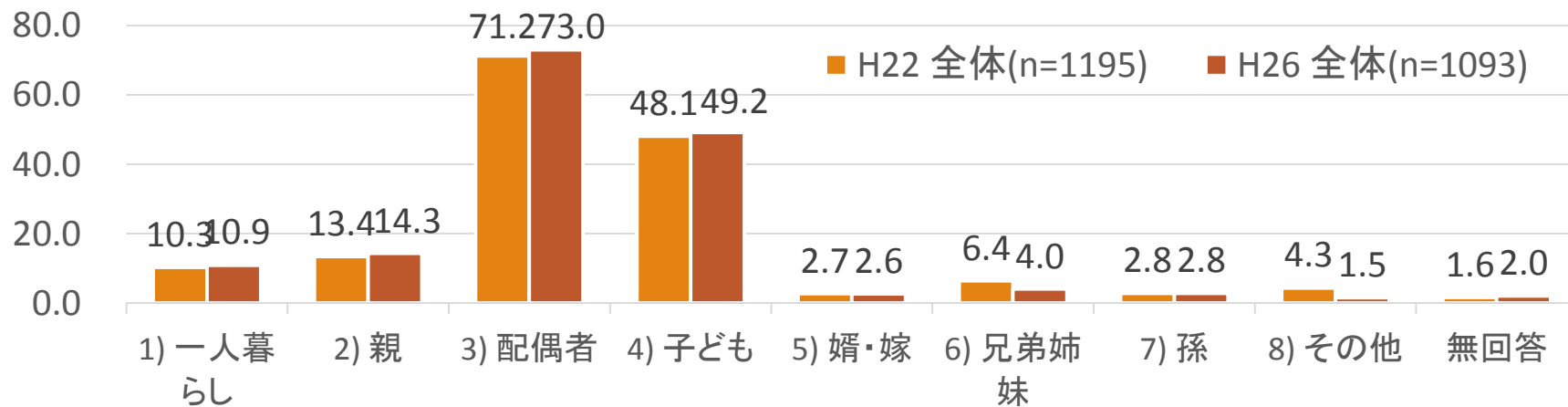


回答者の属性(2): 居住区、同居者

居住区

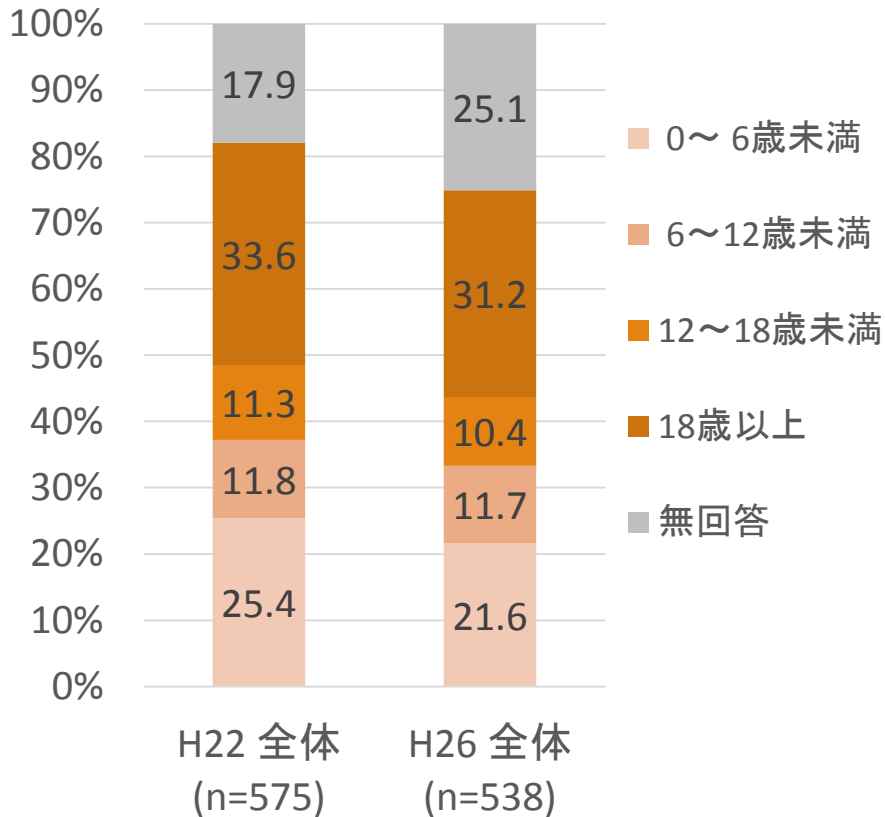


同居者(複数回答)



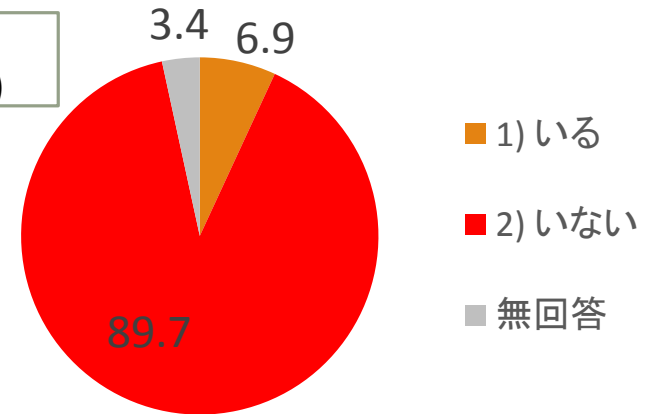
回答者の属性(3)末子年齢、同居要介護者

末子年齢

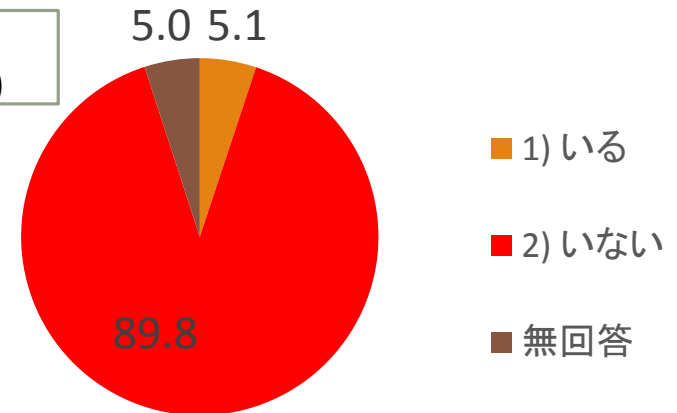


同居要介護者

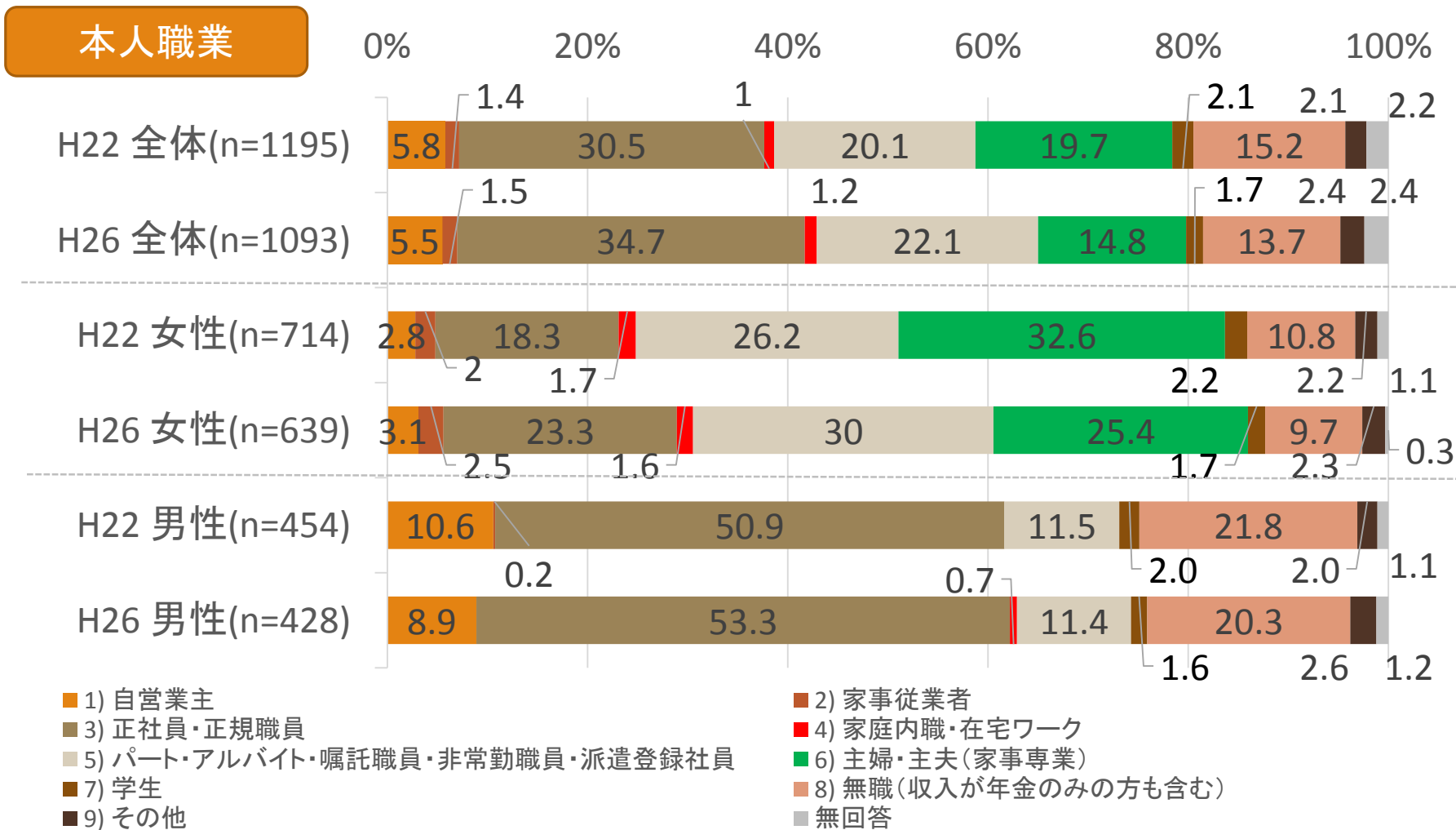
H22全体
(n=1,195)



H26全体
(n=1,093)



回答者の属性(4): 本人職業



回答者の属性(5): 配偶者・パートナーの職業

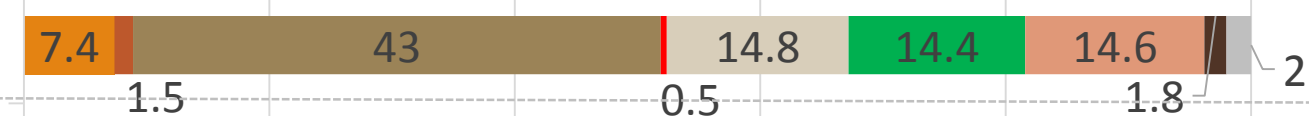
配偶者・パートナーの職業

0% 20% 40% 60% 80% 100%

H22 全体(n=876)



H26 全体(n=820)



H22 女性(n=530)



H26 女性(n=484)



H22 男性(n=335)



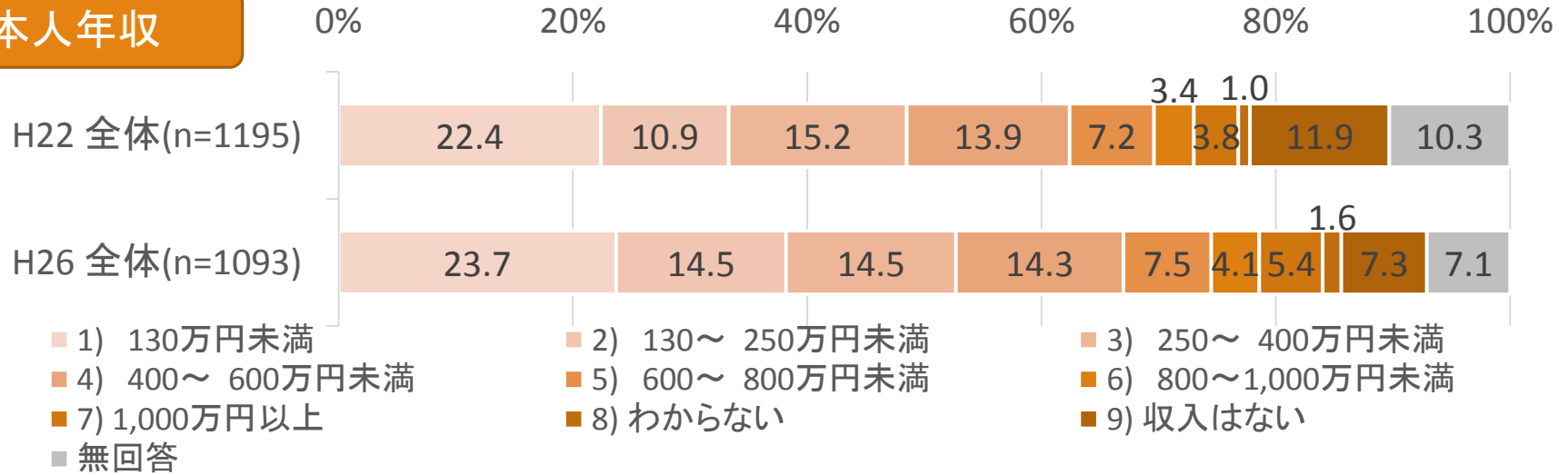
H26 男性(n=330)



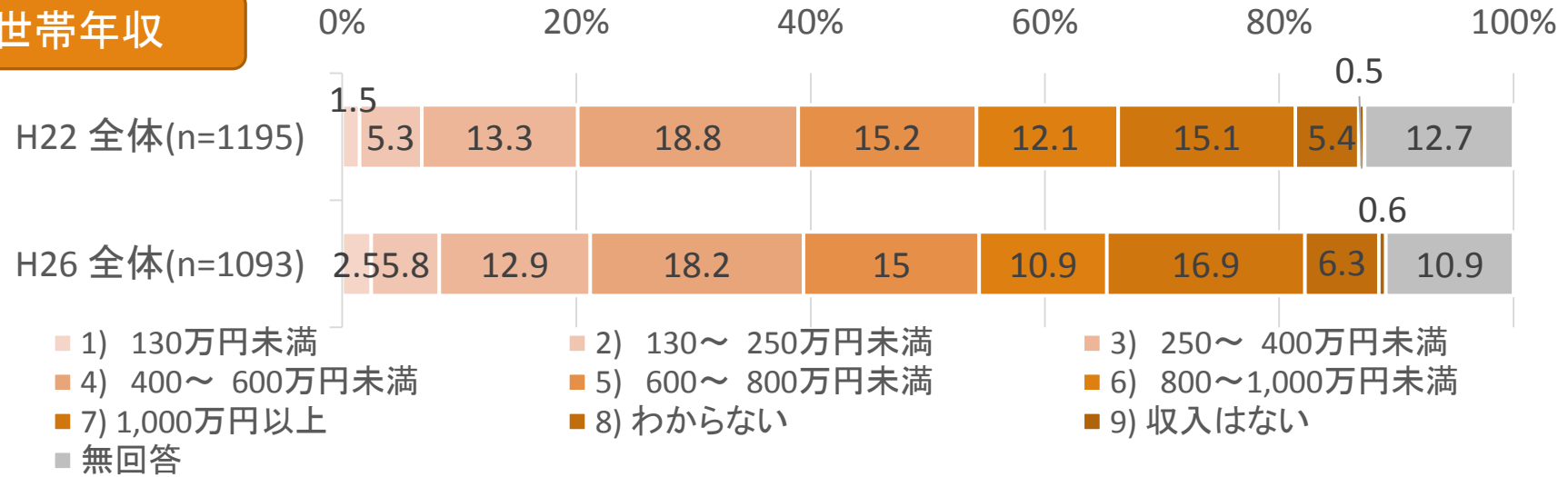
- 1) 自営業主
- 2) 家事従業者
- 3) 正社員・正規職員
- 4) 家庭内職・在宅ワーク
- 5) パート・アルバイト・嘱託職員・非常勤職員・派遣登録社員
- 6) 主婦・主夫(家事専業)
- 7) 学生
- 8) 無職(収入が年金のみの方も含む)
- 9) その他
- 無回答

回答者の属性(6): 本人年収、世帯年収

本人年収

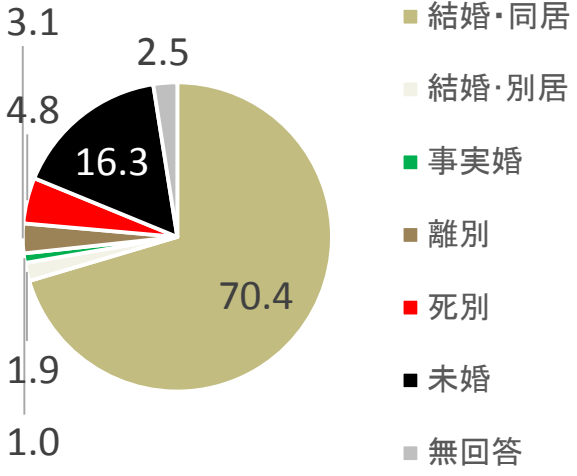


世帯年収

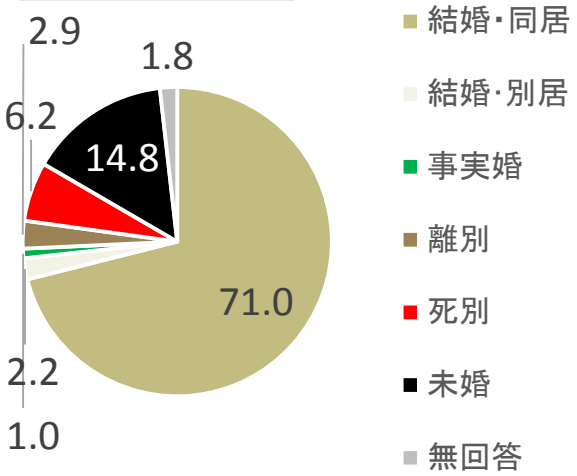


回答者の属性(7): 婚姻状況

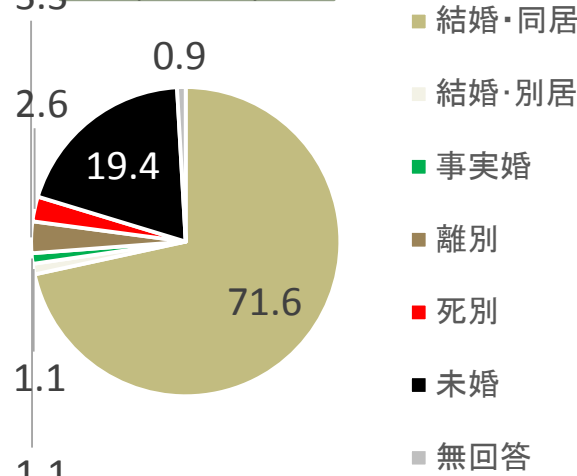
H22全体
(n=1,195)



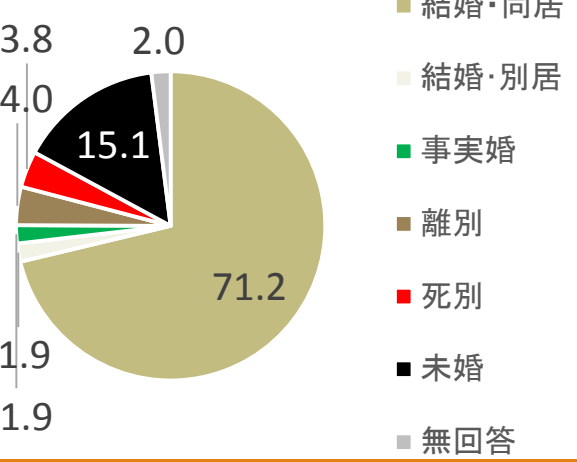
H22女性
(n=714)



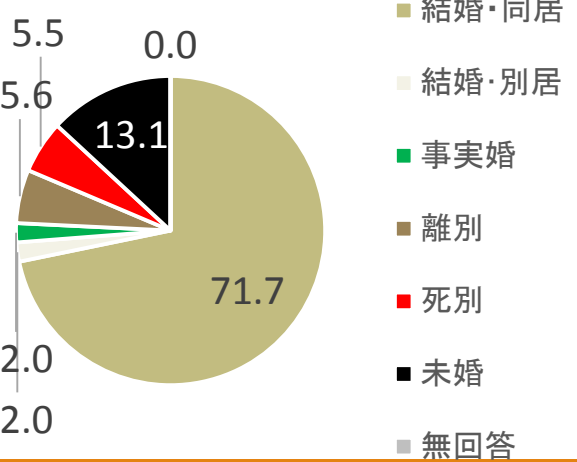
H22男性
(n=454)



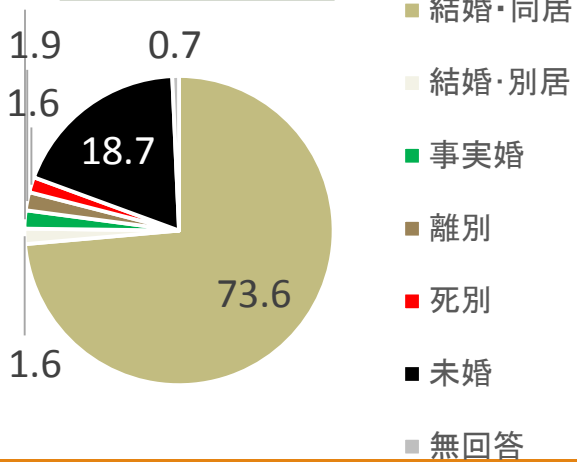
H26全体
(n=1,093)



H26女性
(n=639)



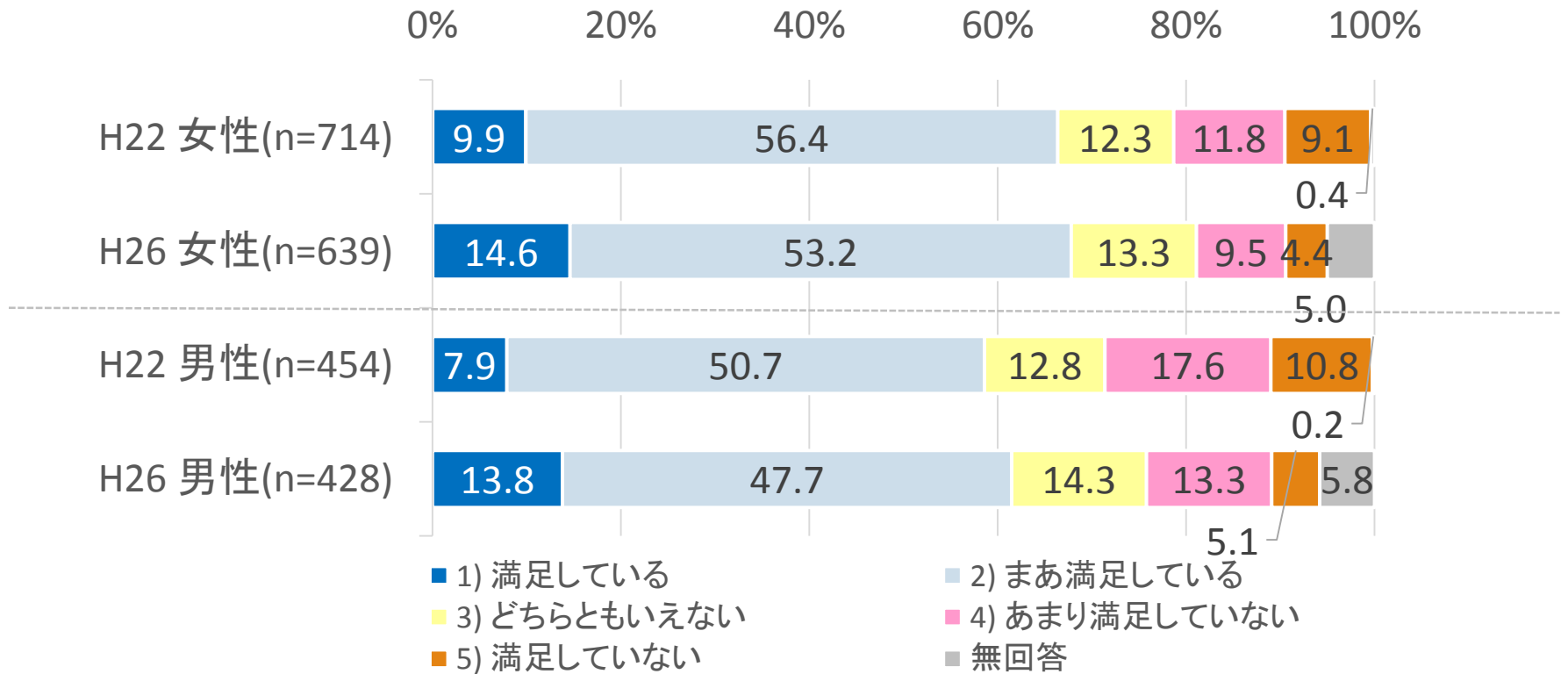
H26男性
(n=428)



調査項目

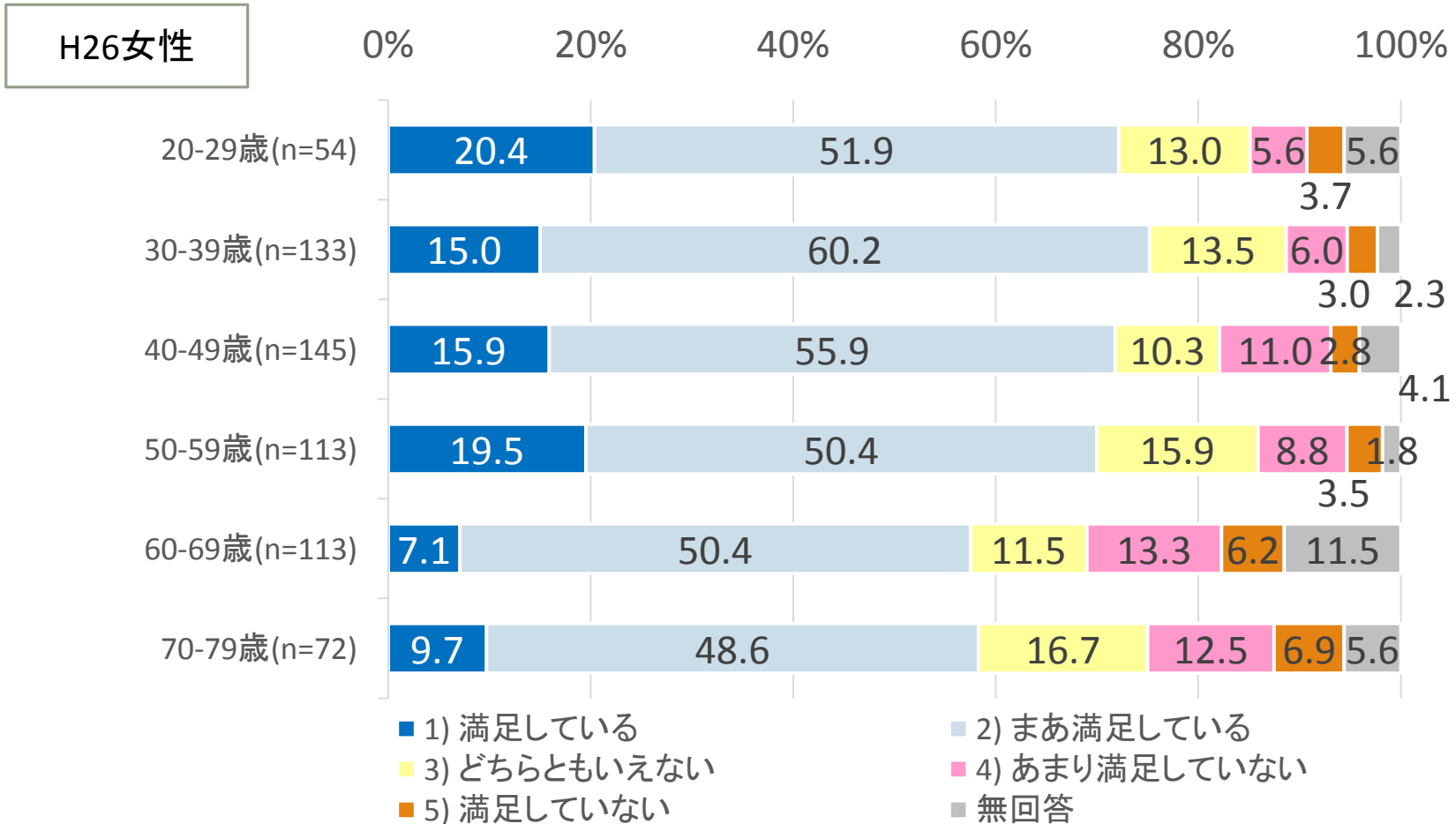
生活満足度

- 生活満足度は、〈満足派〉が女性で7割弱、男性6割強。
- 前回調査(平成22年調査、以下同様。)と比較すると、「満足している」との回答が5ポイント程度上昇しているものの、大きな変化はない。



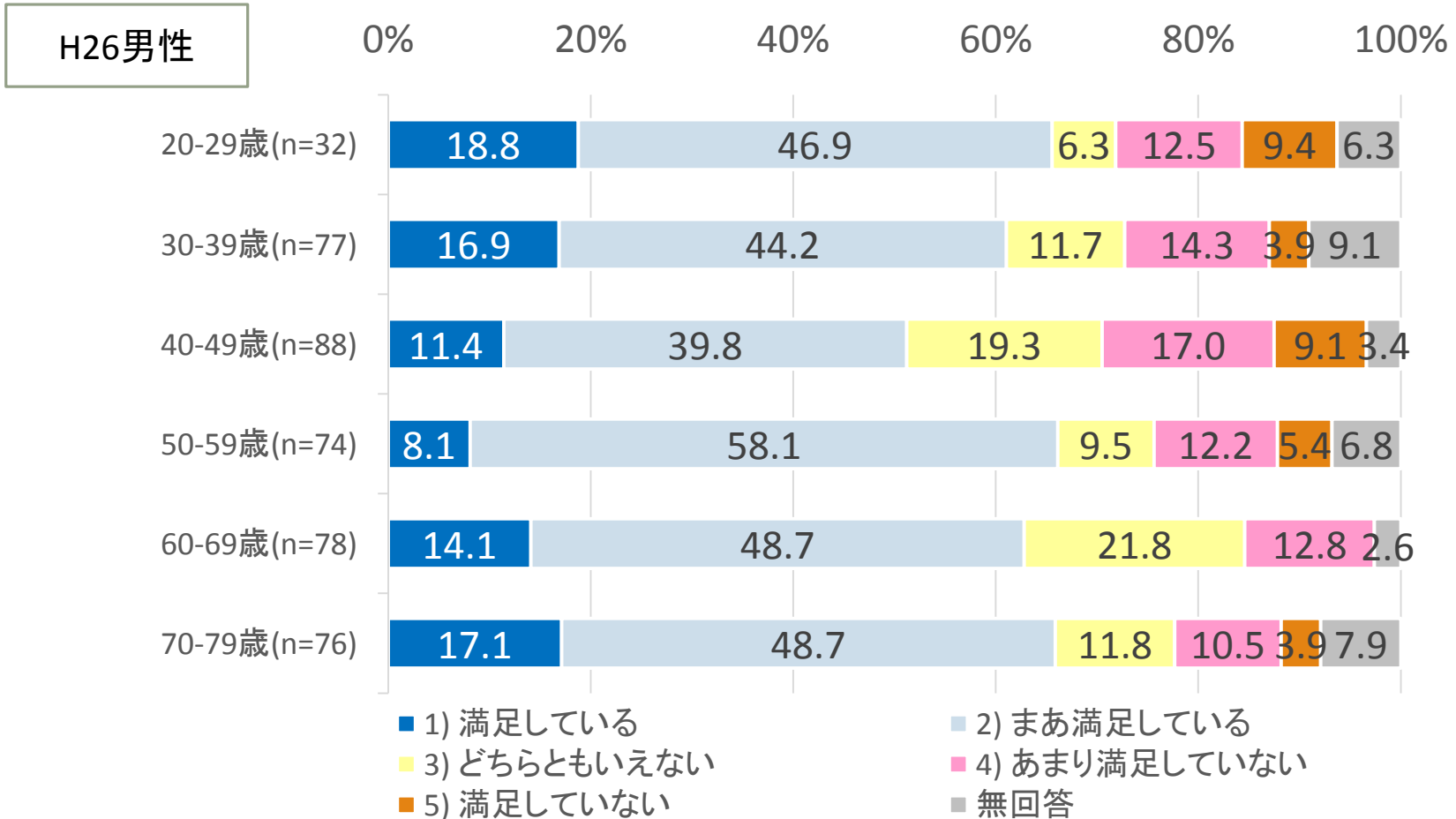
生活満足度(女性、年代別)

- 女性の生活満足度を年代別に見ると、60代以上で〈満足派〉が6割弱と、50代以下よりも低めとなっている。



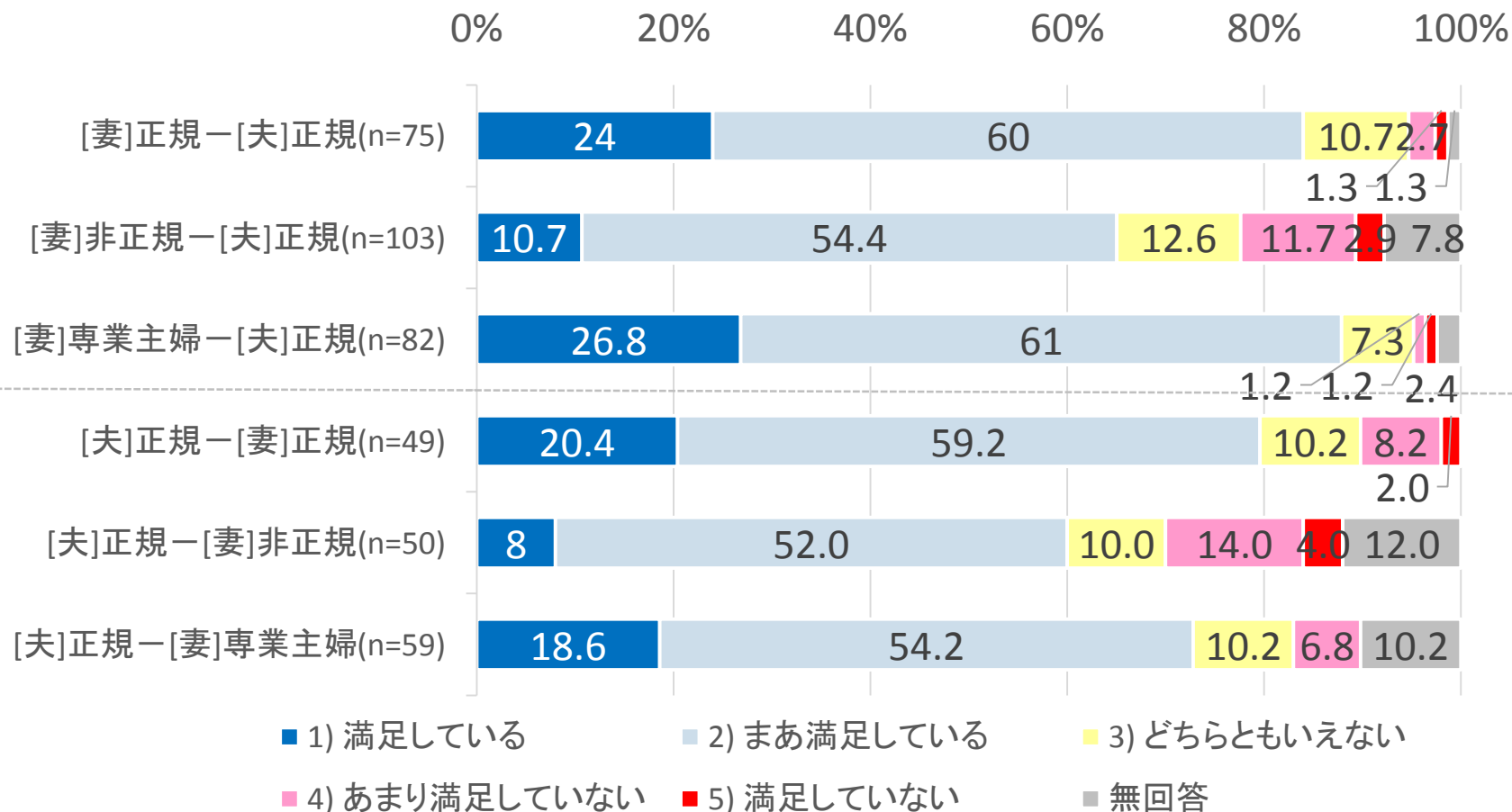
生活満足度(男性、年代別)

- 男性の生活満足度は、年代別では40代で〈満足派〉が半数程度に留まっている。



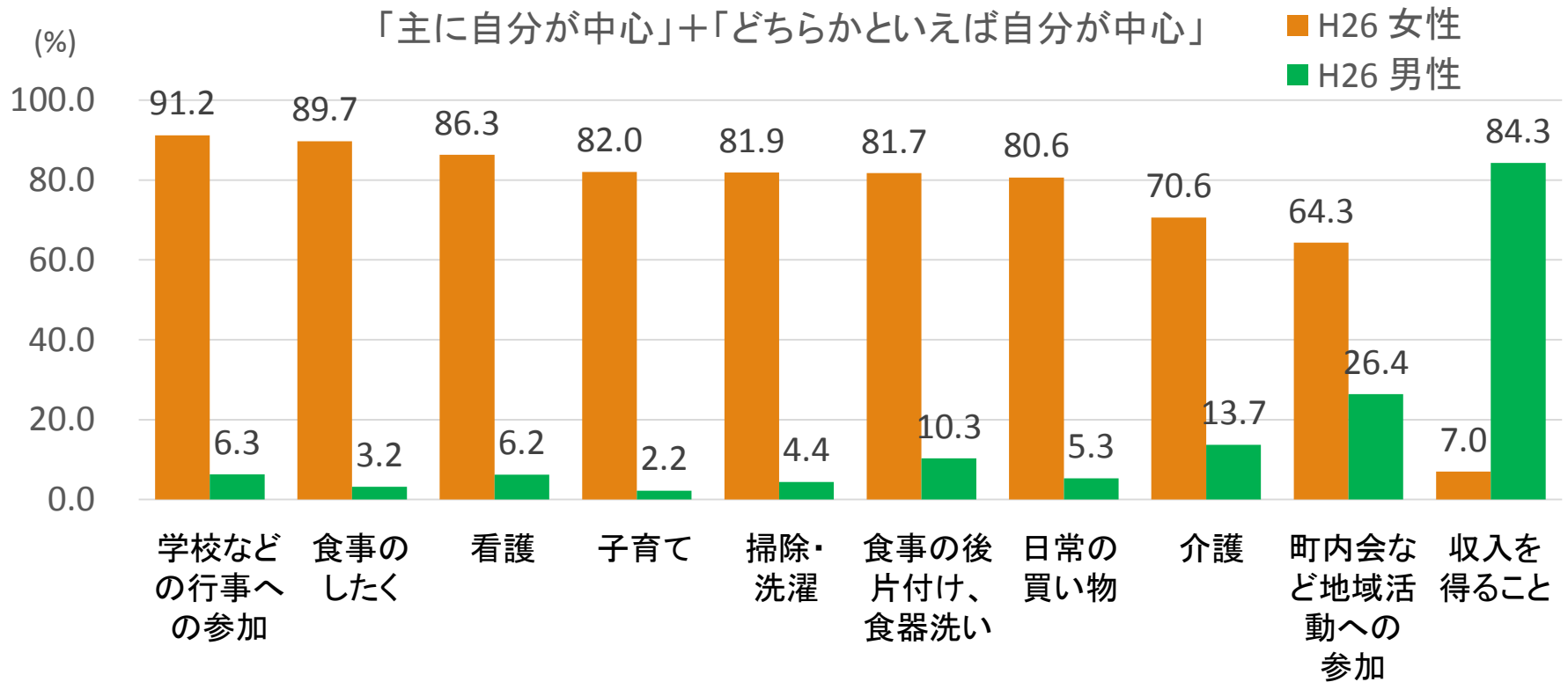
生活満足度（夫婦就業形態別）

- 60歳未満の配偶者またはパートナーのいる回答者について、夫婦就業形態別に生活満足度を比較すると、男女共に「夫が正規－妻が非正規」の就業形態のケースで満足度が6割台と低めになっている。



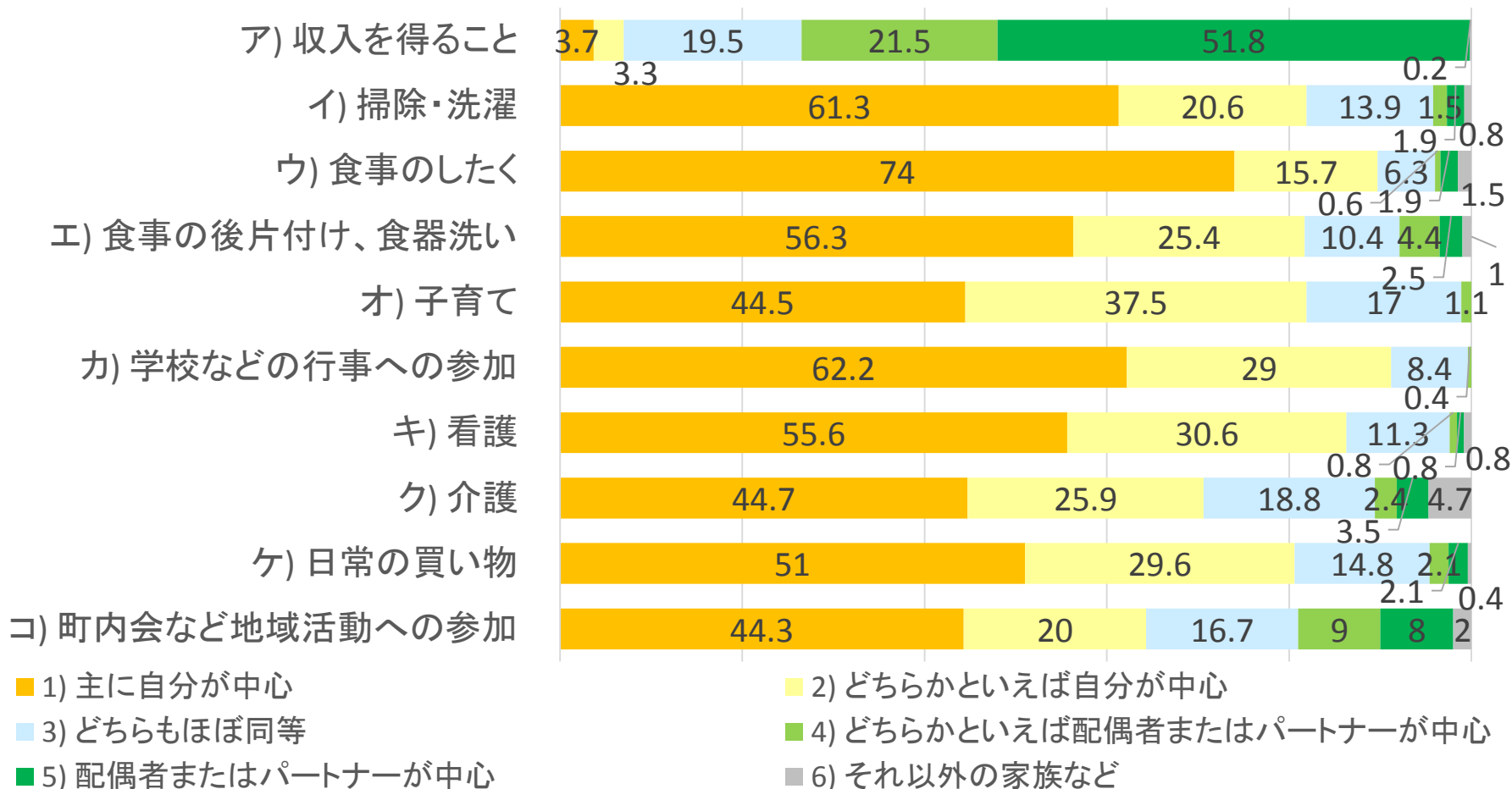
家庭内での分担状況:「自分が中心」サマリー

- 家庭内での家事等の分担状況について〈自分が中心〉となっている割合を項目別にみると、女性においては家事・子育て関連項目で8～9割台、介護と地域活動でも6～7割を占めている。
- 同じく男性を見ると、「収入を得ること」のみ〈自分が中心〉が高く、84.3%である。
(いずれも「していない」を除外して算出した割合。次頁以降も同様。)



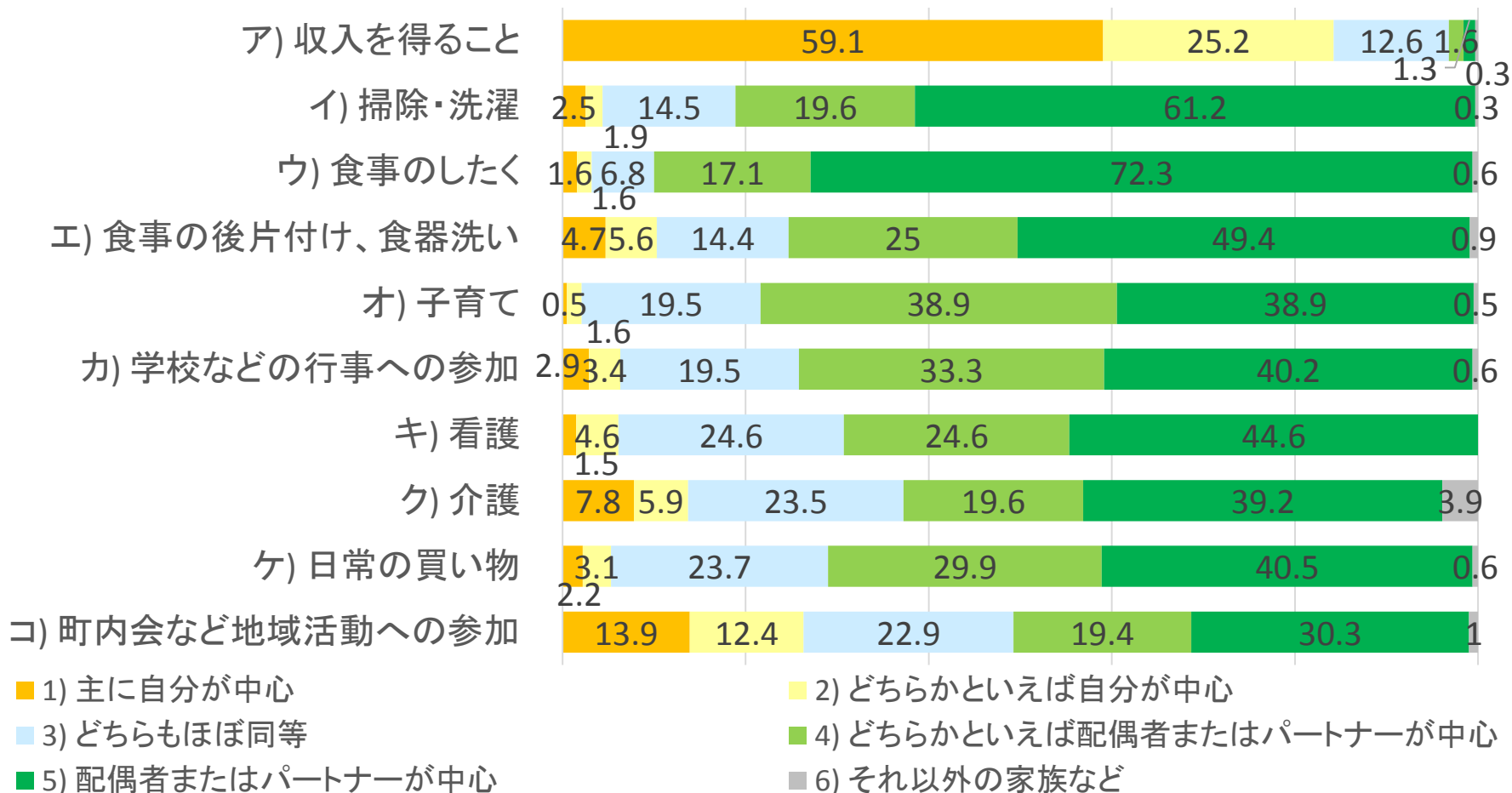
家庭内での分担状況（女性）

- 項目別に回答内訳を見ると、女性で「主に自分が中心」の割合が最も高いのは、「食事のしたく」で74%。「学校などの行事への参加」62.2%、「掃除・洗濯」61.3%と続いている。



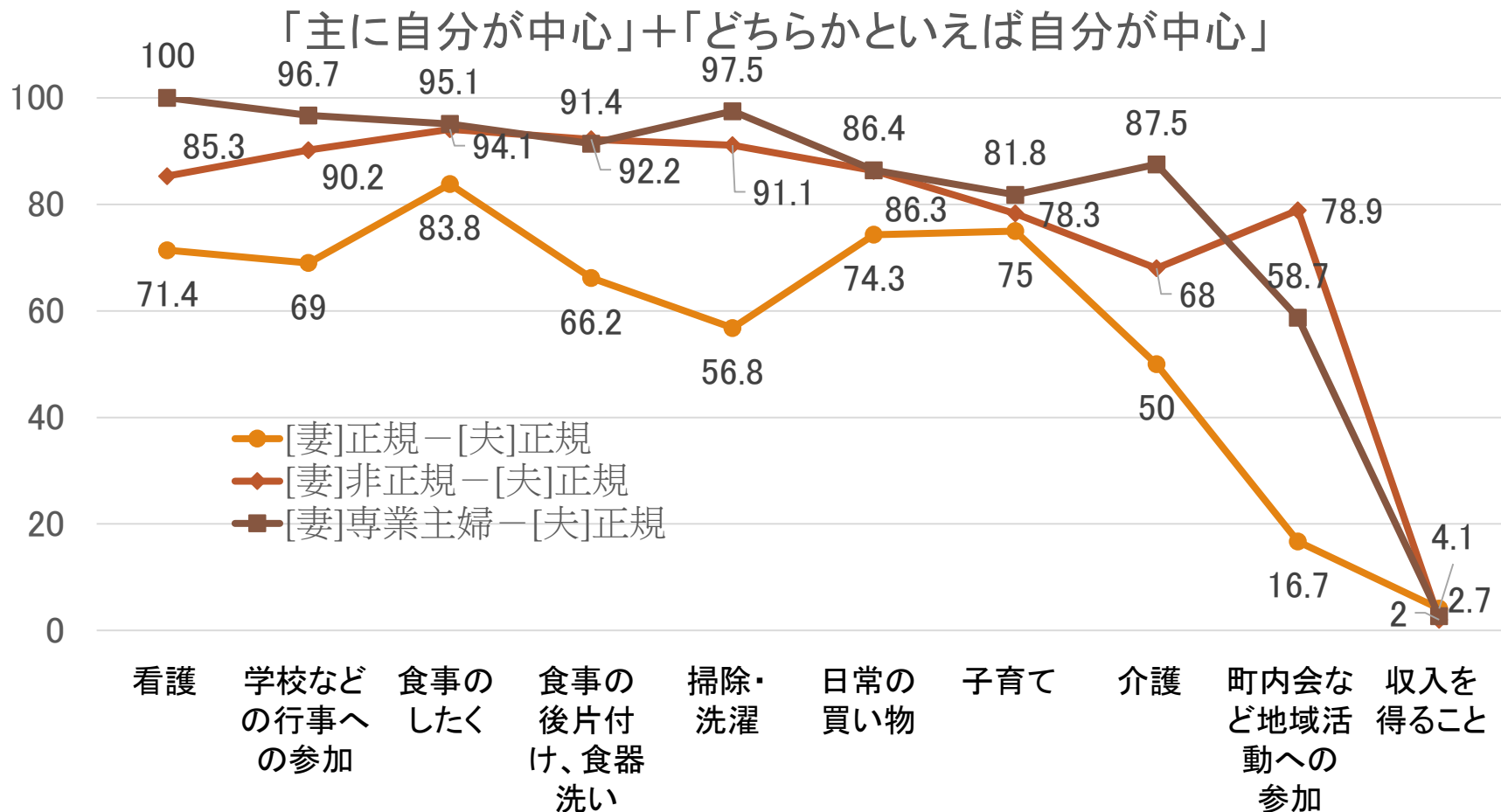
家庭内での分担状況(男性)

- 男性においては、「収入を得ること」以外の項目はすべて〈配偶者またはパートナー中心〉が多数派を占めている。家事・子育て関連項目で〈自分が中心〉との回答は、いずれも1割前後と低調。



家庭内での分担状況(女性、夫婦就業形態別)

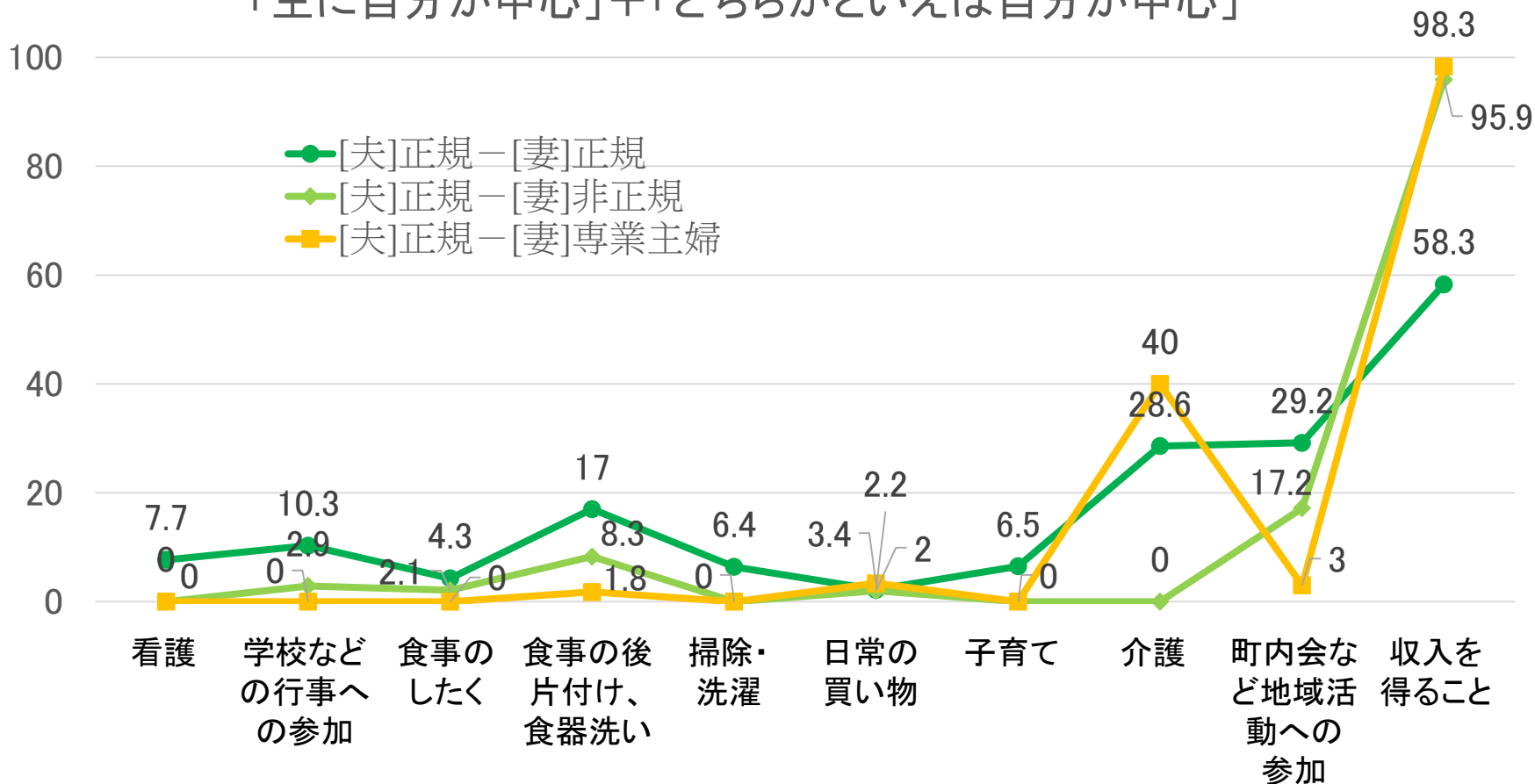
- 夫婦の就業形態別で見ると、夫婦共に正規で就業しているパターンの場合でも、ほとんどの項目で女性の半数～8割台が「自分が中心」と回答。
- 妻が非正規または専業主婦の場合はさらに高く、8～9割台が「自分が中心」と答えている。



家庭内での分担状況(男性、夫婦就業形態別)

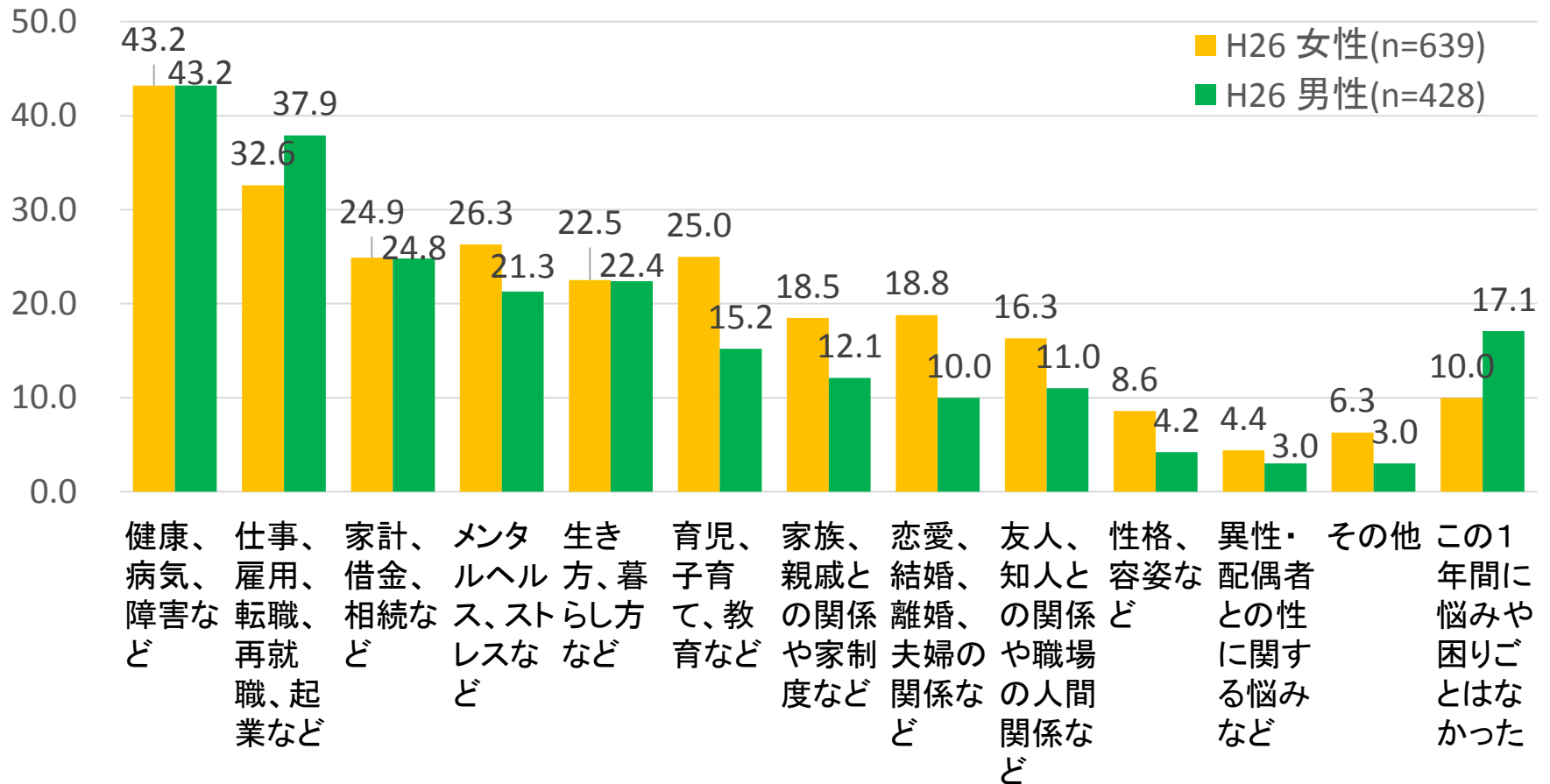
- 男性回答者についても夫婦就業形態別で見ると、夫婦共に正規就業の場合でも、家事関連項目では「食事の後片付け、食器洗い」が17%、他の家事関連項目は1割未満か1割前後に留まっている。

「主に自分が中心」+「どちらかといえば自分が中心」



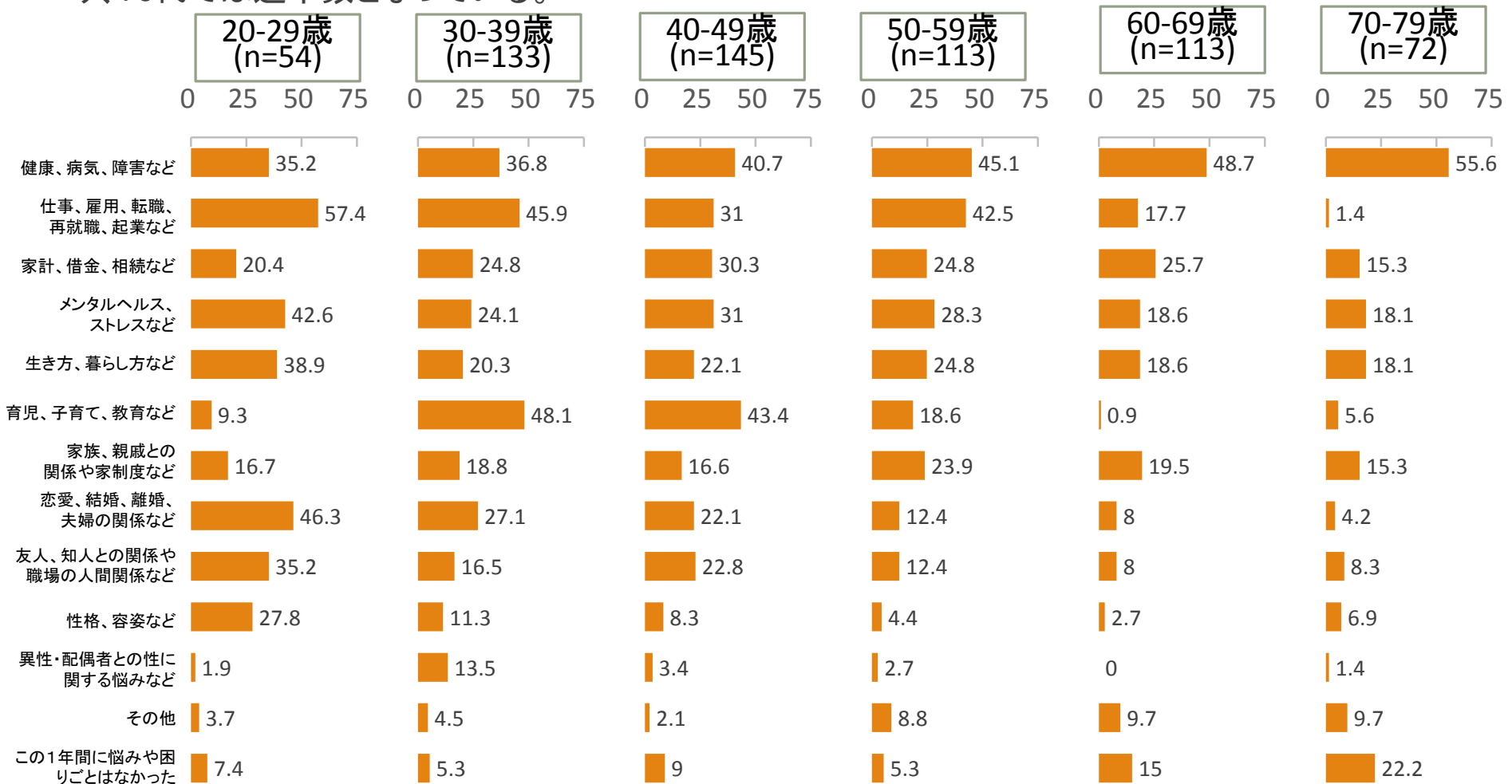
この1年間の悩みごと、困りごと

- 男女ともに、「健康、病気、障害」が4割台で最も高く、「仕事、雇用、転職、再就職、起業など」が3割台で続いている。
- 全般的に女性のほうが子育てや夫婦・人間関係などを挙げる割合が高く、反対に男性は「この1年間に悩みや困りごとはなかった」との回答が女性よりも高くなっている。



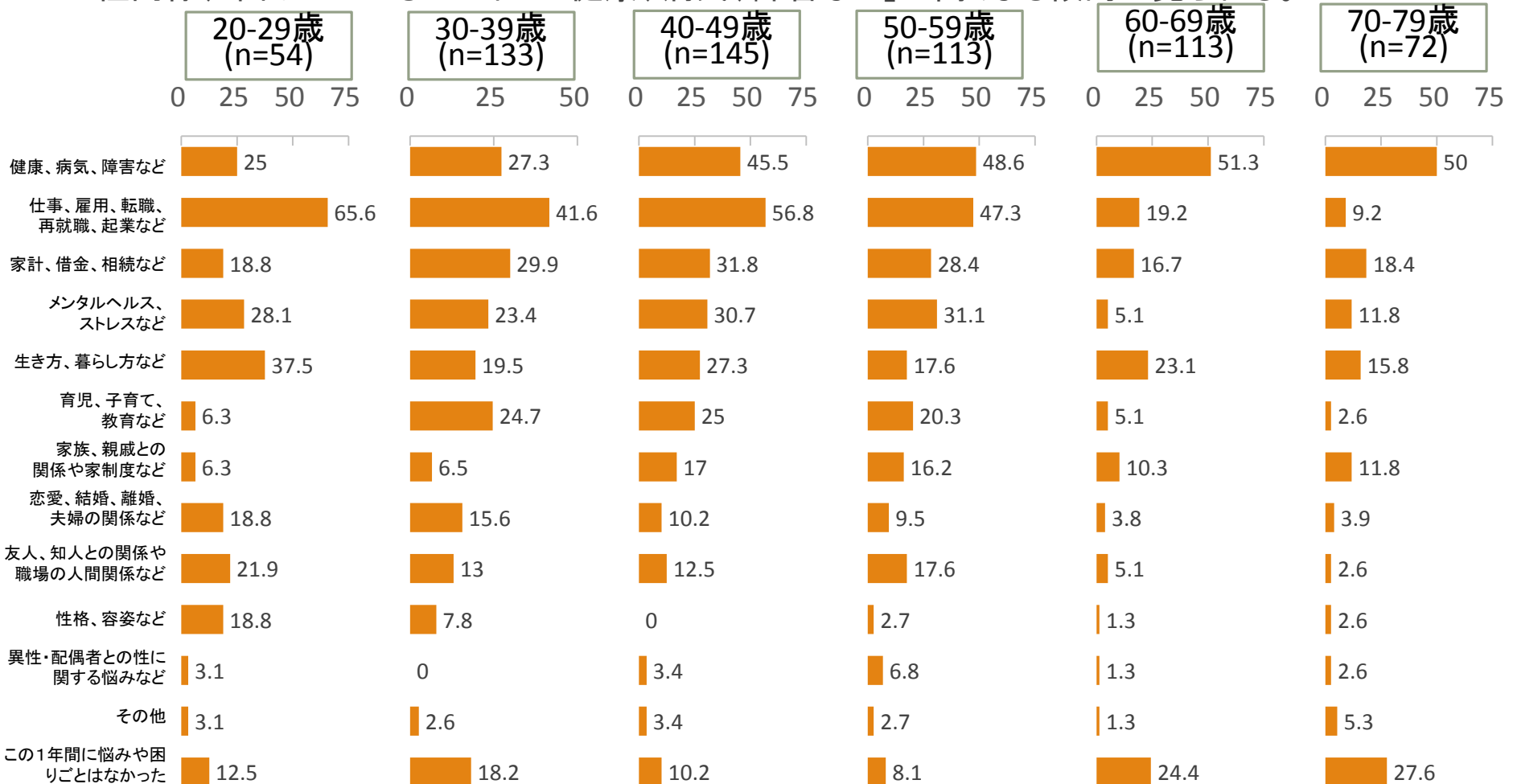
この1年間の悩みごと、困りごと(女性、年代別)

- 女性の年代別に見ると、30～40代で「育児、子育て、教育」が4割以上と高くなっている。
- 当然のことではあるが、年代が上がるにつれて「健康、病気、障害など」を挙げる人の割合が高まり、70代では過半数となっている。



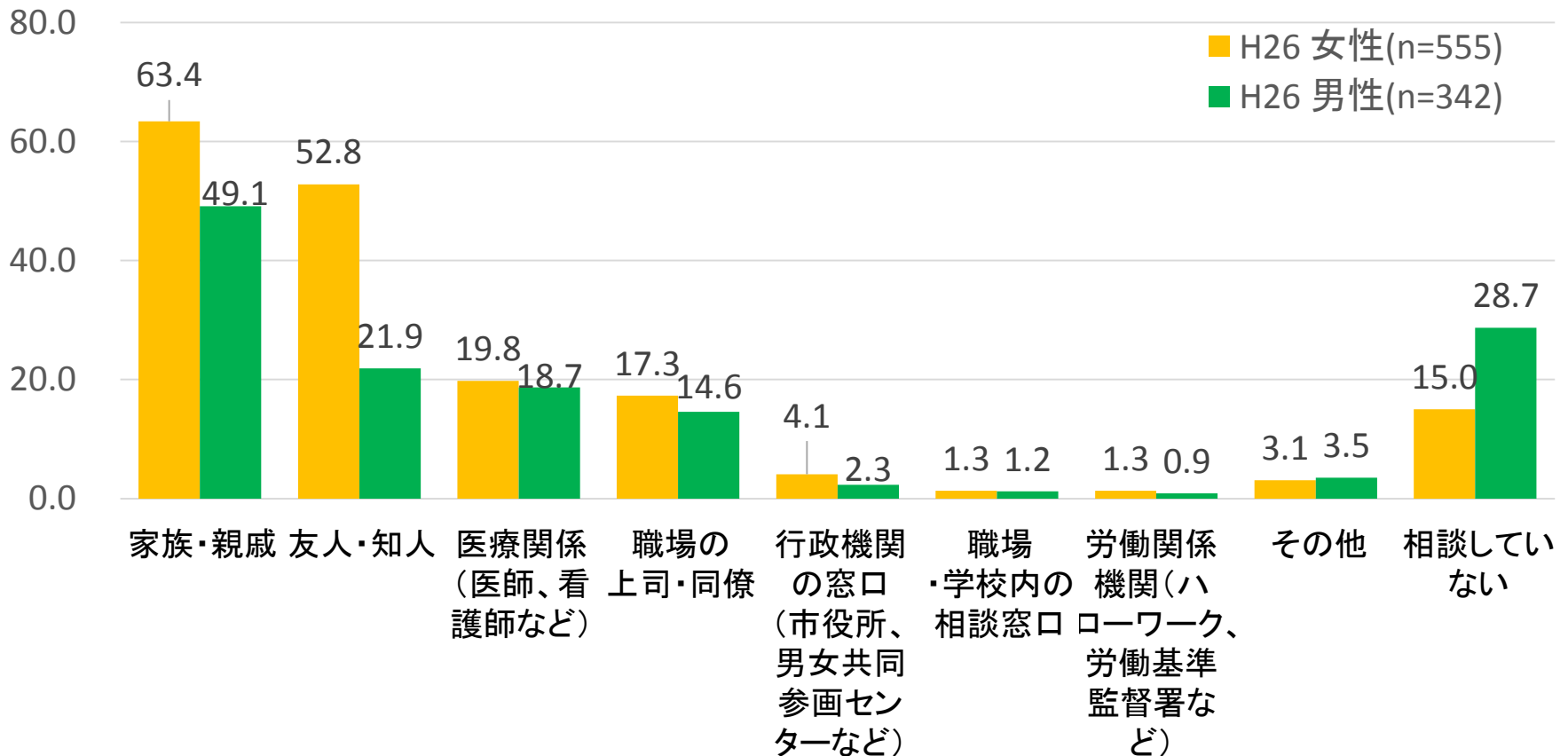
この1年間の悩みごと、困りごと(男性、年代別)

- 男性では、女性に比して、年代ごとの違いが大きくなり、50代までは「仕事、雇用、転職、再就職、起業など」が上位を占めている。
- 女性同様、年代が上がるにつれて「健康、病気、障害など」が高くなる傾向が見られる。



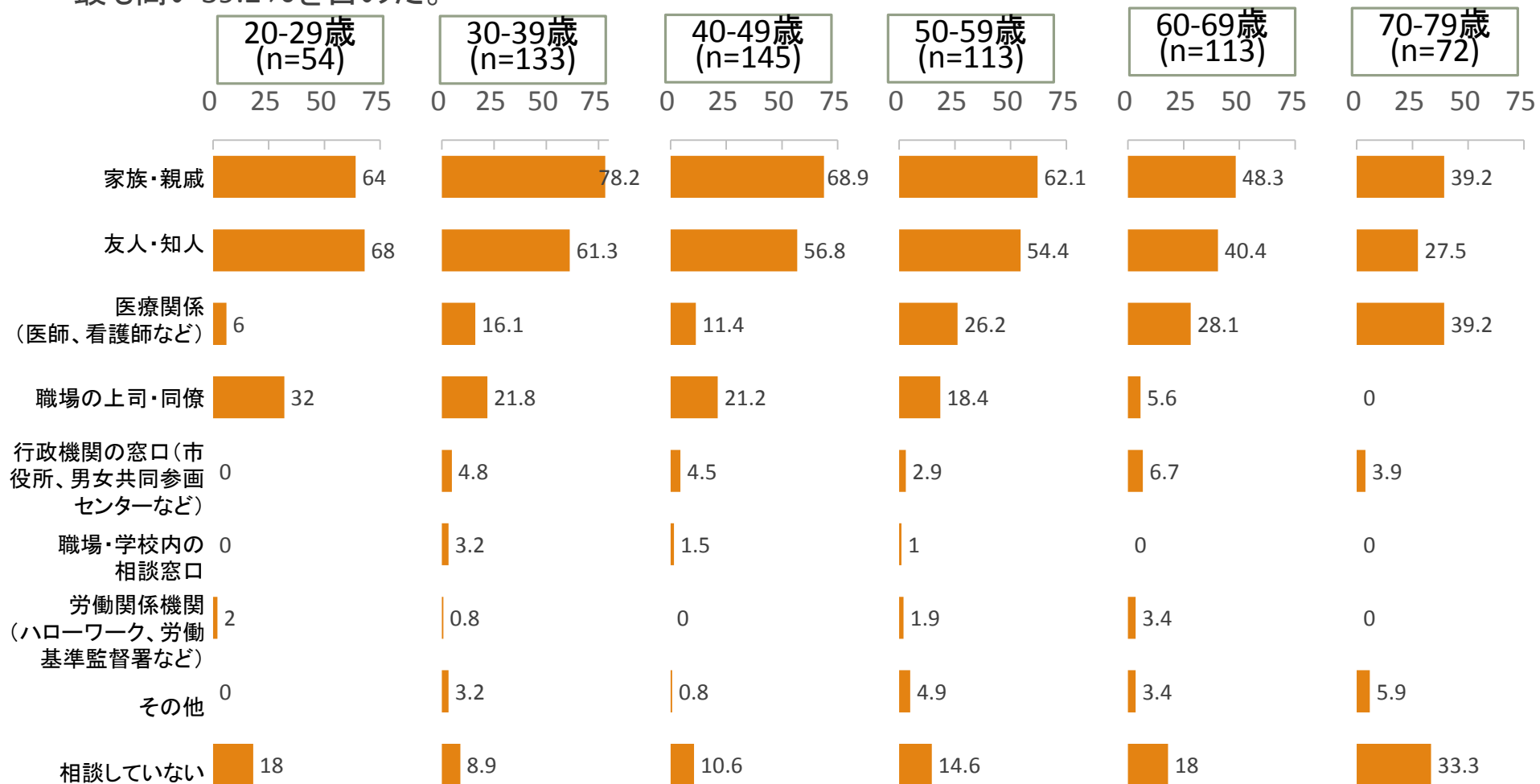
悩みや困りごとの相談先

- 悩みや困りごとがある場合の相談先として、男女共に「家族・親戚」が最も高くなっているが、女性では2番目に52.8%が「友人・知人」を挙げているが、男性では21.9%に留まっている。
- 「相談していない」は、男性では28.7%と、女性15%より13.7ポイント高くなっている。



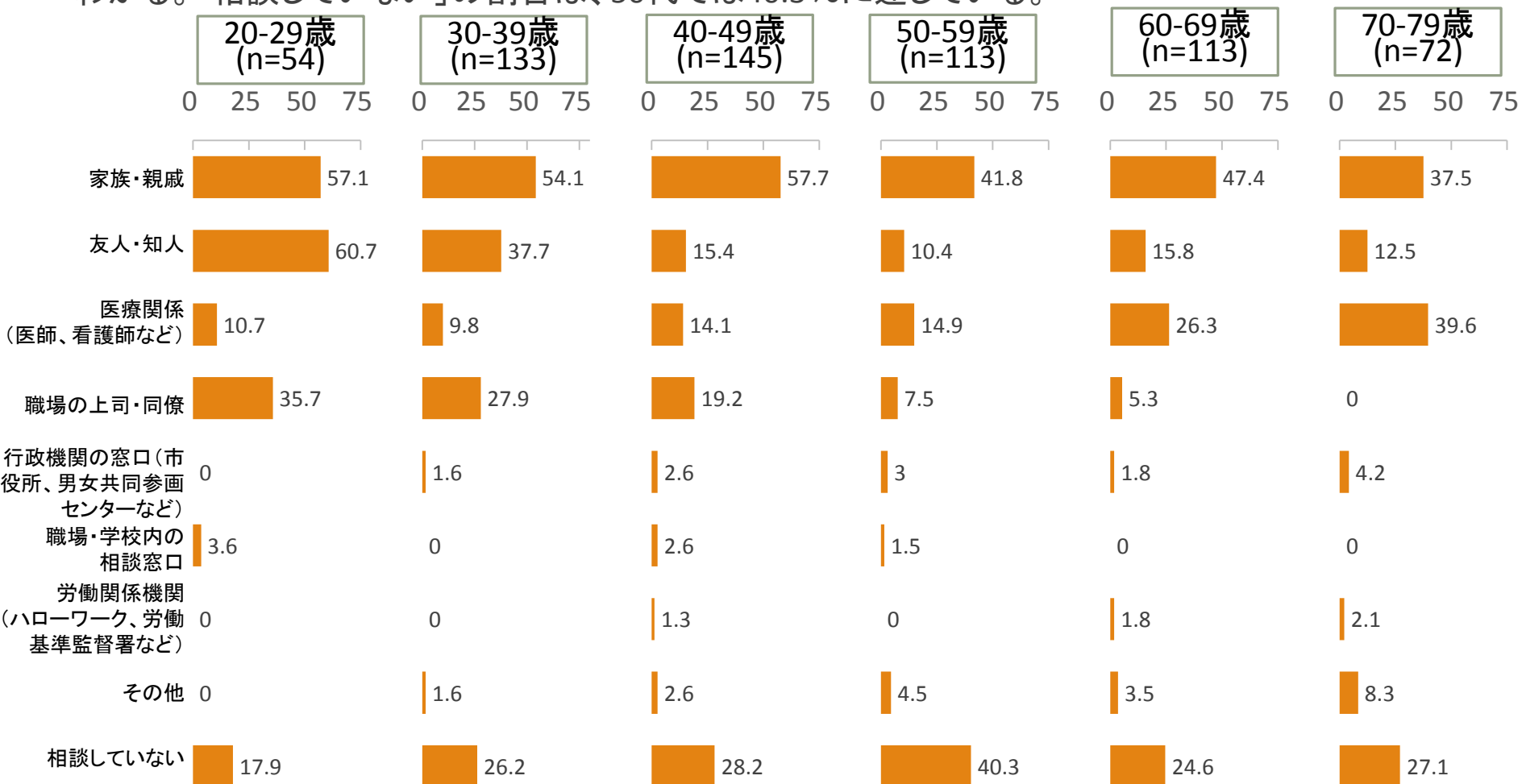
悩みや困りごとの相談先(女性、年代別)

- 女性について年代別に相談先を見ると、年代が上がるにしたがい「職場の上司・同僚」は低下傾向にある。また、50代以降で「医療機関」の割合が高くなる傾向にあり、70代では「家族・親戚」と並んで最も高い39.2%を占めた。



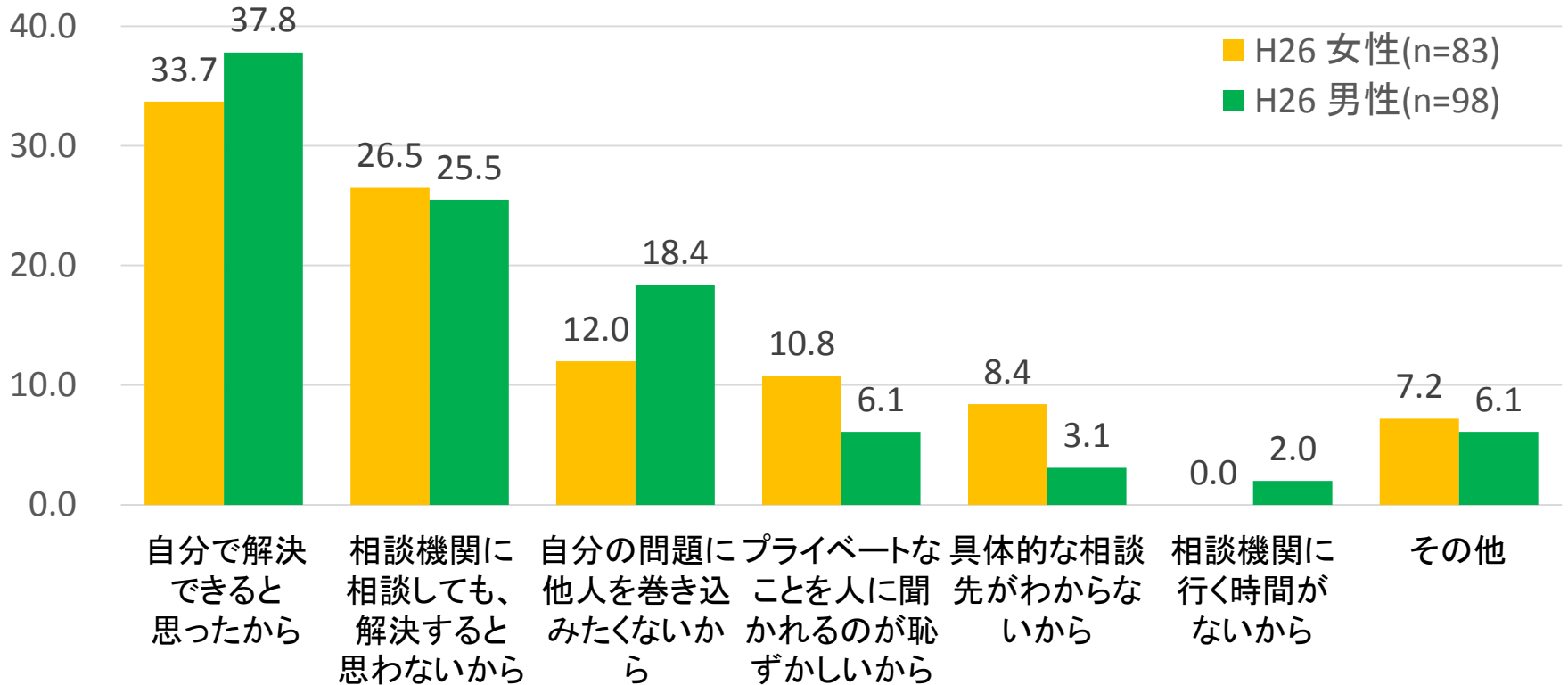
悩みや困りごとの相談先(男性、年代別)

- 男性は、相談先については年代ごとの差異が女性よりも大きく、20代で約6割を占め「友人・知人」は40代以降は1割台と急激に低下し、40代～60代は「家族・親戚」が主要な相談先になっていることがわかる。「相談していない」の割合は、50代では40.3%に達している。



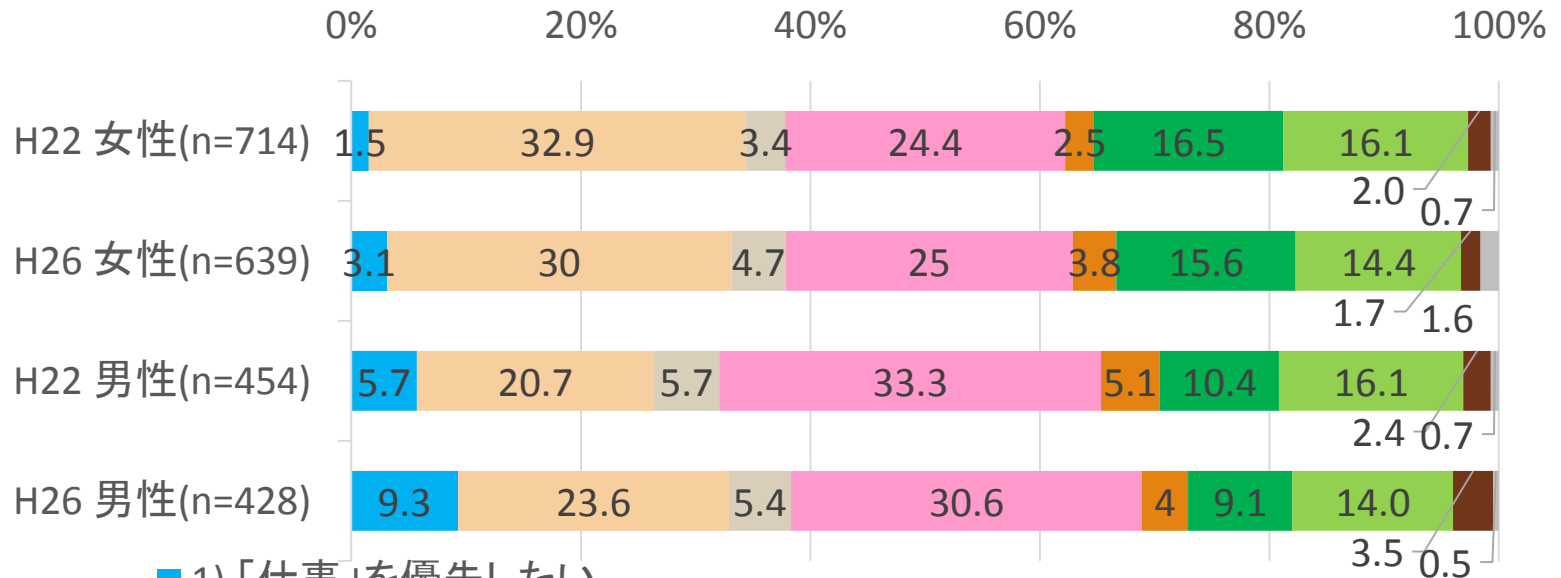
相談しなかった理由

- 相談しなかったという回答者にその理由を尋ねたところ、男女とも「自分で解決できると思ったから」が3割台で最も高く、「相談機関に相談しても、解決すると思わない」が2割台で続いた。
- 男性では、「自分も問題に他人を巻き込みたくない」が18.4%で、女性よりも6.4ポイント高くなっている。



生活優先度の希望

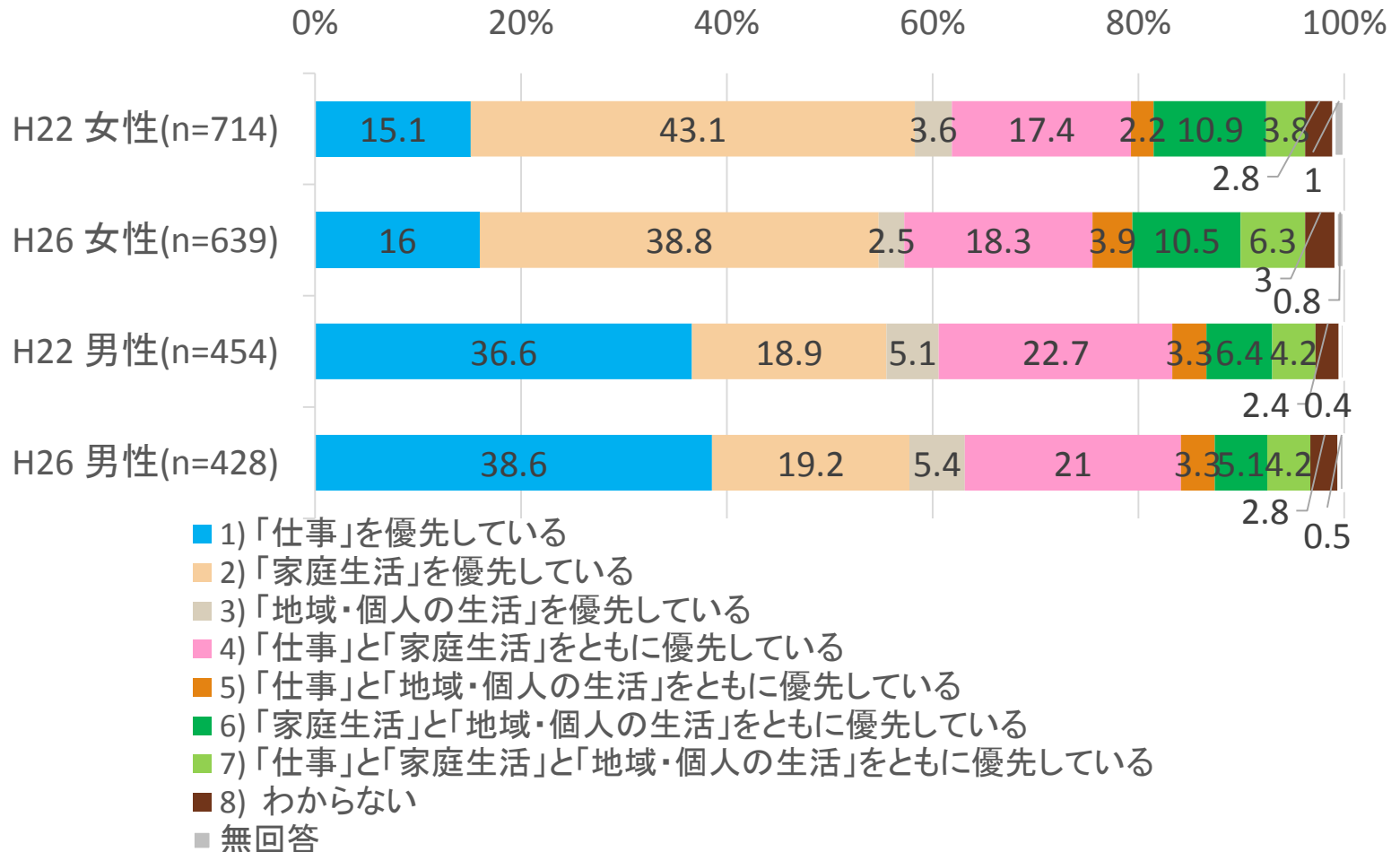
- ワークライフバランスについての希望は、前回調査からの大きな変化はなく、女性では「家庭生活優先派」が最も高く30%、男性では「仕事と家庭生活優先派」が最も高く約3割となっている。
- 前回調査と比較すると、男女共に「仕事優先派」が微増し、女性では3.1%、男性9.3%となった。



- 1) 「仕事」を優先したい
- 2) 「家庭生活」を優先したい
- 3) 「地域・個人の生活」を優先したい
- 4) 「仕事」と「家庭生活」をともに優先したい
- 5) 「仕事」と「地域・個人の生活」をともに優先したい
- 6) 「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先したい
- 7) 「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先したい
- 8) わからない

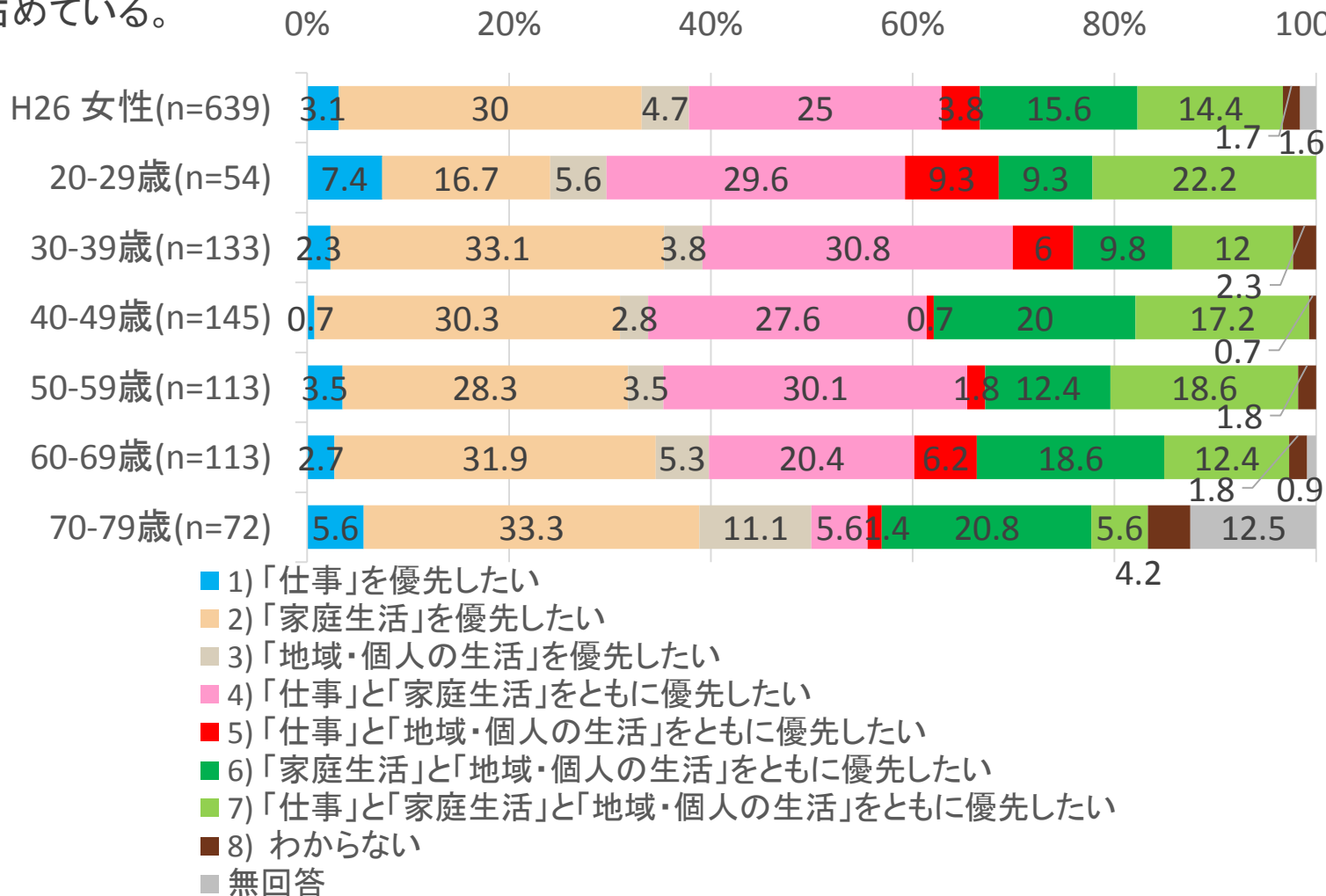
生活優先度の現実

- ワークライフバランスについて、現実としては女性は〈家庭生活優先〉が、男性では〈仕事優先〉が、それぞれ4割弱で最も多くなっている。



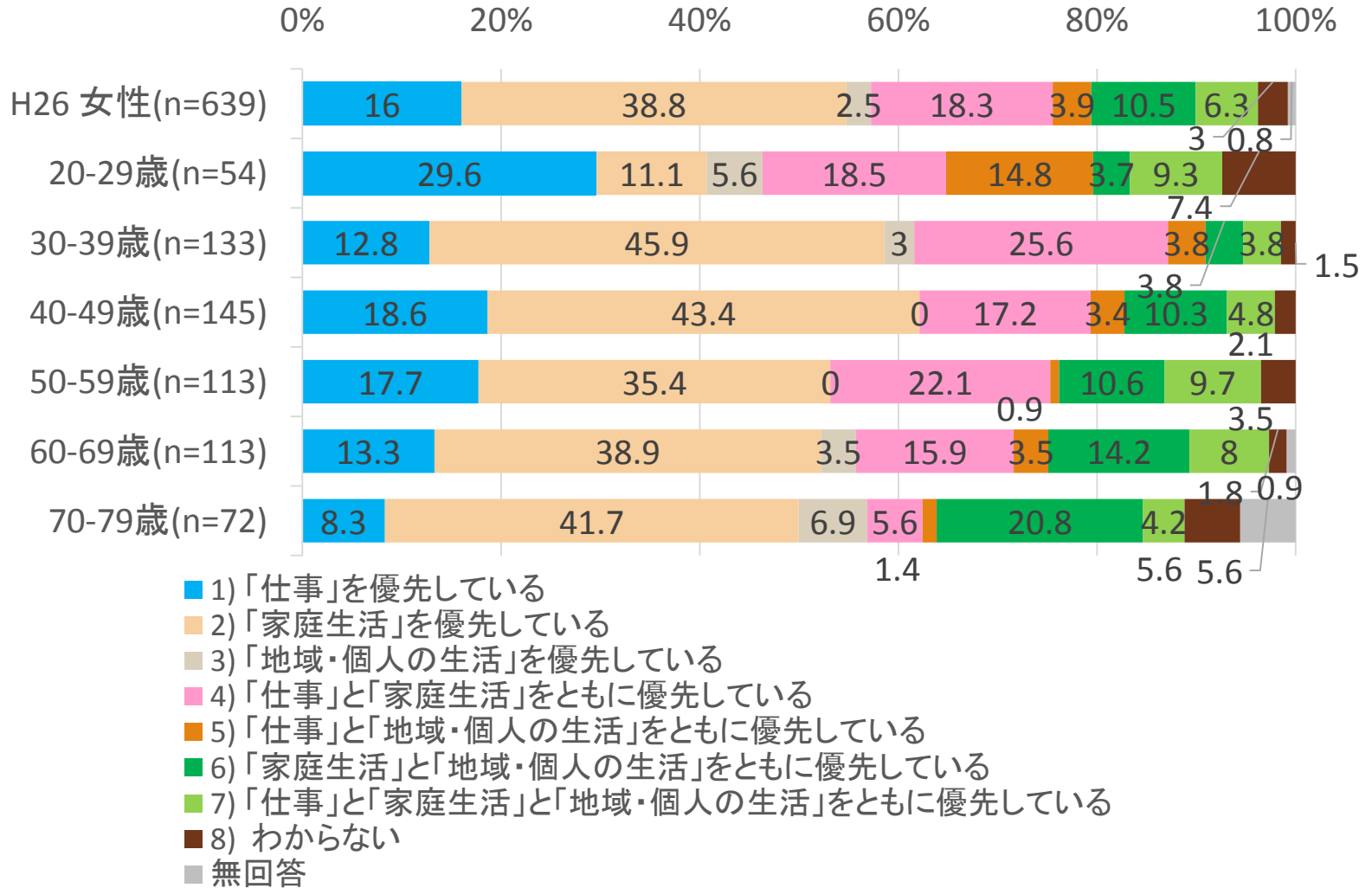
生活優先度の希望(女性、年代別)

- 女性の年代別にワークライフバランスの希望を見ると、〈家庭生活優先〉は20代で16.7%となっているが、ほかの年代では3割前後を占めている。〈仕事と家庭生活優先〉は50代までは2割代後半～約3割を占めている。



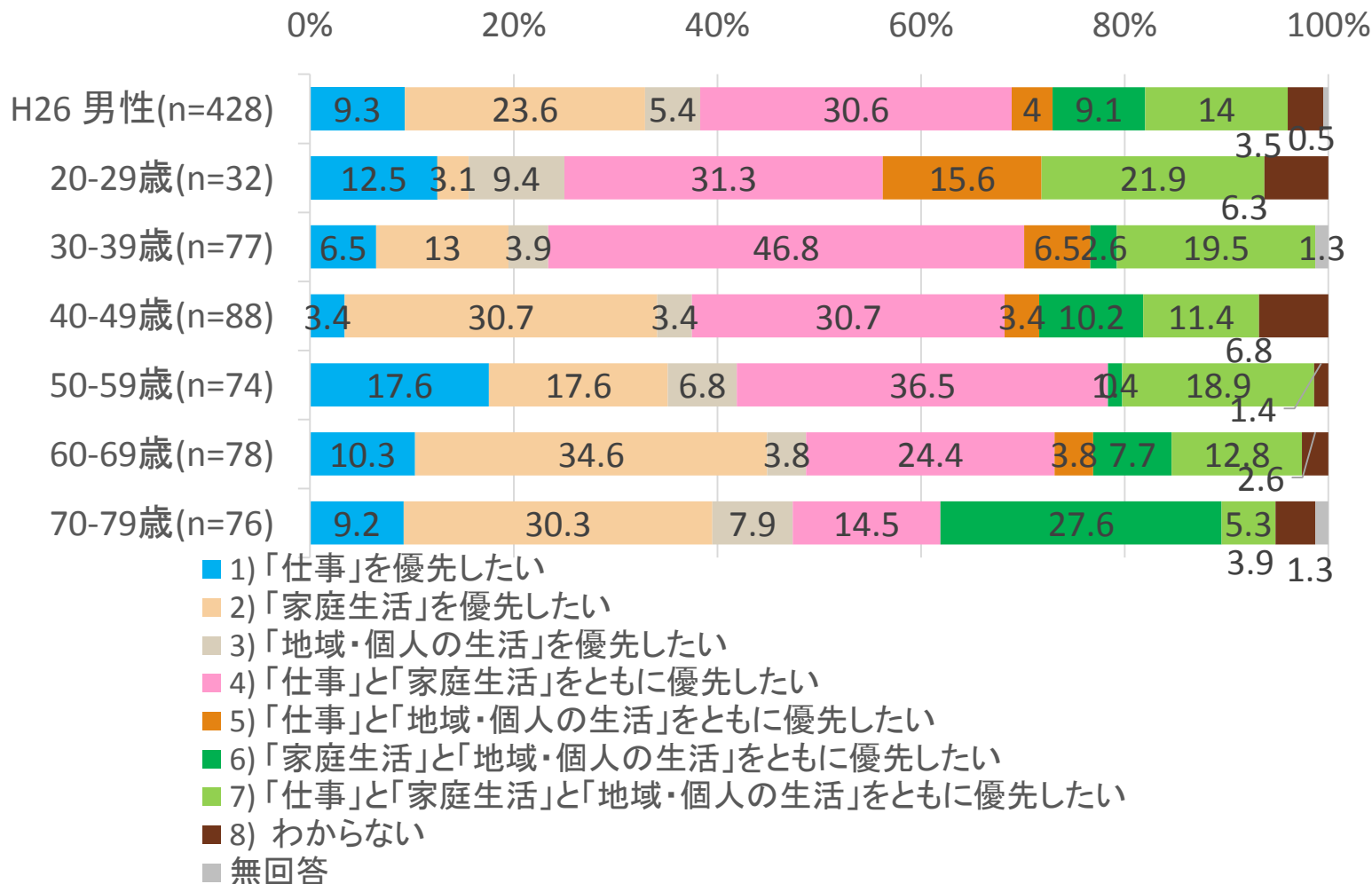
生活優先度の現実(女性、年代別)

- 同じく女性の年代別に、その現実を見ると、20代では<仕事優先>が高いが、出産・子育てが増加する30代以上では<家庭生活優先>が3~4割台を占めている。



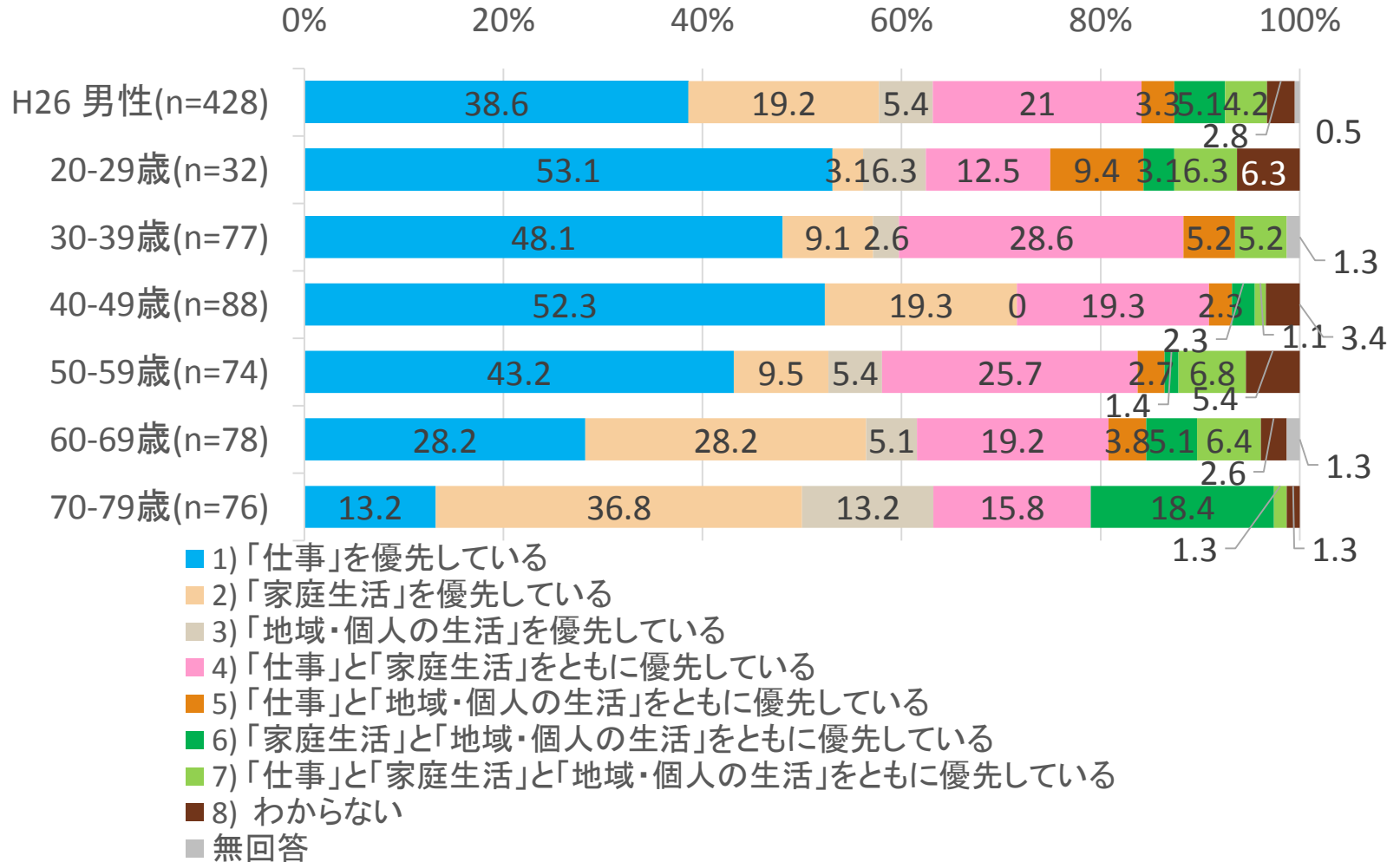
生活優先度の希望（男性、年代別）

- 男性の年代別で見ると、20～50代までは「仕事と家庭生活優先」の30～40%台となっているほか、40代と60代以上で「家庭生活優先」も30%台を占めている。



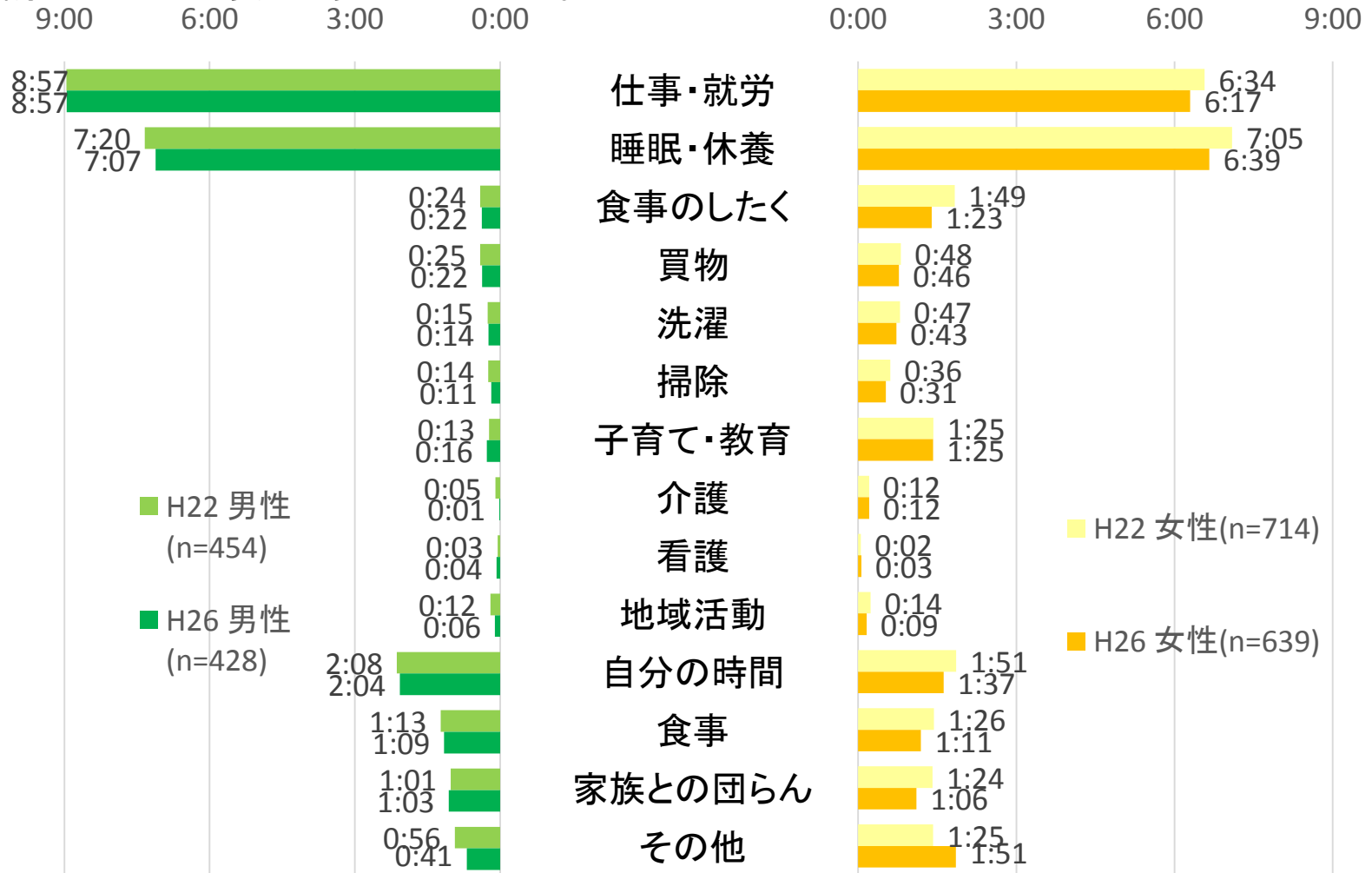
生活優先度の現実：男性、年代別

- 男性の年代別に、ワークライフバランスの現実を見ると、40代までは半数前後が「仕事優先」の生活になっていることが分かる。



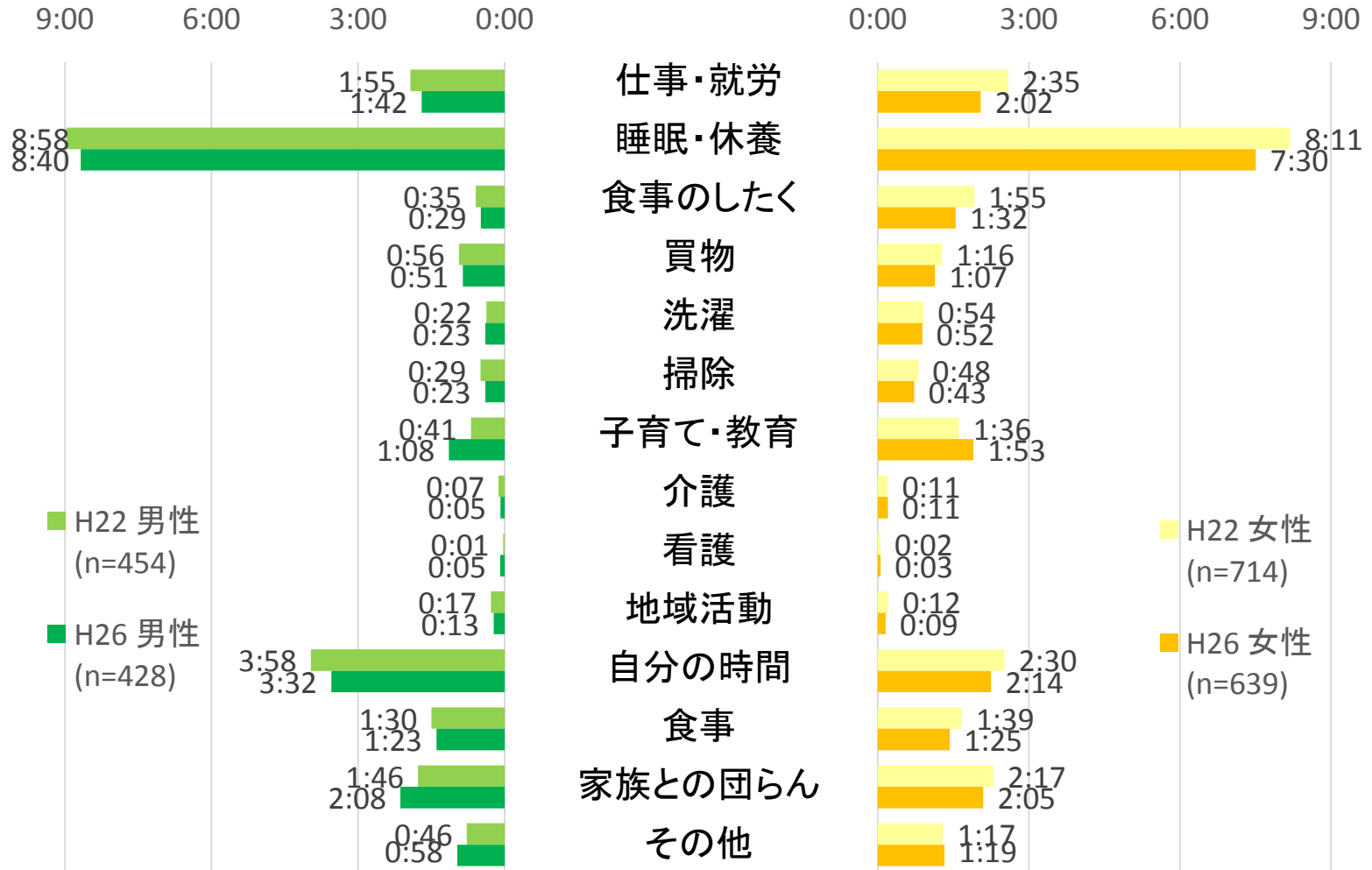
生活時間(平日)

- 実際の平日の生活時間は、「仕事・就労」が男性では約9時間、女性では6時間超であり、家事関連項目は女性がほとんどの項目で男性よりも多く、「食事のしたく」と「子育て・教育」では1時間以上の開きがある。
- 前回調査との大きな変化は見られなかった。



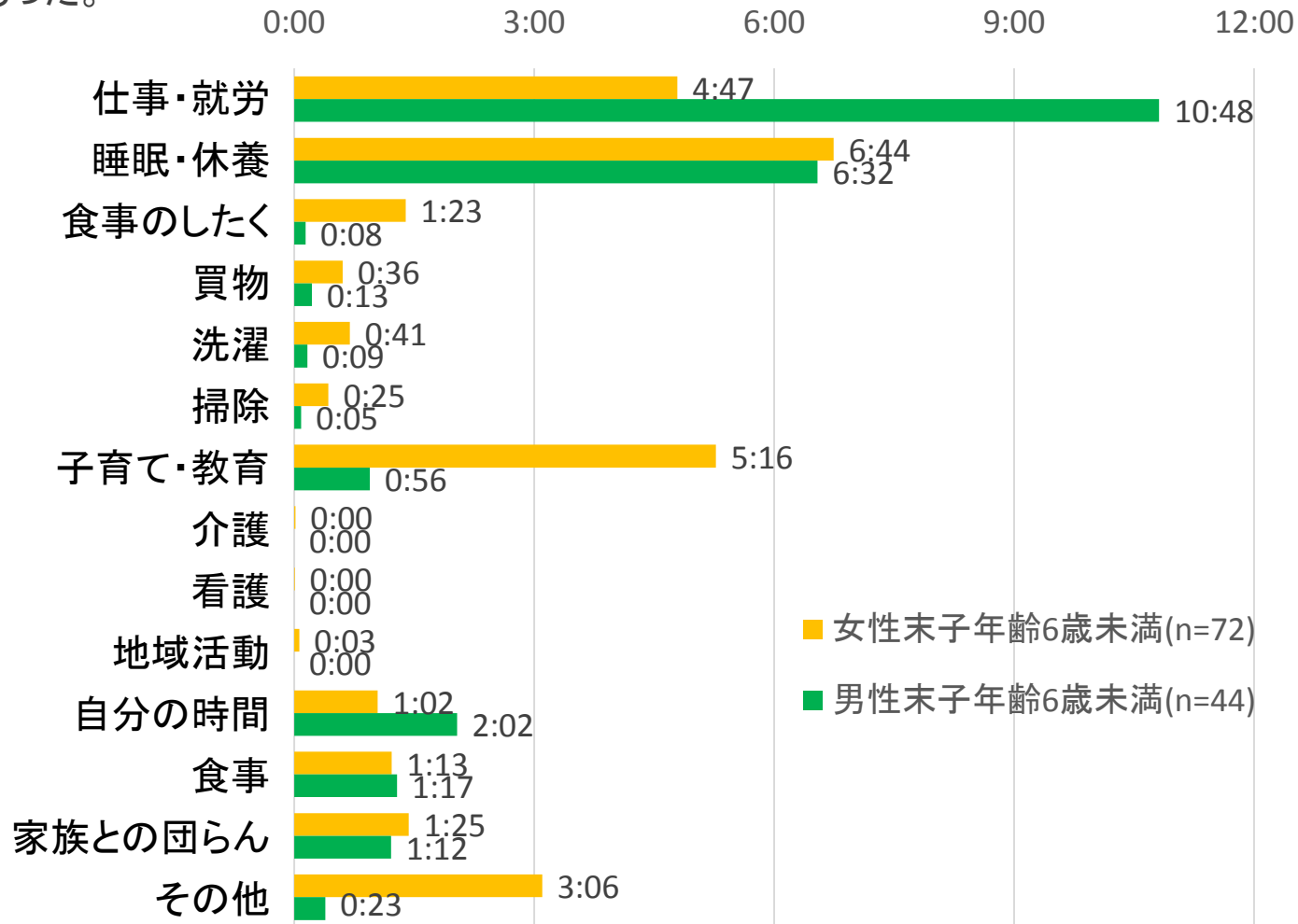
生活時間(休日)

- 休日でも女性のほうが男性よりも家事時間は多く、反対に男性は「自分の時間」が女性よりも高くなっている。



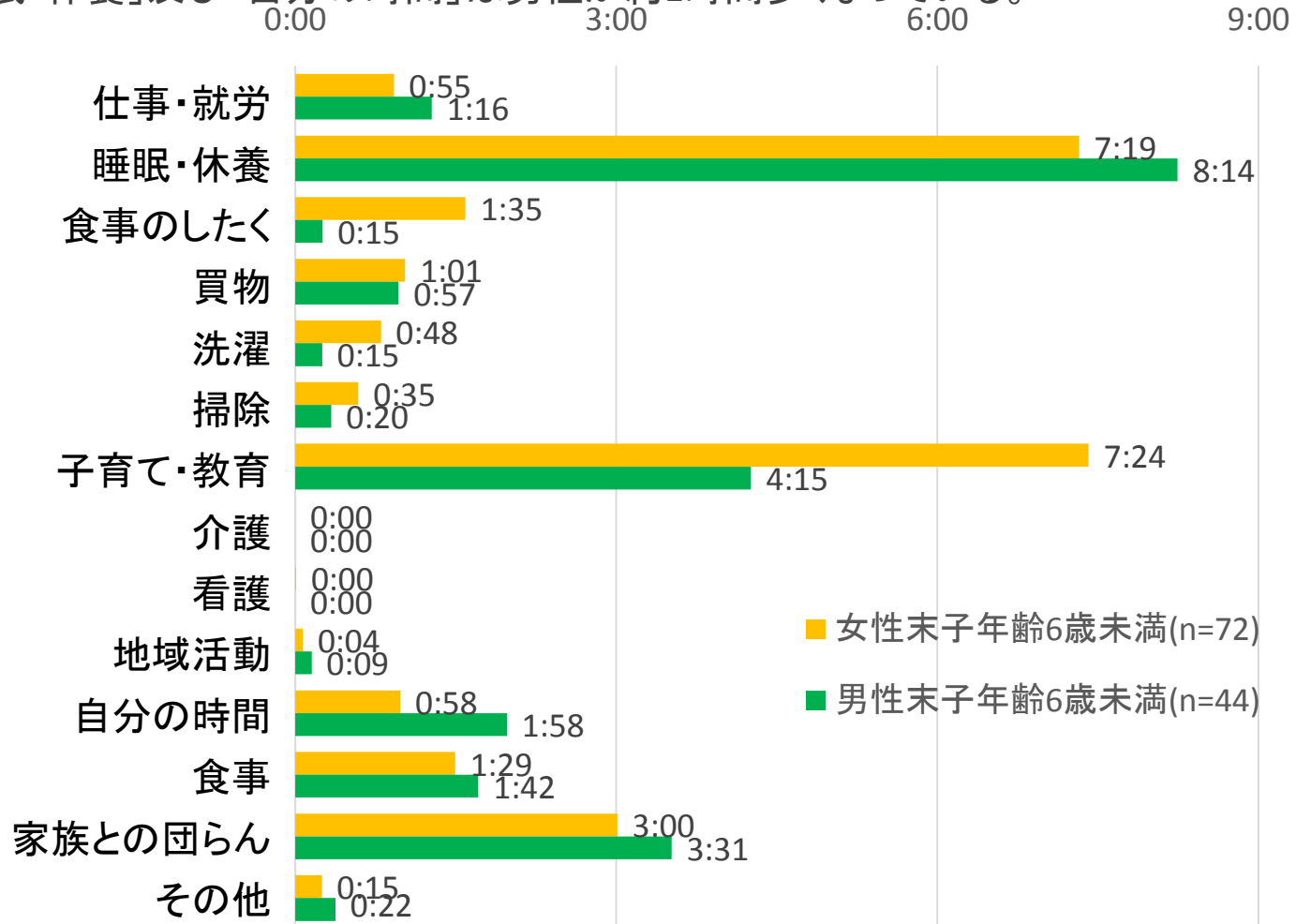
生活時間(平日)

- 平日の生活時間を、末子年齢が6歳未満の回答者に限定してみると、男性はより「仕事・就労」時間が長く11時間近くに達している。他方、女性では「子育て・教育」が5時間超であり、男性と4時間以上の開きがあった。



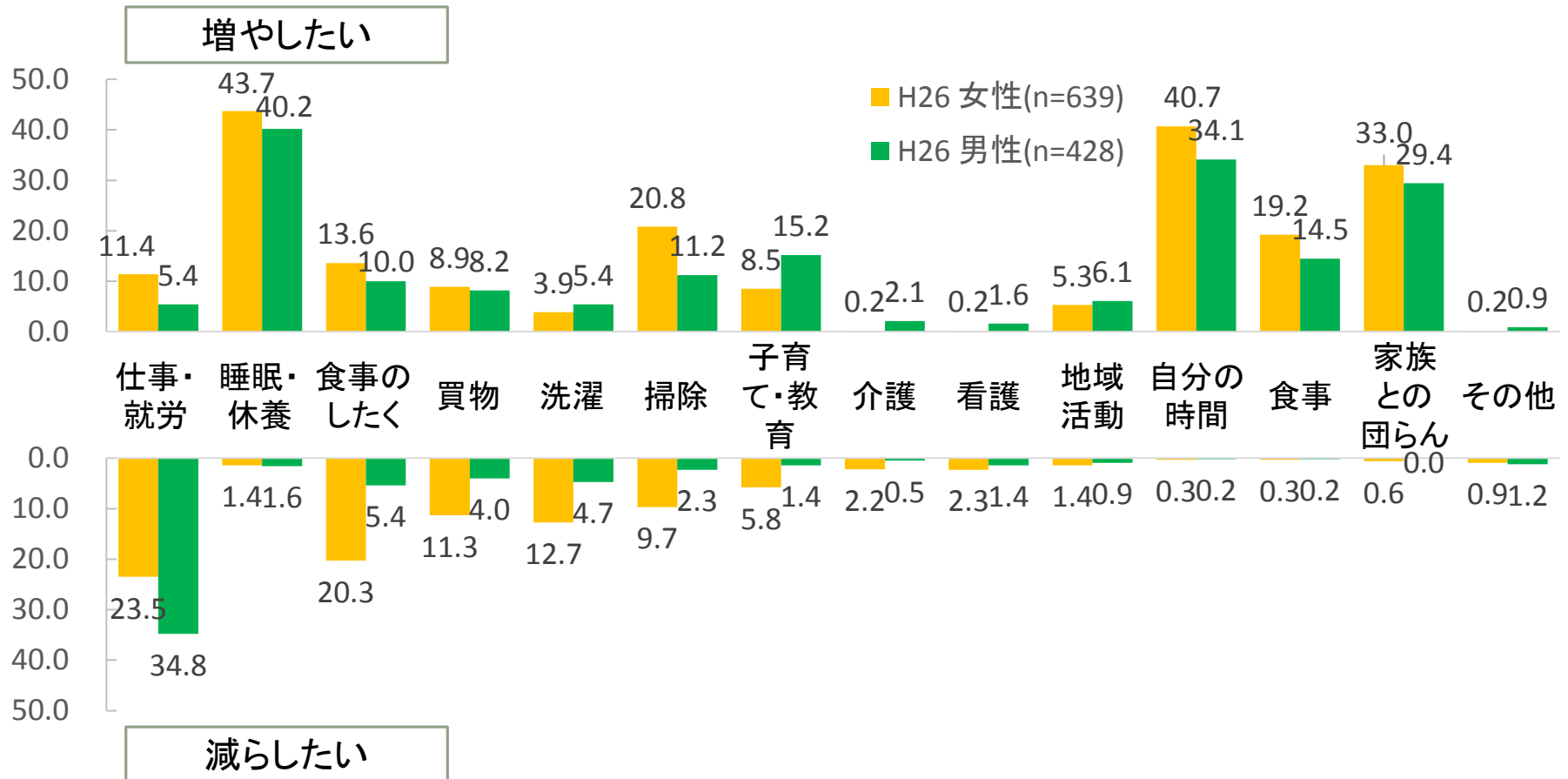
生活時間(休日)

- 同じく、末子年齢6歳未満の回答者について休日の生活時間を見ると、「子育て・教育」は女性では7時間24分に対し男性は4時間15分で、休日でも3時間あまりの開きがある。
- 他方、「睡眠・休養」及び「自分の時間」は男性が約1時間多くなっている。



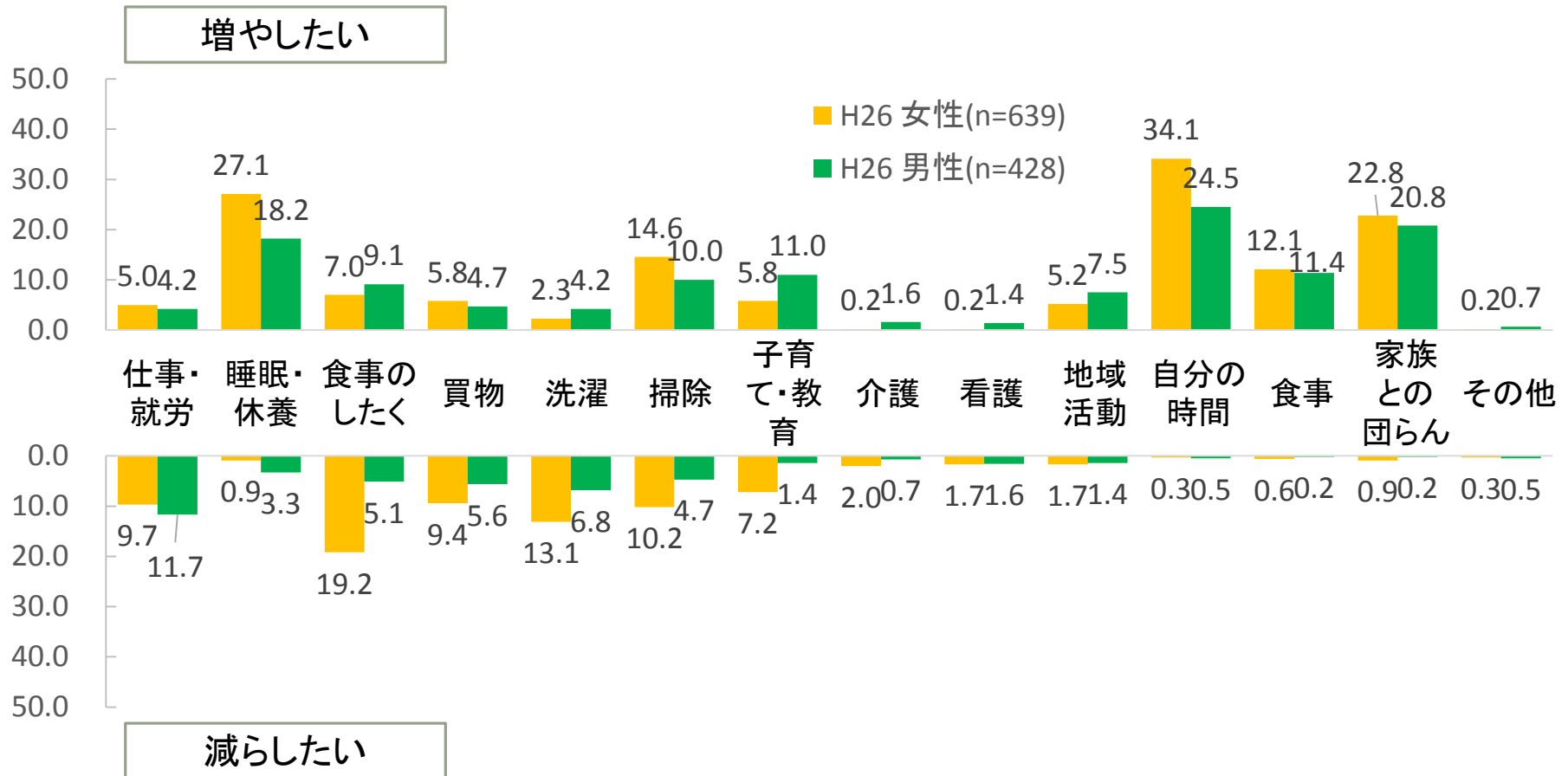
生活時間の満足度：平日

- 平日の生活時間については、「睡眠・休養」を増やしたいという人が男女とも4割以上、「自分の時間」、「家族との団らん」がそれに続いている。
- 反対に、減らしたいという回答が多かったのは「仕事・就労」で、男性の34.8%を占めている。また、女性では「食事のしたく」、「買物」、「洗濯」、「掃除」でも1～2割が減らしたいと回答していた。



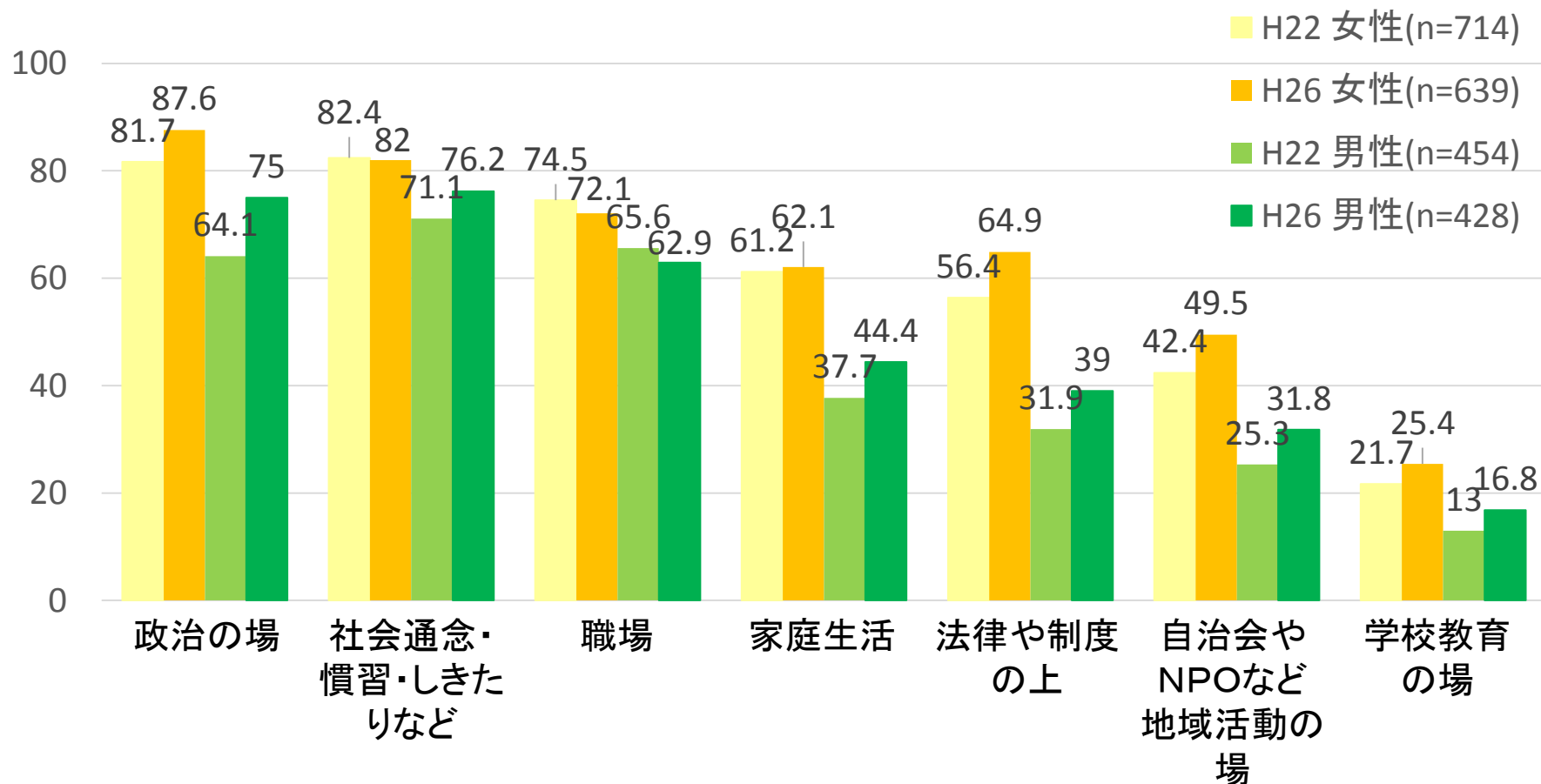
生活時間の満足度：休日

- 休日では、増やしたいという回答が最も多かったのは「自分の時間」で、女性では34.1%、男性では24.5%となっている。
- 減らしたい項目としては、女性の2割近くが「食事のしたく」を挙げている。



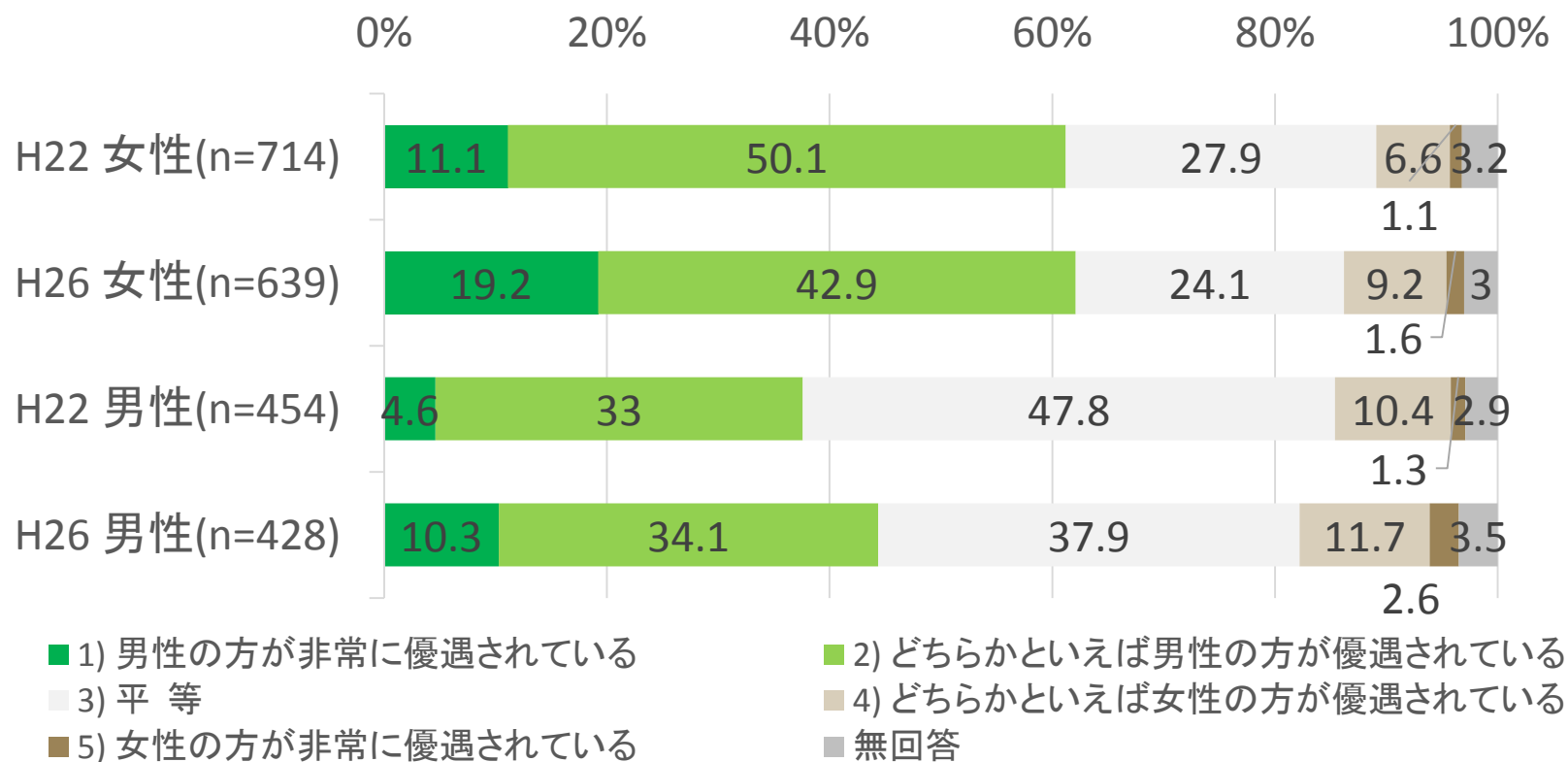
男女の地位の平等感：男性優遇サマリー

- 領域別に男女の平等感を尋ねたところ、「政治の場」、「社会通念・慣習・しきたりなど」、「職場」が男女とも6割以上が〈男性が優遇されている〉と回答した。
- 「家庭生活」、「法律や制度の上」、「自治会やNPOなど地域活動の場」については、〈男性が優遇されている〉とする人の割合が、男女で20ポイント前後の開きが見られた。



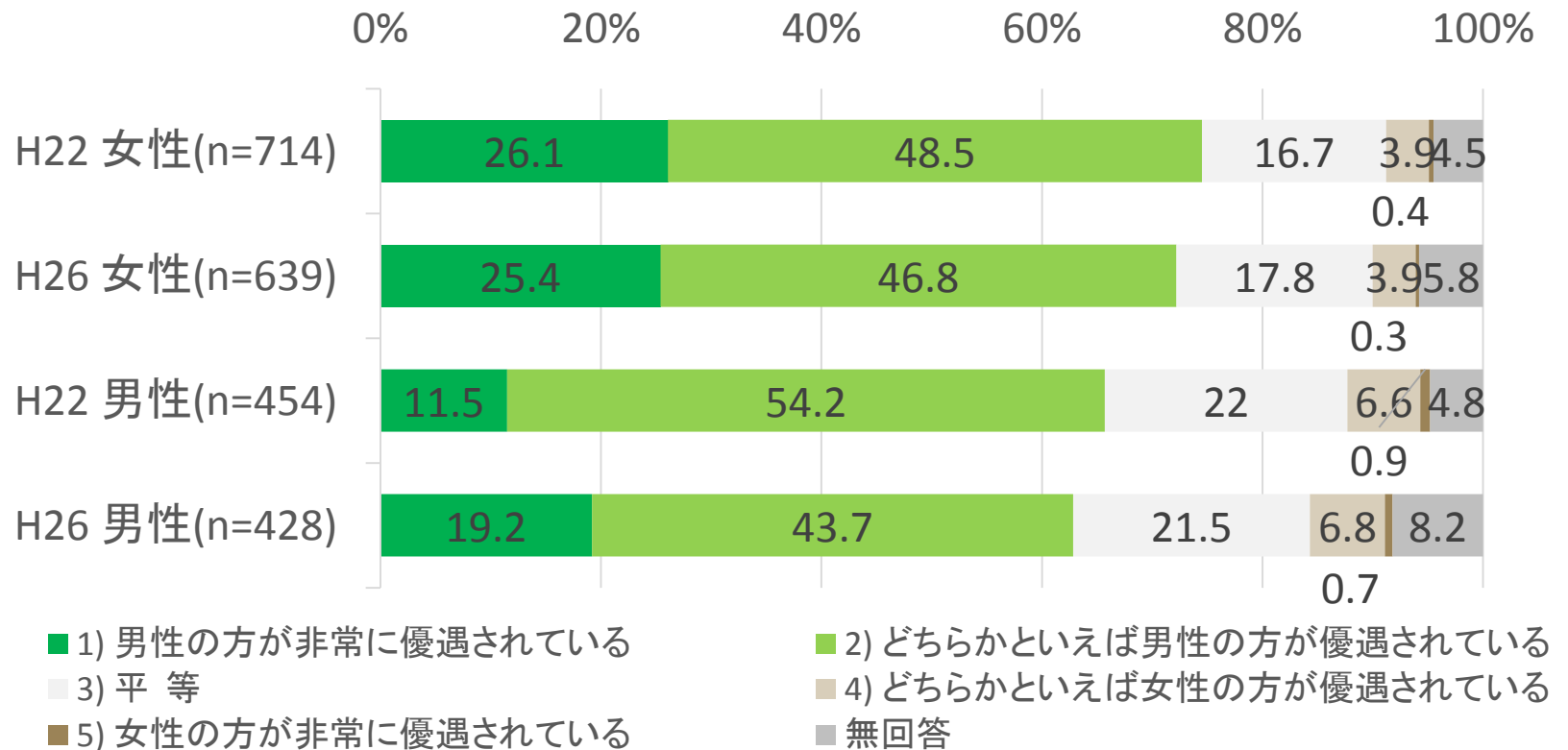
男女の地位の平等感(家庭生活)

- 家庭生活については、〈男性のほうが優遇されている〉との回答が、女性では6割強、男性では4割強となった。
- 前回調査と比べると、男性において〈男性のほうが優遇されている〉との回答がやや増え、〈平等〉との回答は10ポイントほど減少した。



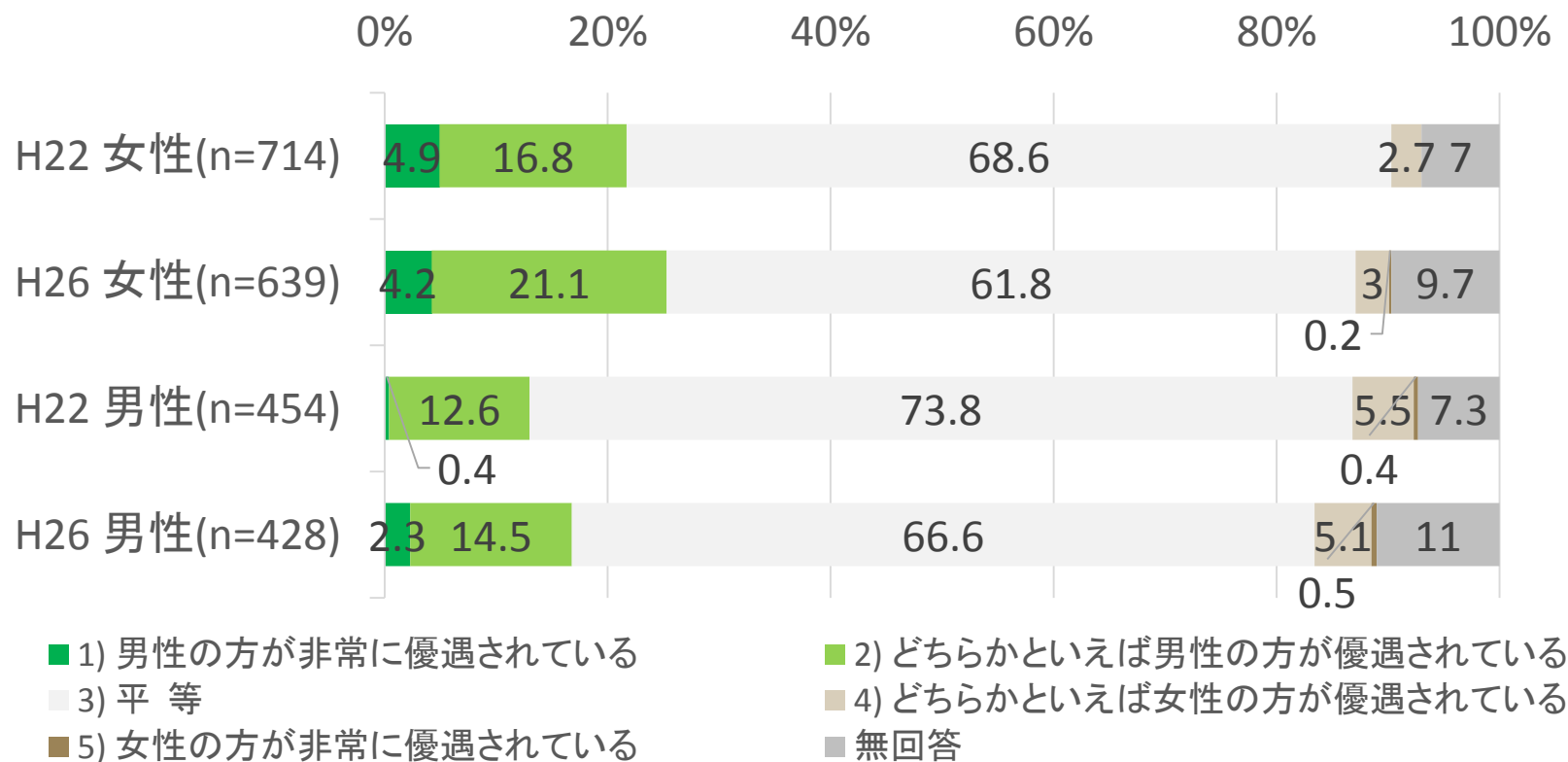
男女の地位の平等感(職場)

- 職場について、女性の7割強、男性の6割強が「男性のほうが優遇されている」と回答。
- 男性では「男性のほうが非常に優遇されている」とする人が11.5%から19.2%に増加している。



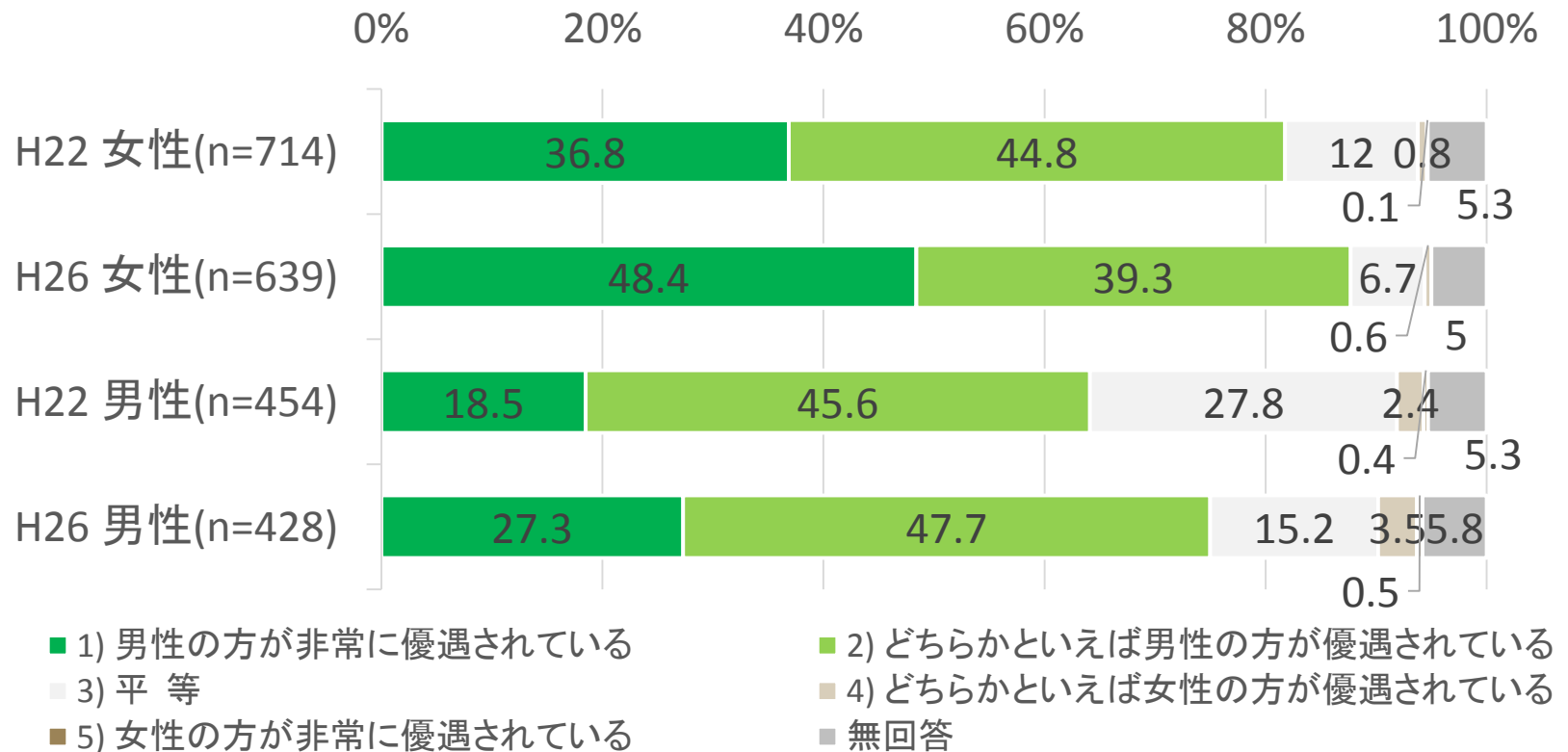
男女の地位の平等感(学校教育の場)

- 学校教育の場は、他の分野よりも「平等」と感じている人が多く、男女とも6割台となっている。
- <男性の方が優遇されている>は、男性では16.8%に対し、女性では25.3%と10ポイント近く高くなっている。



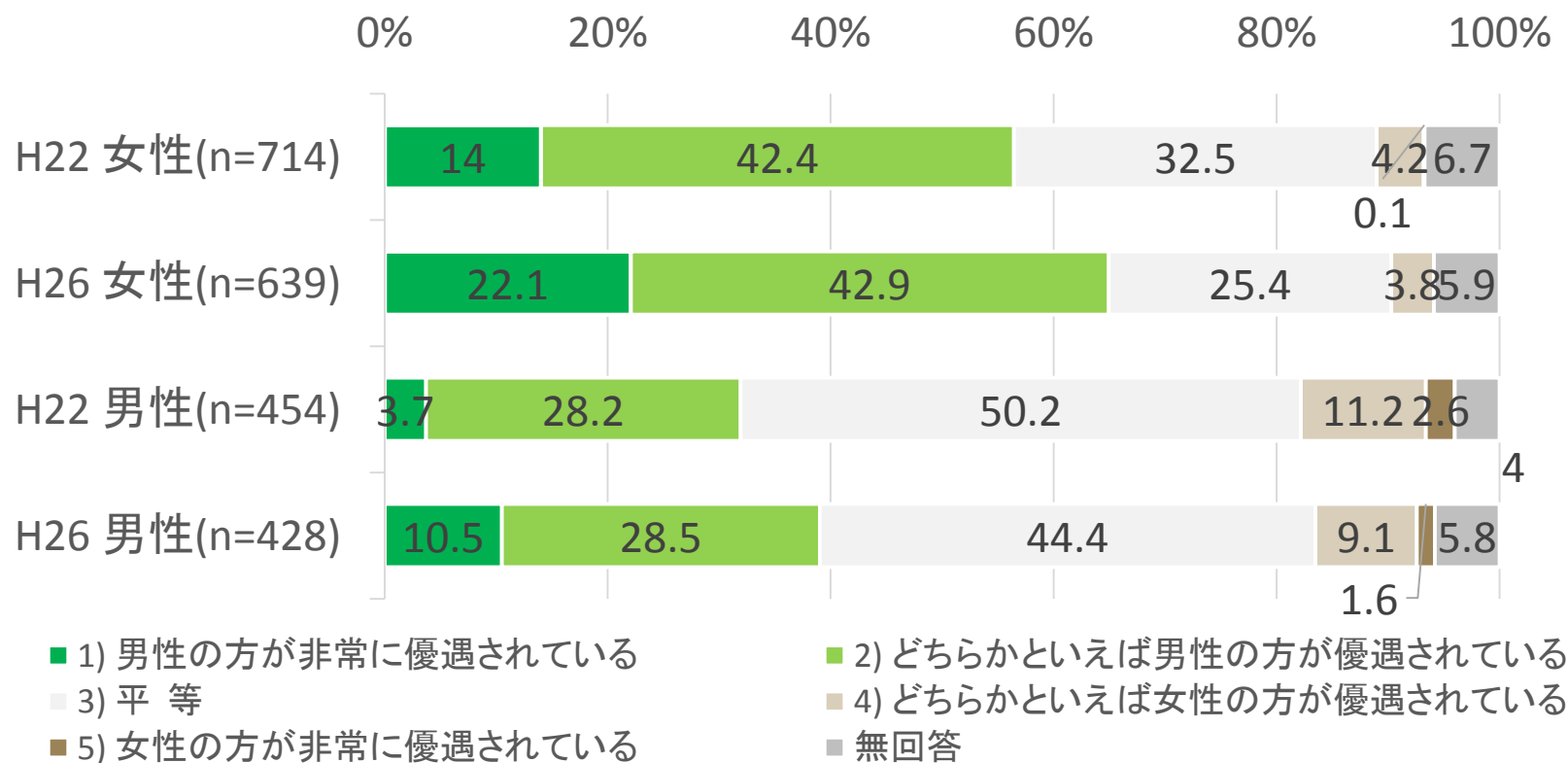
男女の地位の平等感（政治の場）

- 政治の場については、〈男性の方が優遇されている〉の割合が高く、女性では9割近く、男性でも7割台半ばに達する。また、男女とも、前回調査よりもその割合はやや高くなっている。
- 女性では「男性の方が非常に優遇されている」が5割近く、男性よりも20ポイント以上高い。



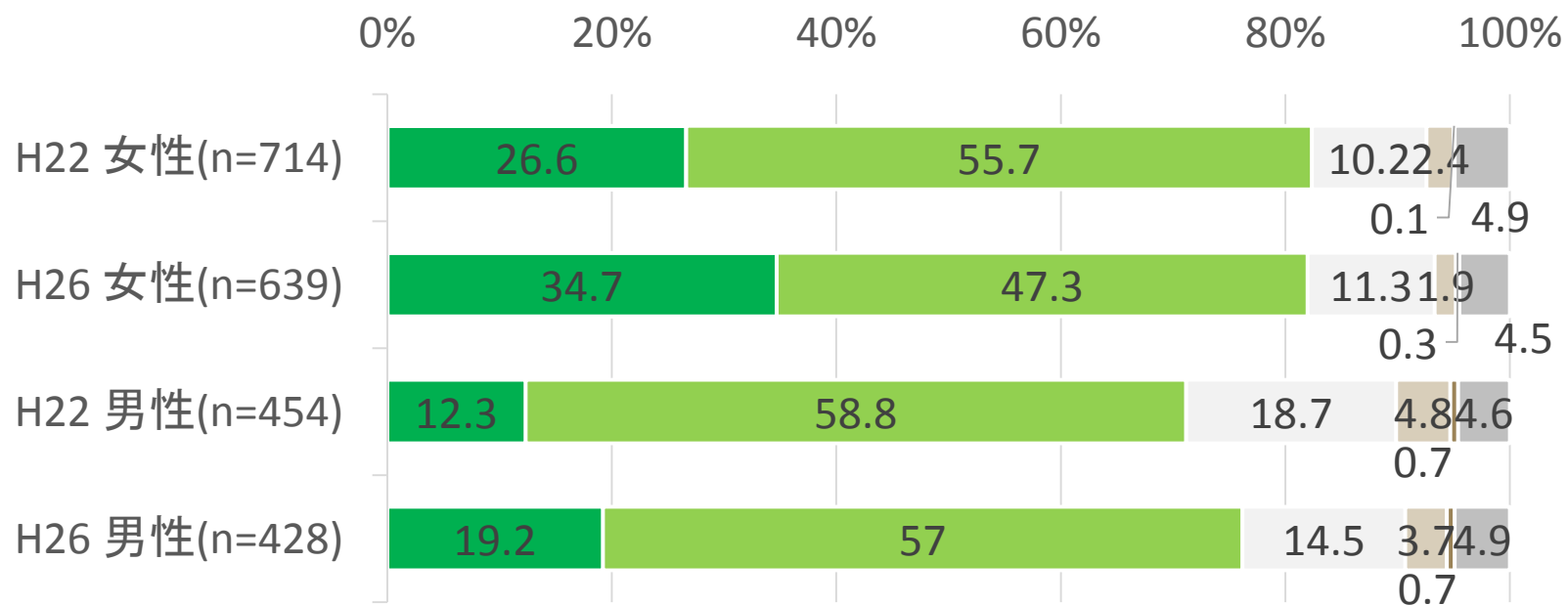
男女の地位の平等感(法律や制度の上)

- 法律や制度の上での男女の地位の平等感では、男女の差が大きく、〈男性の方が優遇されている〉は女性では65%、男性では39%であった。
- 前回調査と比べると、男女とも〈男性の方が優遇されている〉がやや高くなった。



男女の地位の平等感(社会通念・慣習・しきたり)

- 社会通念・慣習・しきたりについても不平等感が強く、女性の8割超、男性でも7割超が「男性の方が優遇されている」と回答している。

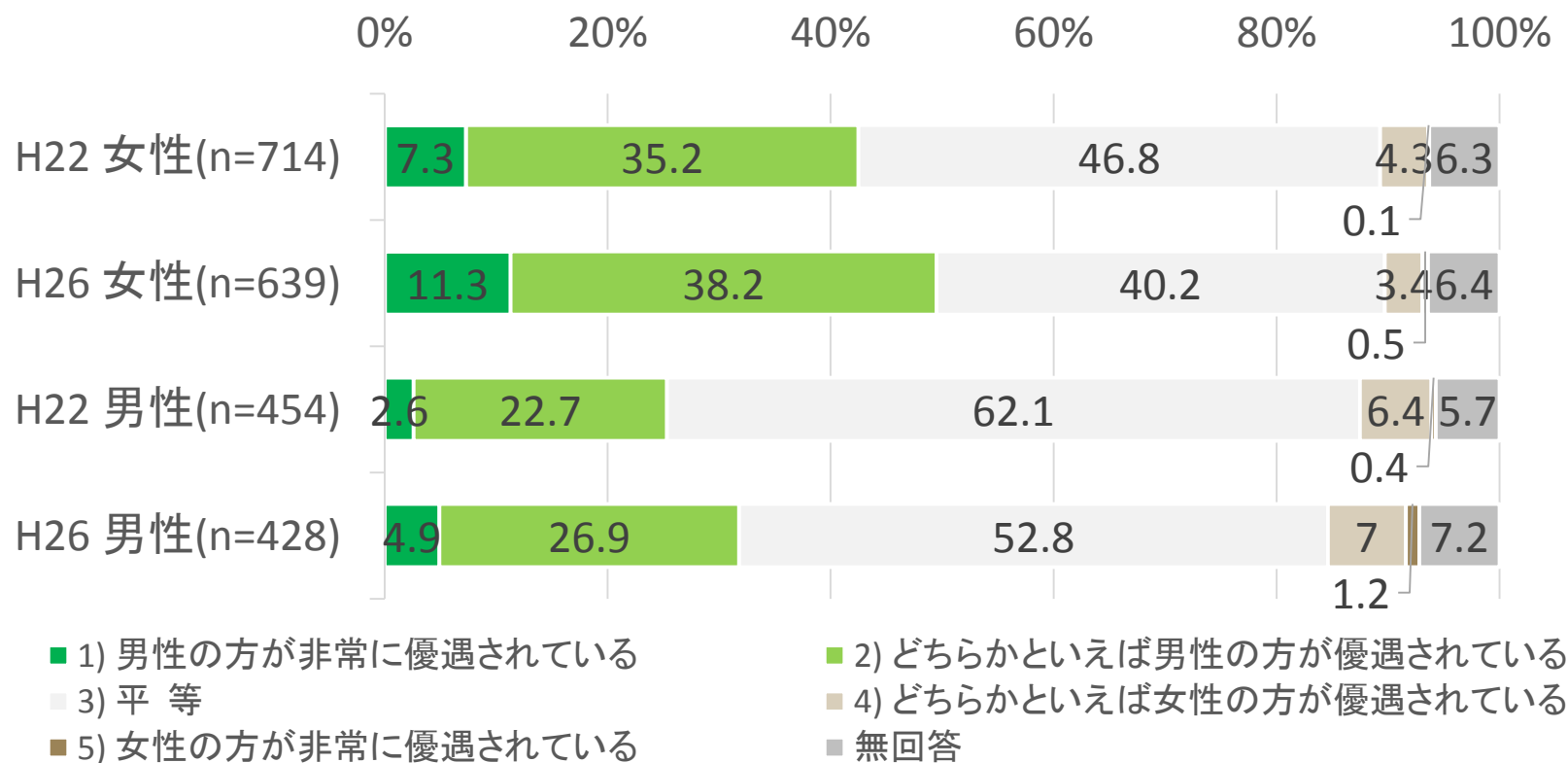


- 1) 男性の方が非常に優遇されている
- 3) 平等
- 5) 女性の方が非常に優遇されている

- 2) どちらかといえば男性の方が優遇されている
- 4) どちらかといえば女性の方が優遇されている
- 無回答

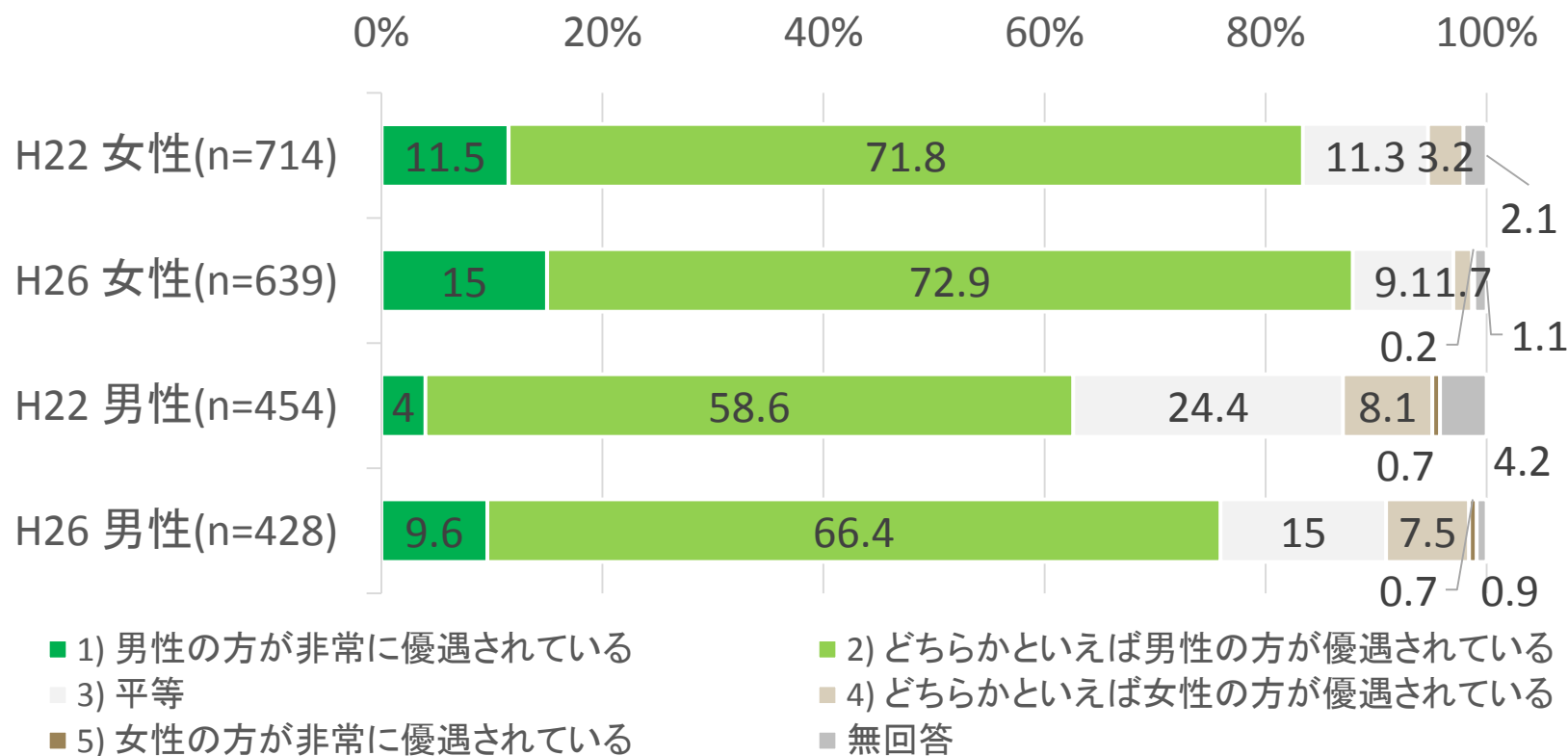
男女の地位の平等感(自治会やNPOなど地域活動の場)

- 地域活動の場については、女性では約半数が、男性では3割超が〈男性の方が優遇されている〉と回答。20ポイント近い開きがある。
- 前回調査と比較して、〈男性の方が優遇されている〉がやや高くなっている。



男女の地位の平等感(社会全体)

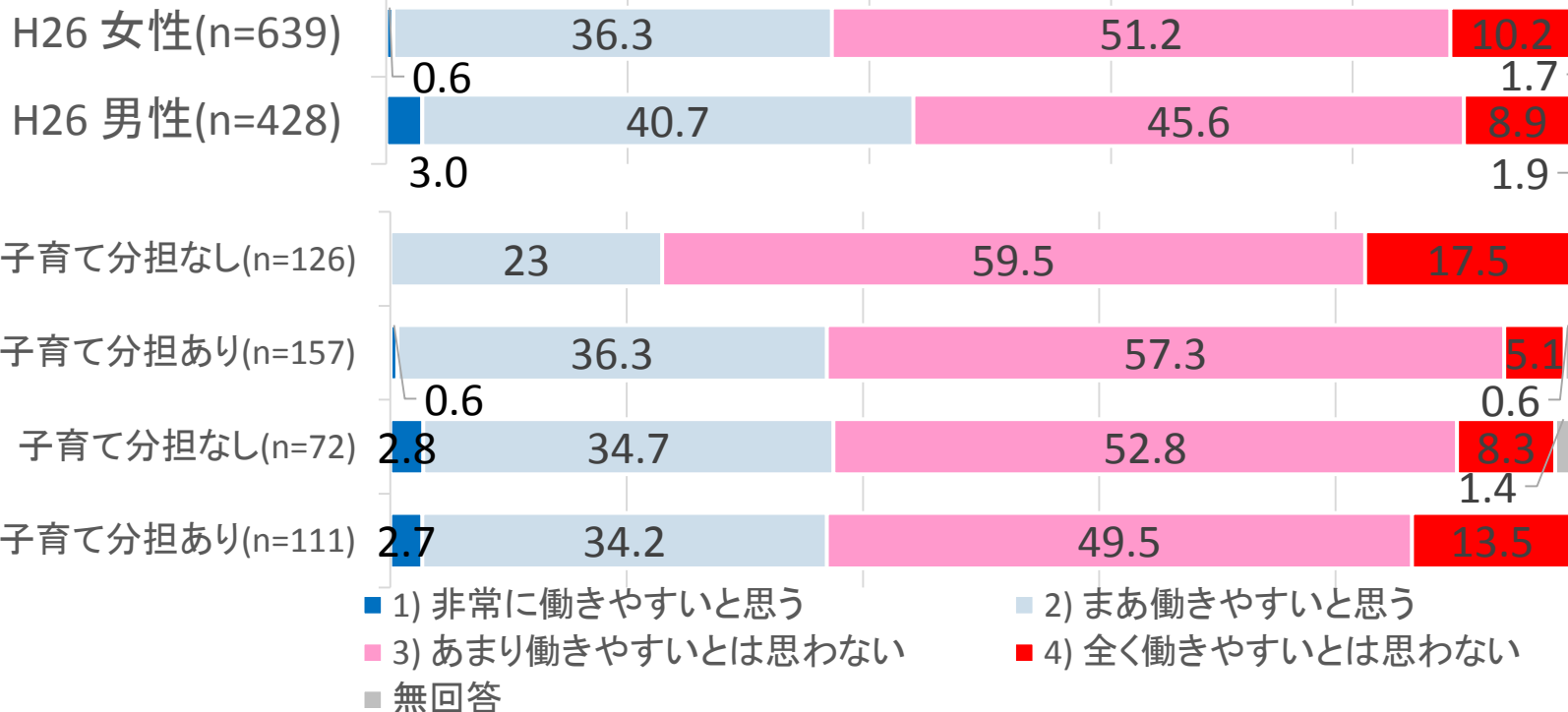
- 社会全体で見た場合の男女の地位の平等感では、女性の8割台半ば、男性の7割台半ばが「男性の方が優遇されている」と回答。
- 男性では、前回調査に比べ、男性では10ポイント以上く男性の方が優遇されている)が高くなっている。



いまの社会は女性にとって働きやすいか

- 女性にとって<働きやすいとは思わない>派は、女性では6割超、男性でも過半数を占めた。
- 子育て分担状況別に見ると、夫やパートナーとのあいだで子育ての分担がない女性で<働きやすいとは思わない>派が高く、8割近くに達しており、子育て分担がある女性と10ポイント以上の開きがある。

0% 20% 40% 60% 80% 100%

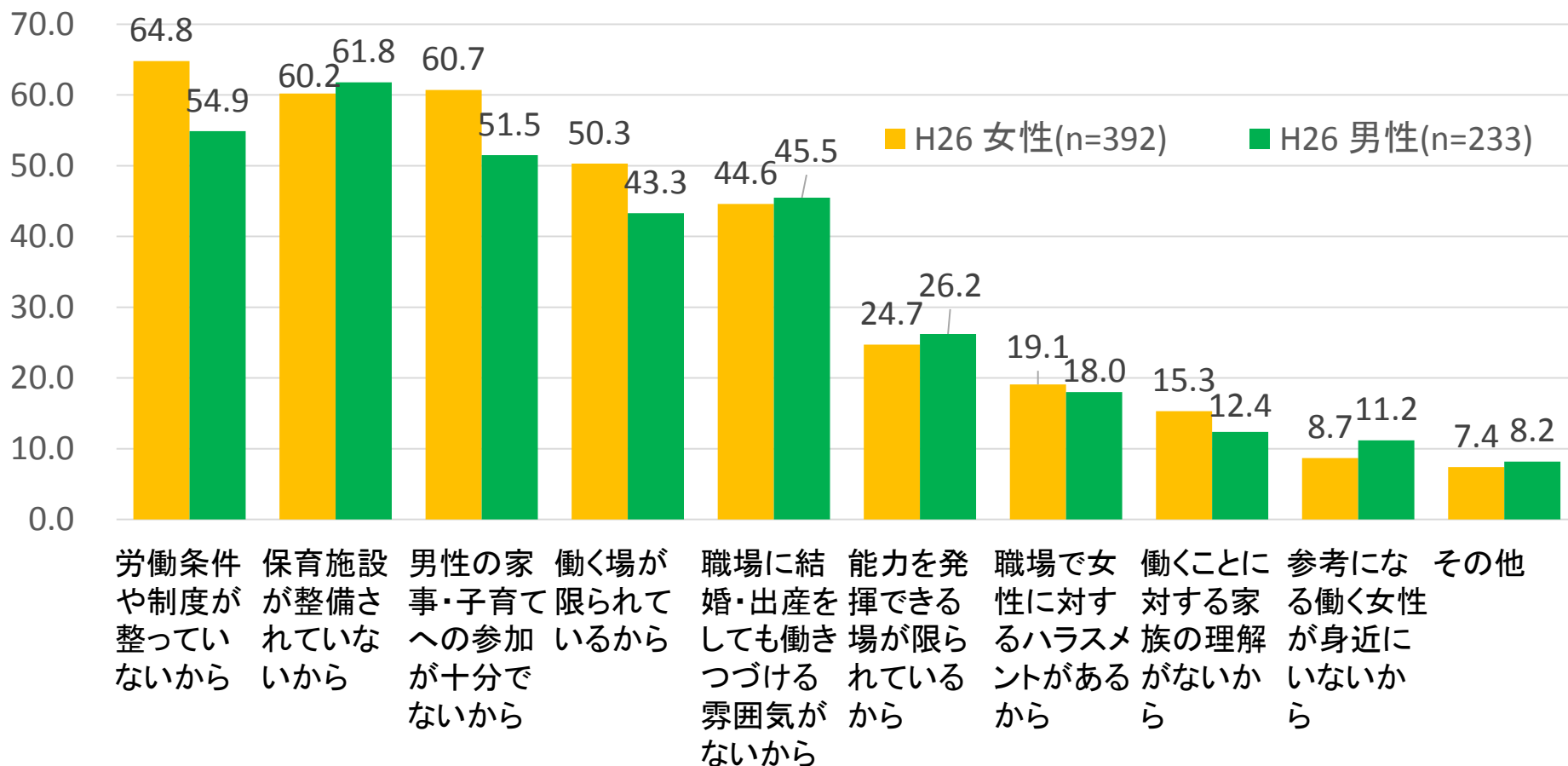


子育て分担あり=子育て分担状況に関する質問で「どちらかといえば自分が中心」「どちらもほぼ同等」「どちらかといえば配偶者またはパートナーが中心」のいずれかを回答した人

子育て分担なし=同じ質問で「自分が中心」(女性)または「配偶者またはパートナーが中心」(男性)と回答した人

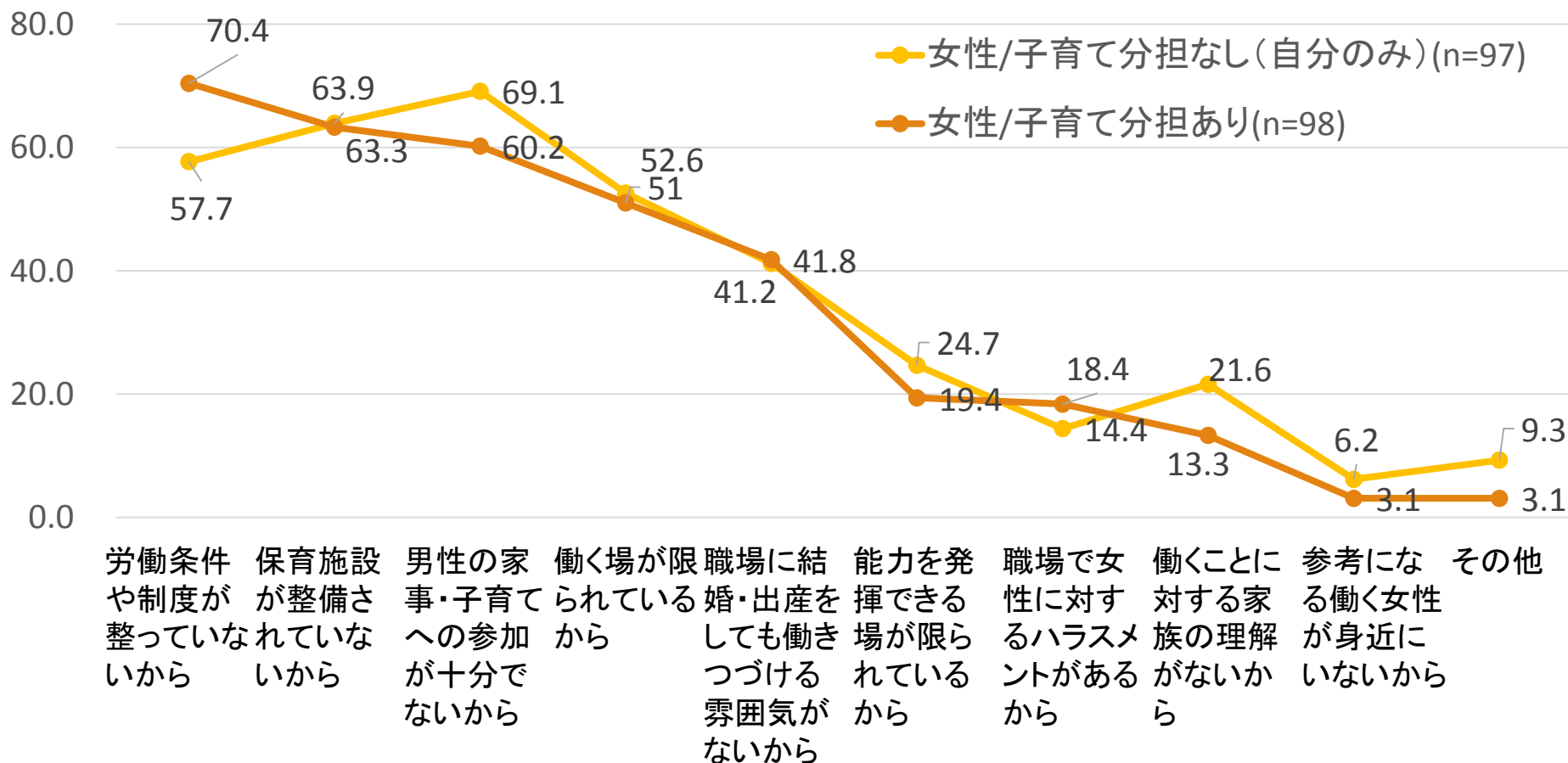
女性にとって働きやすいと思わない理由(複数回答)

- 働きやすいと思わないという回答者にその理由を尋ねたところ、女性では「労働条件や制度が整っていないから」、男性では「保育施設が整備されていないから」が最も多かった。
- 「男性の家事・子育て参加が十分でないから」は、男女で10ポイント近い開きがあった。



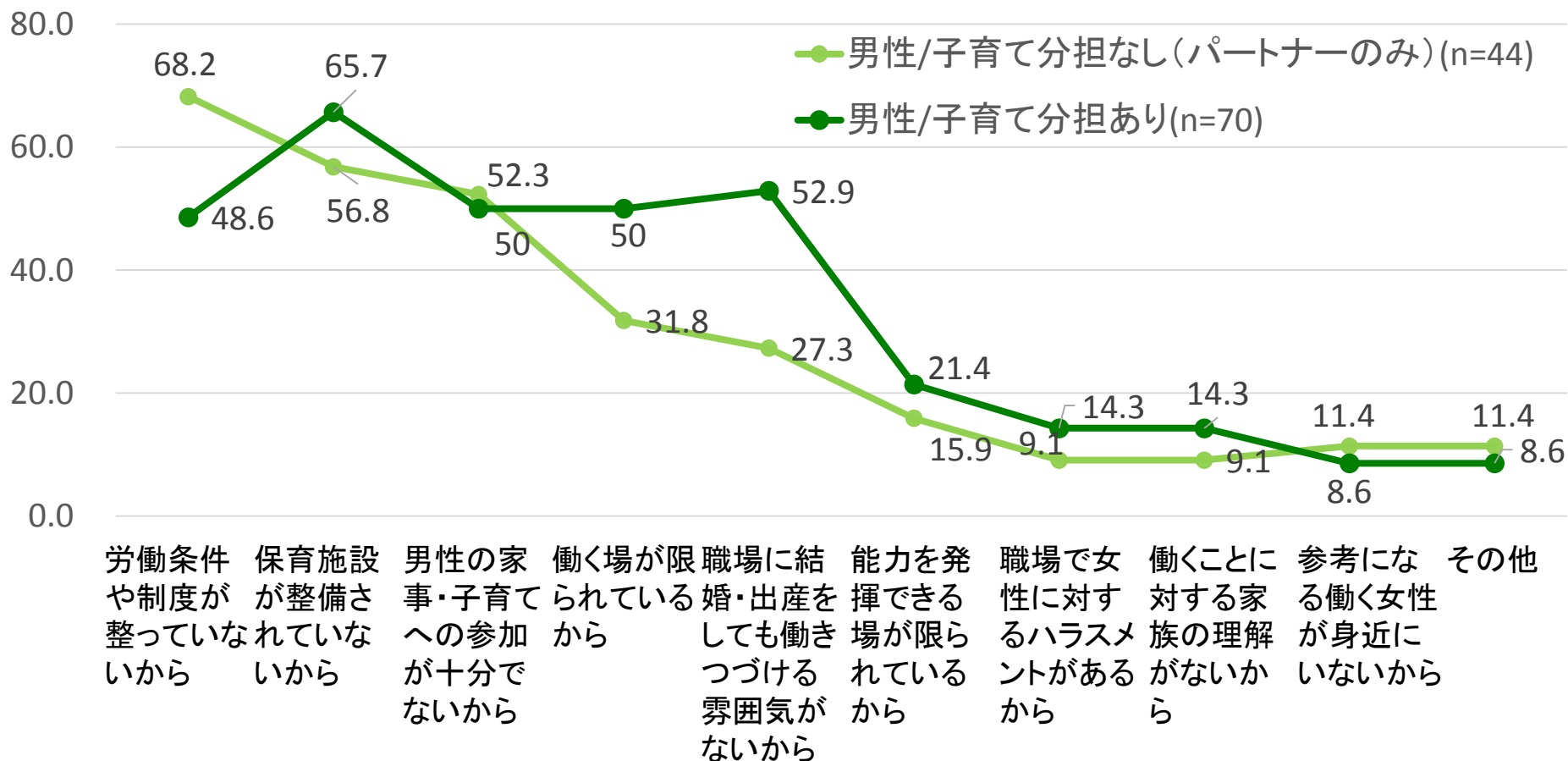
女性にとって働きやすいと思わない理由(女性、複数回答)

- 女性について子育て分担の有無別に見ると、子育て分担なし層では「男性の家事・子育て参加が十分でないから」が最も高く、約7割であった。



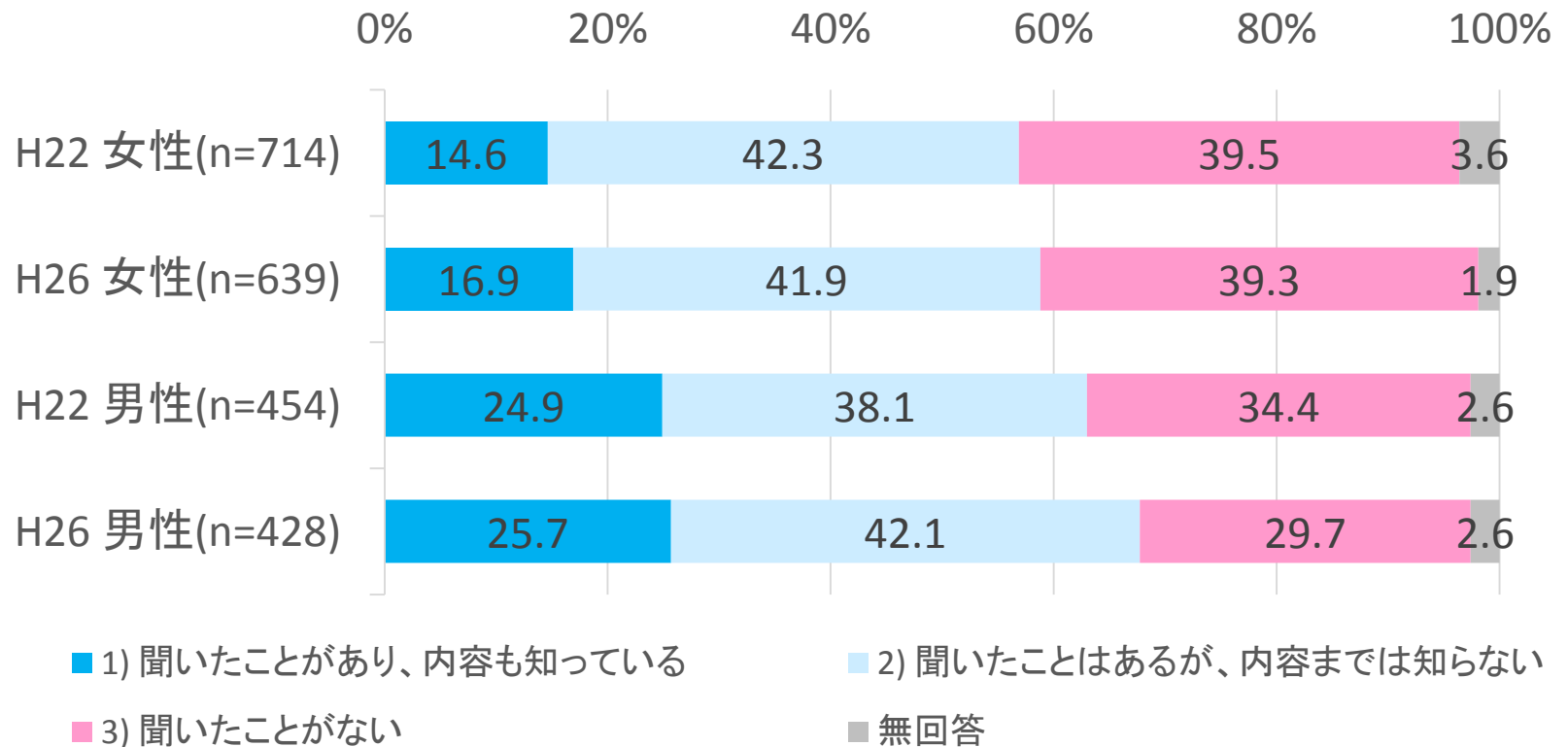
女性にとって働きやすいと思わない理由(男性、複数回答)

- 男性では、子育て分担の有無による差が女性よりも大きく、子育て分担あり層で「保育施設が整備されていないから」が6割台半ばで最も高く、次いで「職場に結婚・出産をしても働き続ける雰囲気がないから」が52.9%となった。



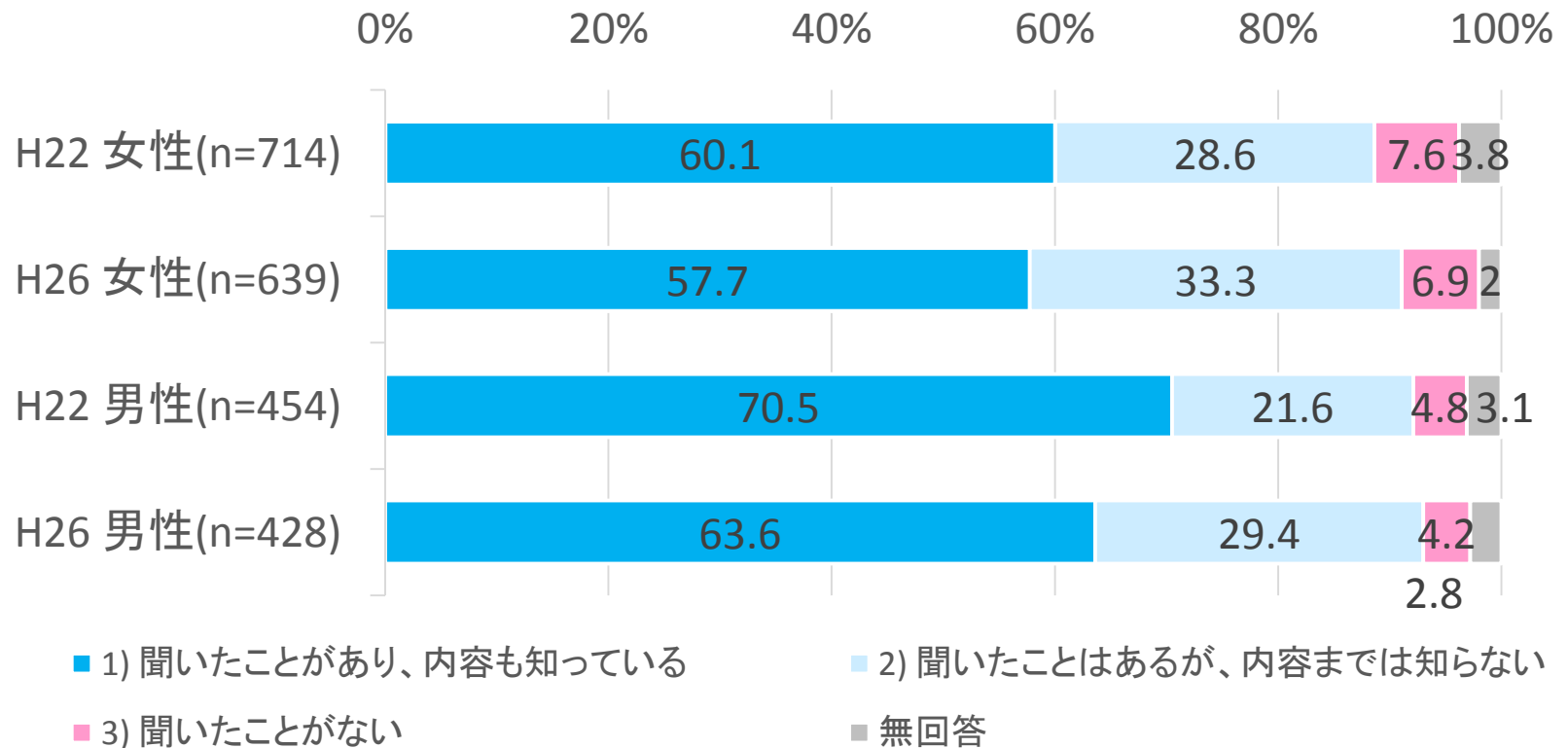
用語や制度の認知:「男女共同参画社会」

- 「男女共同参画社会」の認知は、〈聞いたことがある〉は前回調査から微増し、女性で6割弱、男性で7割弱であった。



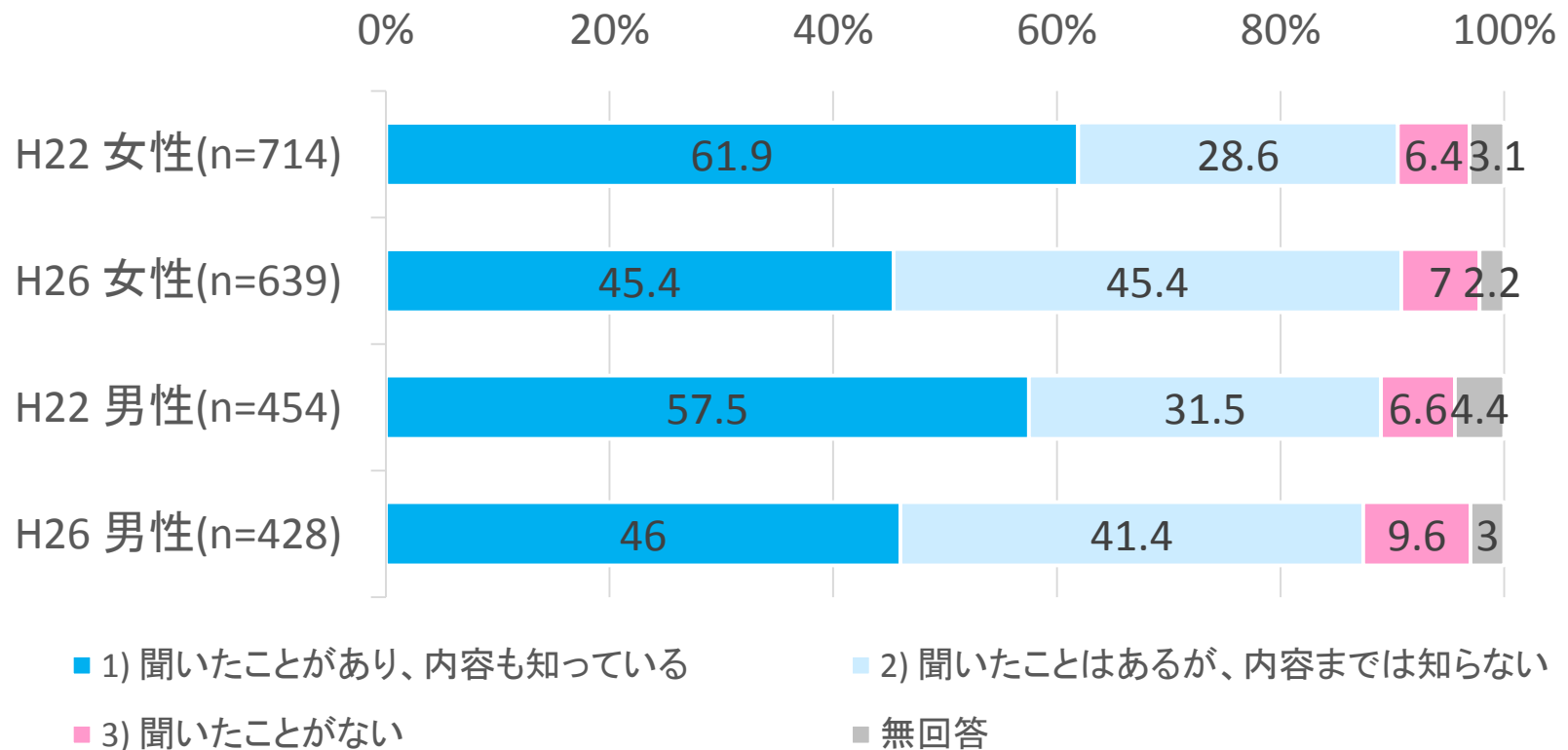
用語や制度の認知:「男女雇用機会均等法」

- 「男女雇用機会均等法」は、〈聞いたことがある〉人が9割を超えた。「内容も知っている」は、女性の6割弱、男性は6割強であった。



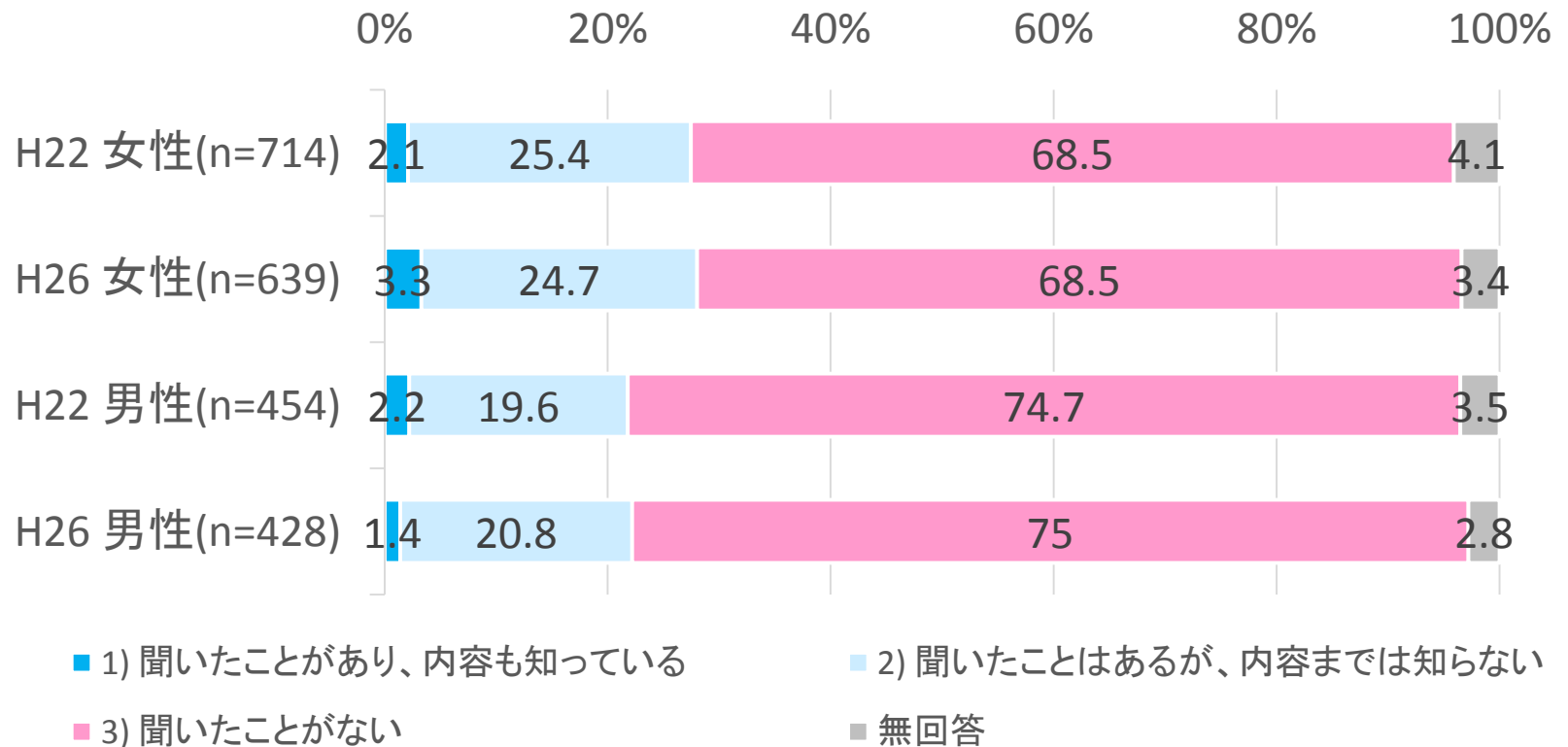
用語や制度の認知:「DV防止法」

- 「DV防止法」は、〈聞いたことがある〉が9割前後と高い水準を維持したものの、「内容も知っている」は半数未満となり、前回調査よりも低下している。
- 推測の域を出ないが、今回の調査内容にDVに関する詳細な質問が一定数含まれていたことから、「内容も知っている」が減少した可能性もある。



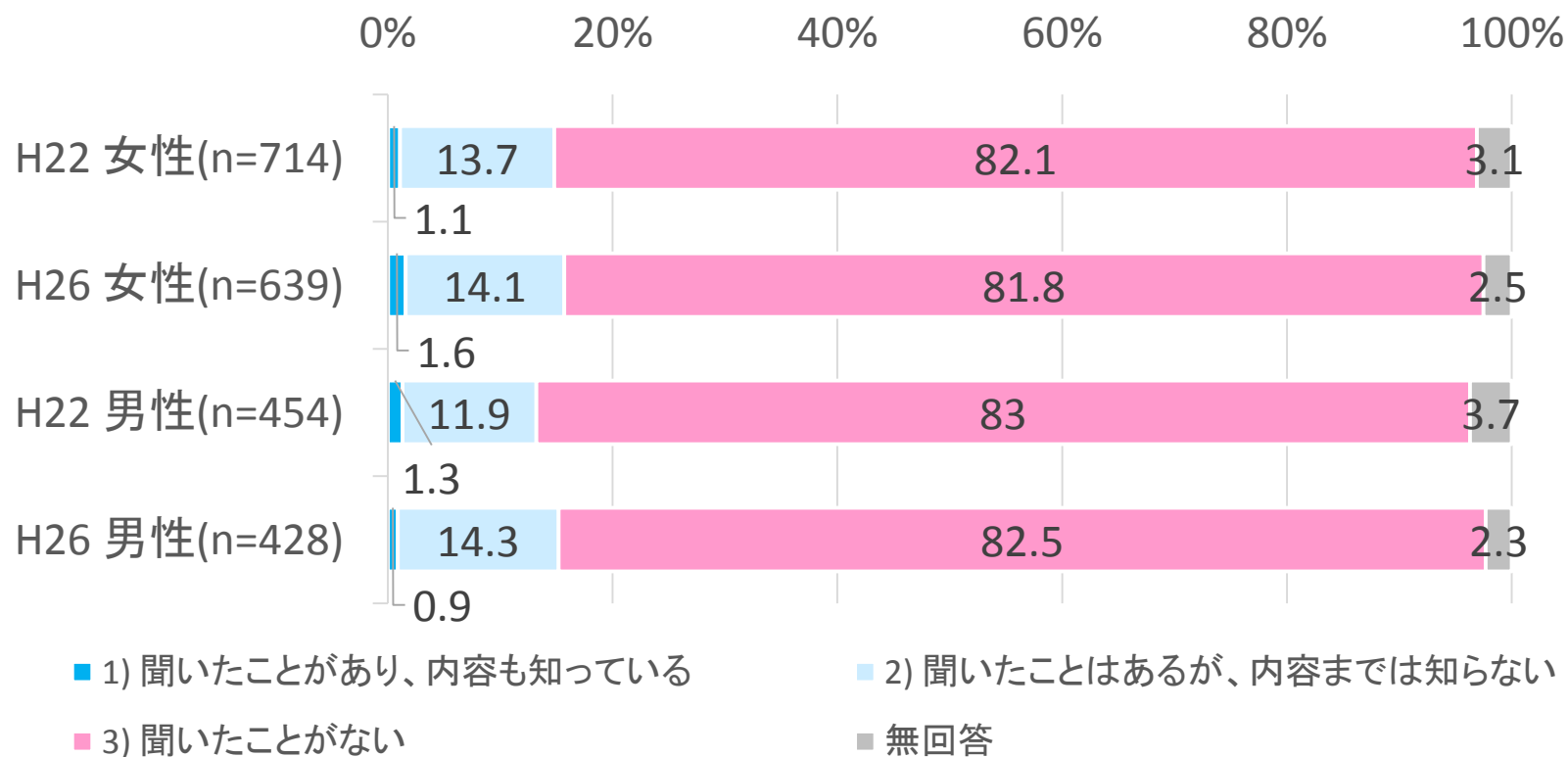
用語や制度の認知:「男女平等かわさき条例」

- 「男女平等かわさき条例」は前回調査と同水準の認知率で、「聞いたことがある」との回答が、女性では3割弱、男性では2割強に留まった。



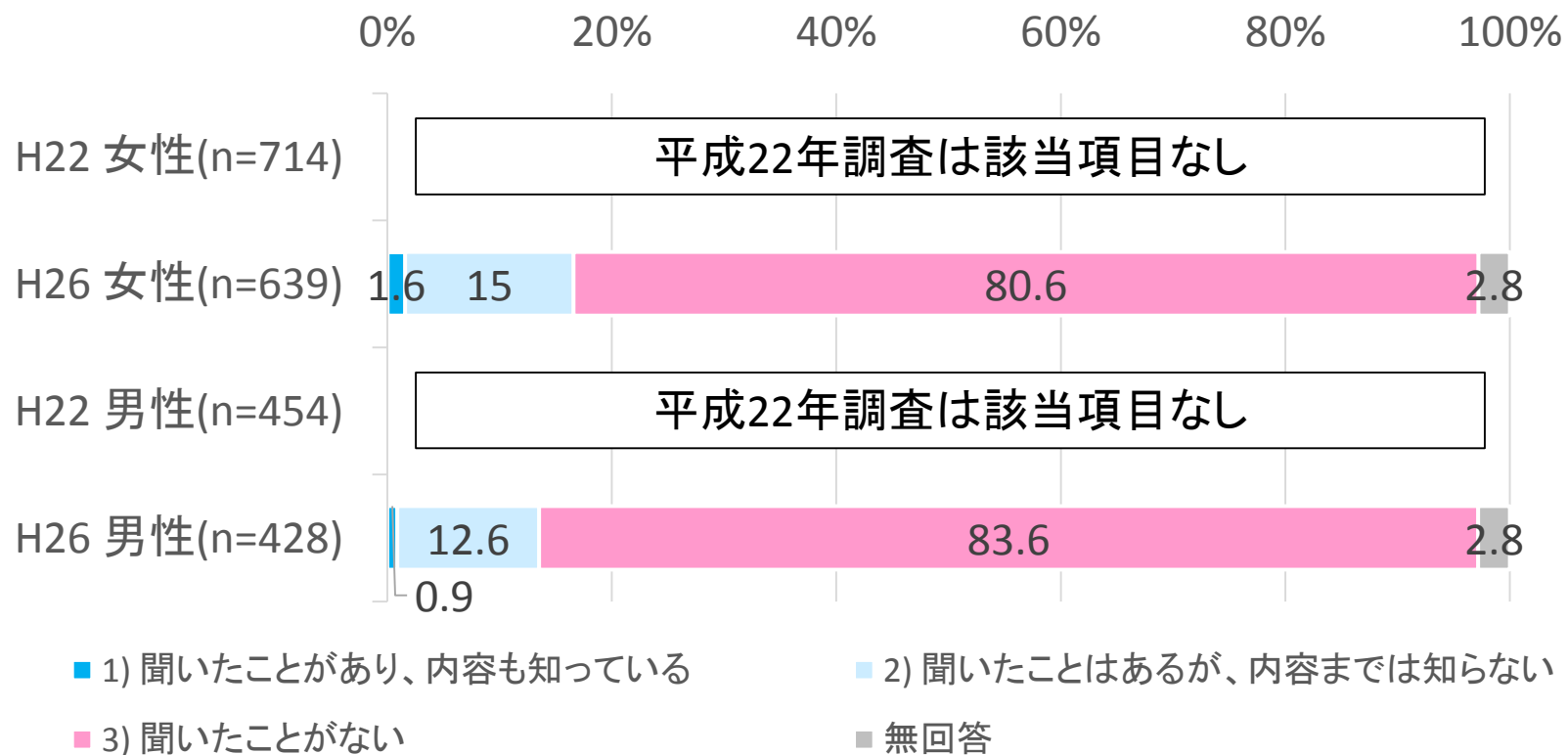
用語や制度の認知:「川崎市男女平等推進行動計画」

- 「川崎市男女平等推進行動計画」も前回と同水準で、「聞いたことがある」割合は男女とも15%程度と低水準に留まっている。



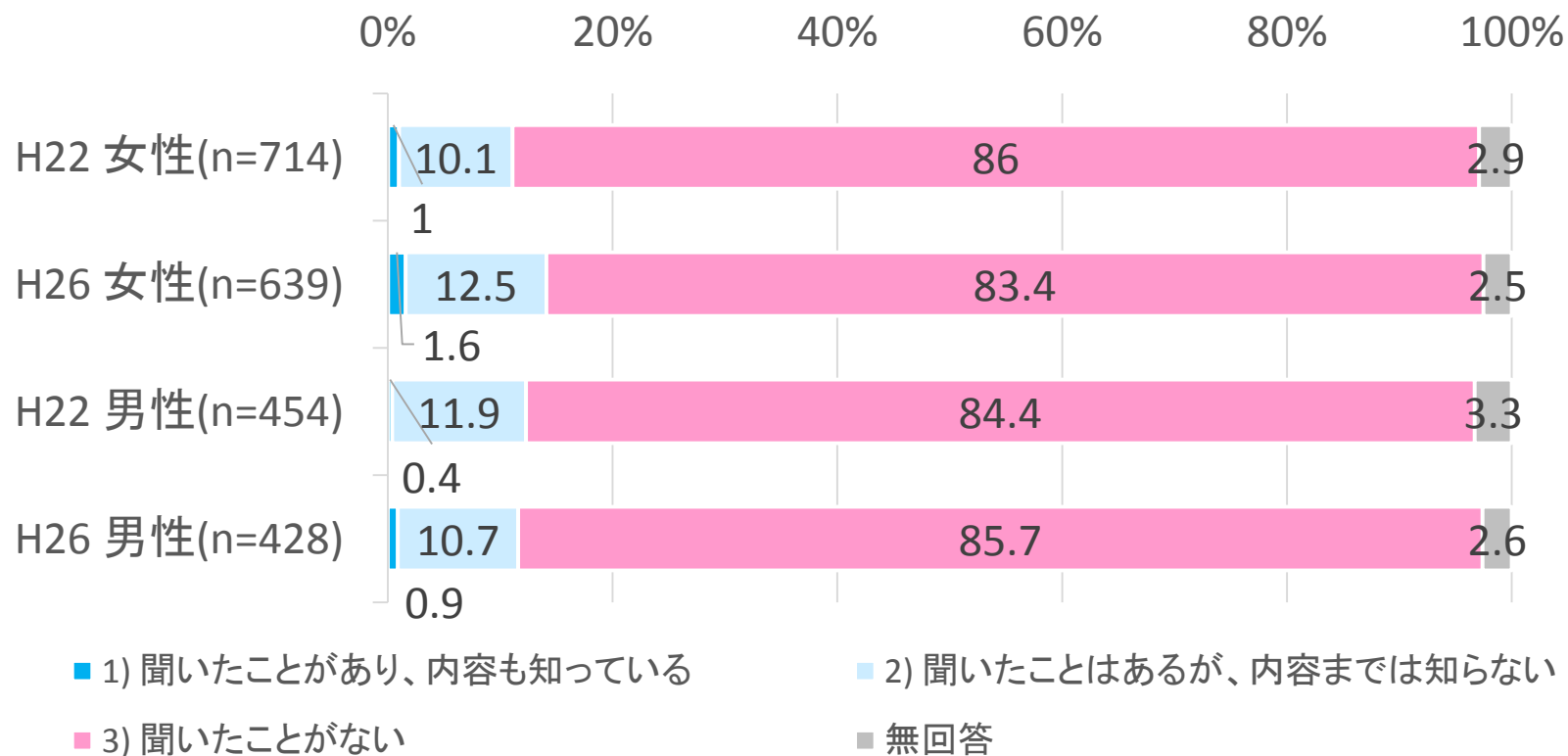
用語や制度の認知:「川崎市DV防止・被害者支援基本計画」

- 「DV防止・被害者支援基本計画」(調査時点では「DV被害者支援基本計画」)は、**聞いたことがある**が女性16.6%、男性13.5%となっている。



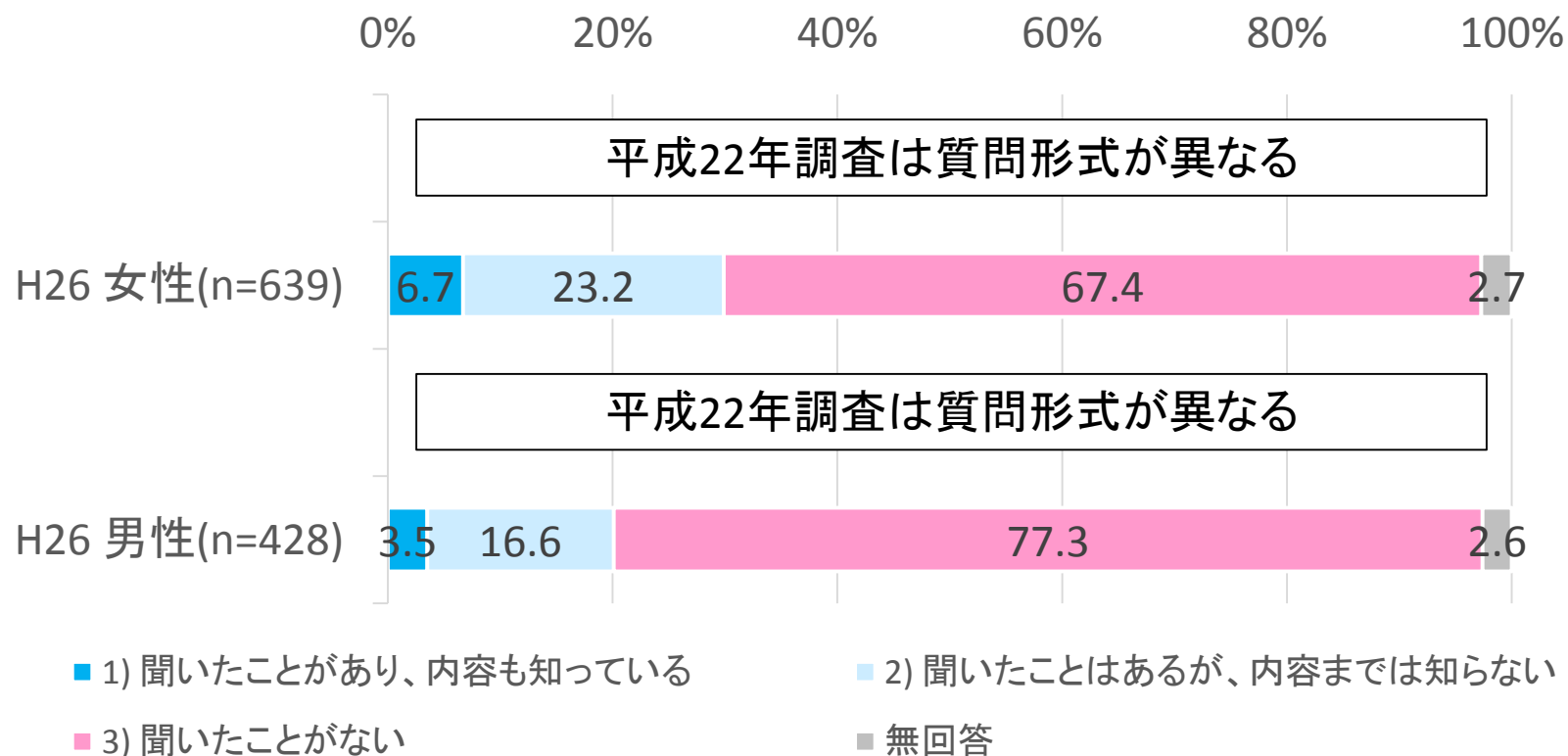
用語や制度の認知:「川崎市男女平等推進週間」

- 「川崎市男女平等推進週間」は、〈聞いたことがある〉人が1割台と低い水準に留まっている。



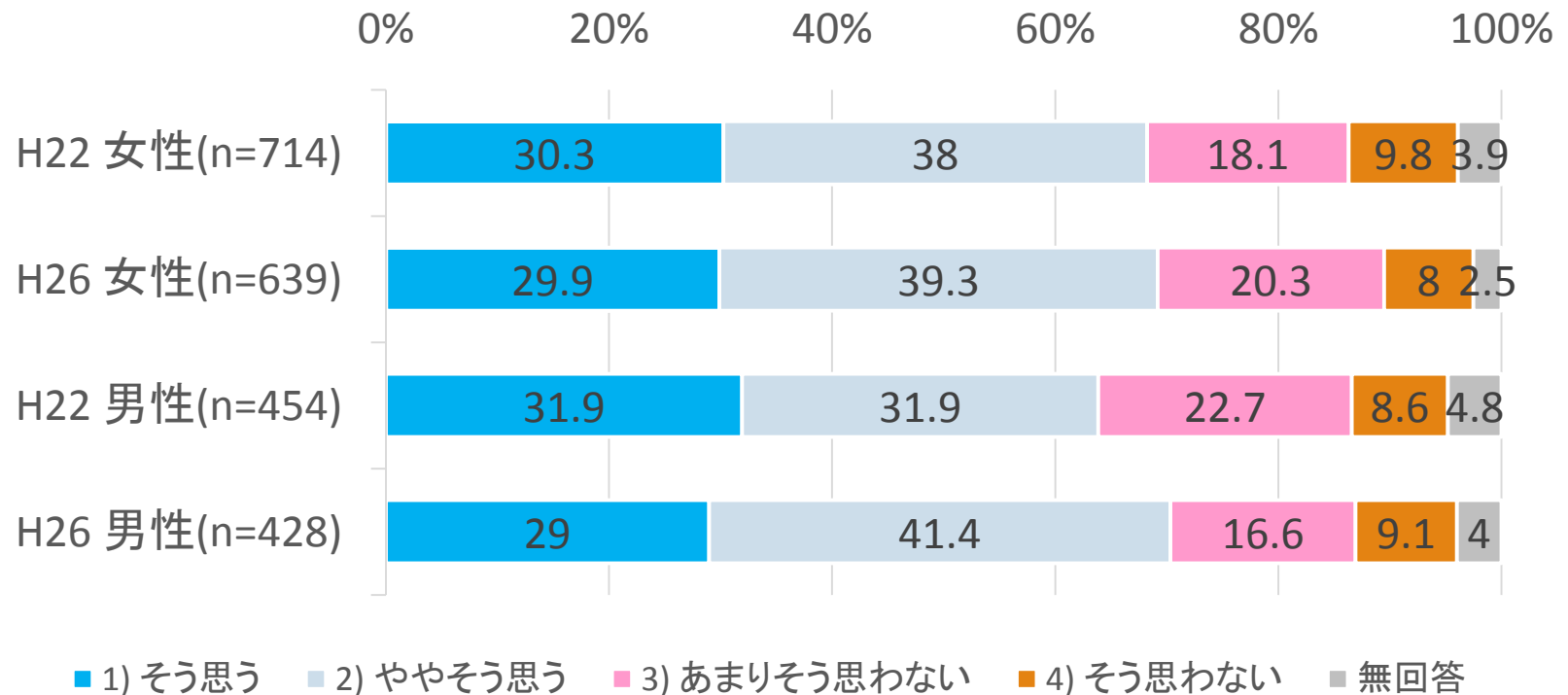
用語や制度の認知：「川崎市男女共同参画センター」

- 「川崎市男女共同参画センター」は、女性の約3割、男性の約2割が〈聞いたことがある〉(内容も知っている、内容までは知らないの合計)と回答。



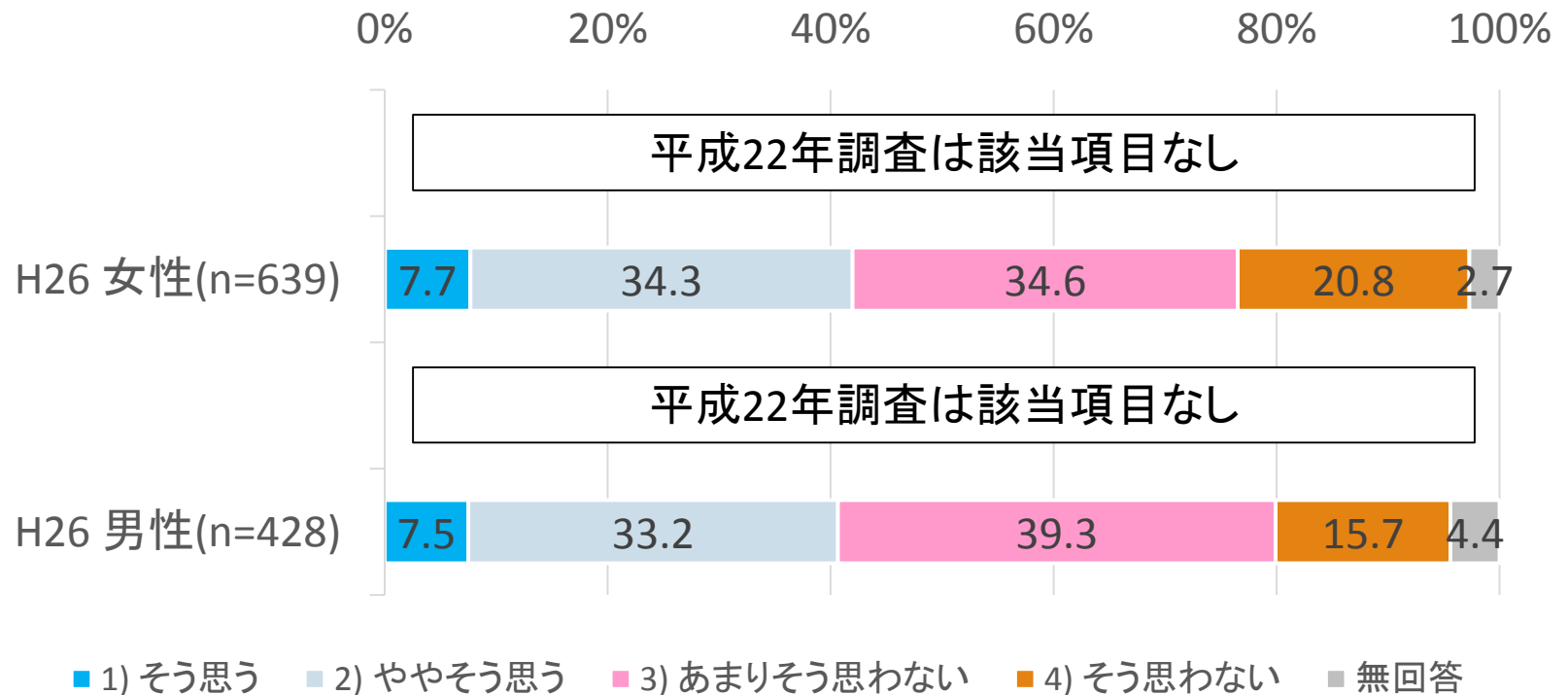
「女性の仕事は、収入が少なくても、勤務時間を選べる仕事が望ましい」

- ジェンダー意識に関する質問として、「女性の仕事は収入が少なくても、勤務時間を選べる仕事が望ましい」が男女とも7割前後であった。
- 男性では、肯定派が前回調査よりもやや高くなっている。



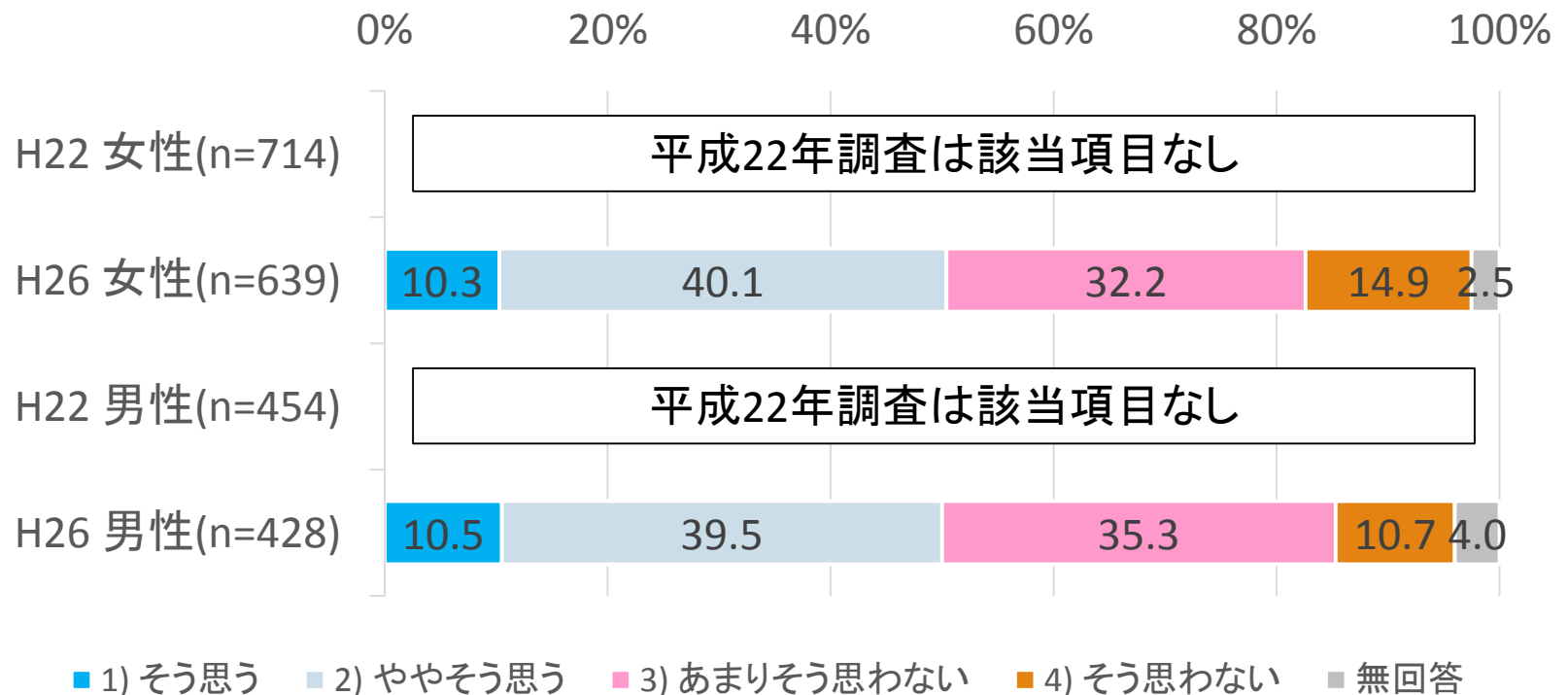
「女性は、結婚したら自分自身よりも夫や子どもなど家族を中心に考えて生活すべきである」

- 男女とも肯定派が4割強、否定派が5割台半ばで、否定派のほうがやや多い結果であった。



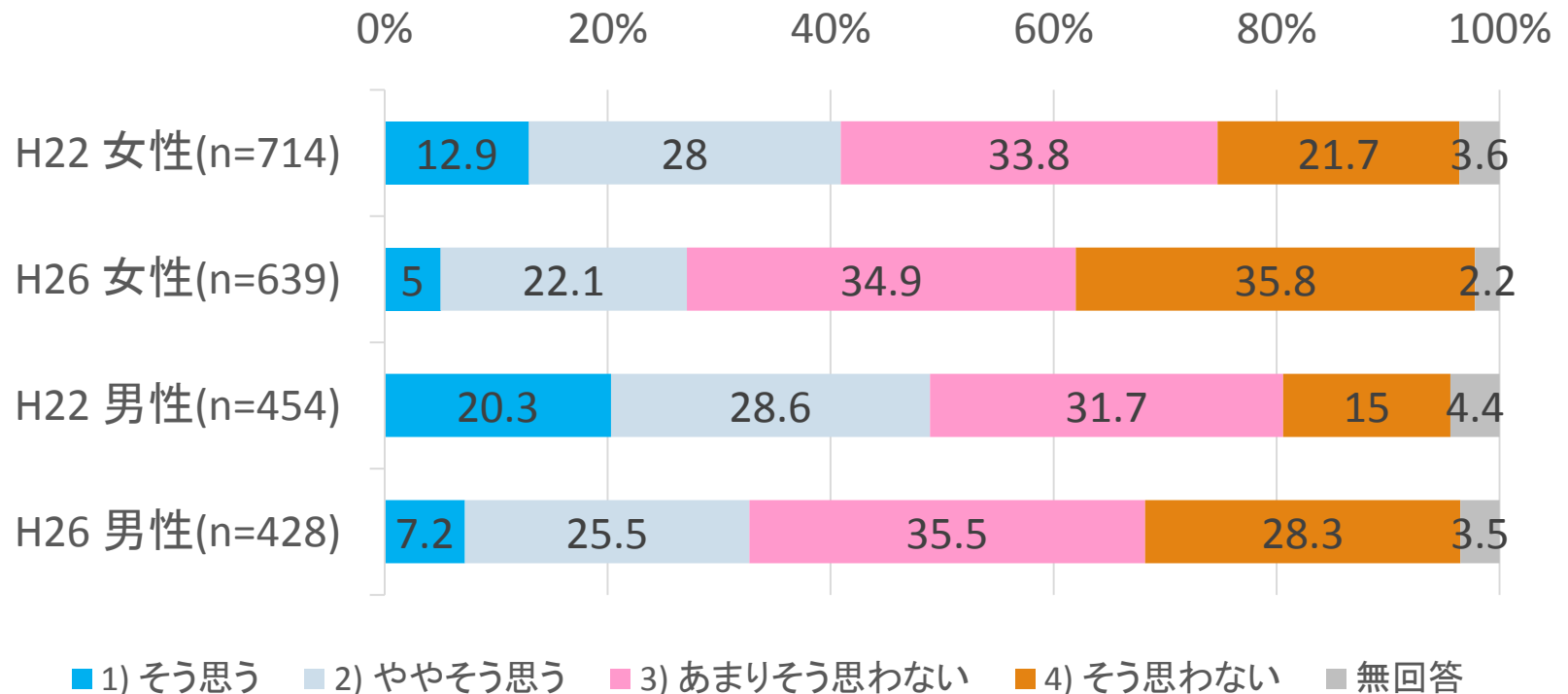
「女性は、仕事をもっても家事・育児もきちんとすべきである」

- 男女とも肯定派が5割前後、否定派が5割弱となっており、わずかに肯定派が上回っている。



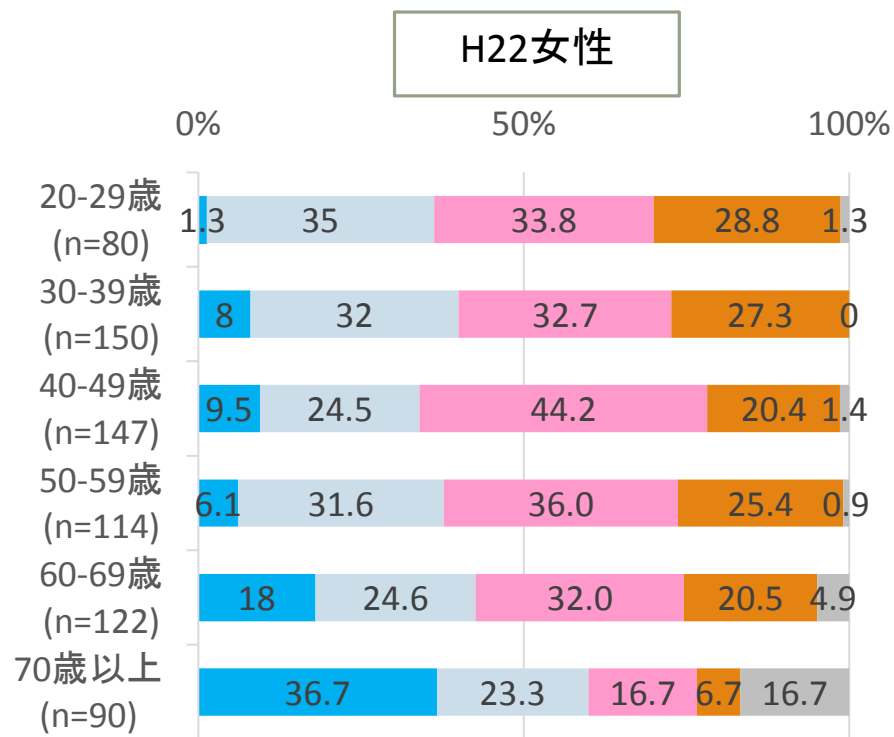
「男は外で働き、女は家庭を守るのが望ましい」

- 性別役割分担意識は、前回調査よりも否定派が多くなり、女性では約7割、男性でも6割台半ばであった。

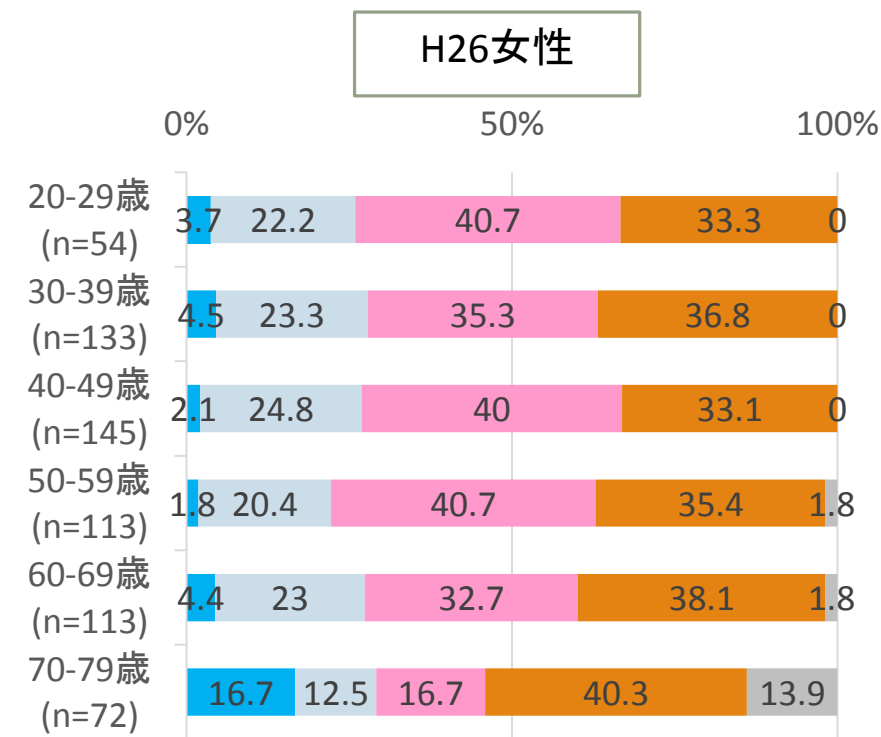


「男は外で働き、女は家庭を守るのが望ましい」(女性)

- 女性の年代別に、前回調査では「70代以上」であったのに対し、今回の調査では70代のみ限定したこと、前回調査の60代後半が70代に入ってきたことが影響してか、70代で肯定派割合が低くなっている。ただし、どの年代においても否定派が増加している。



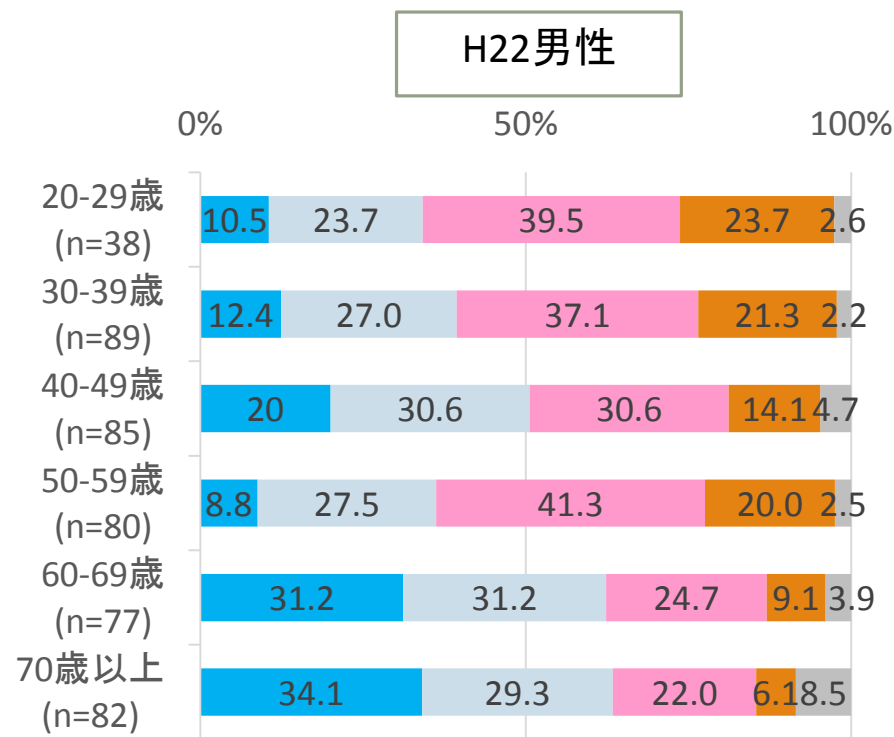
- 1) そう思う
- 2) ややそう思う
- 3) あまりそう思わない
- 4) そう思わない
- 無回答



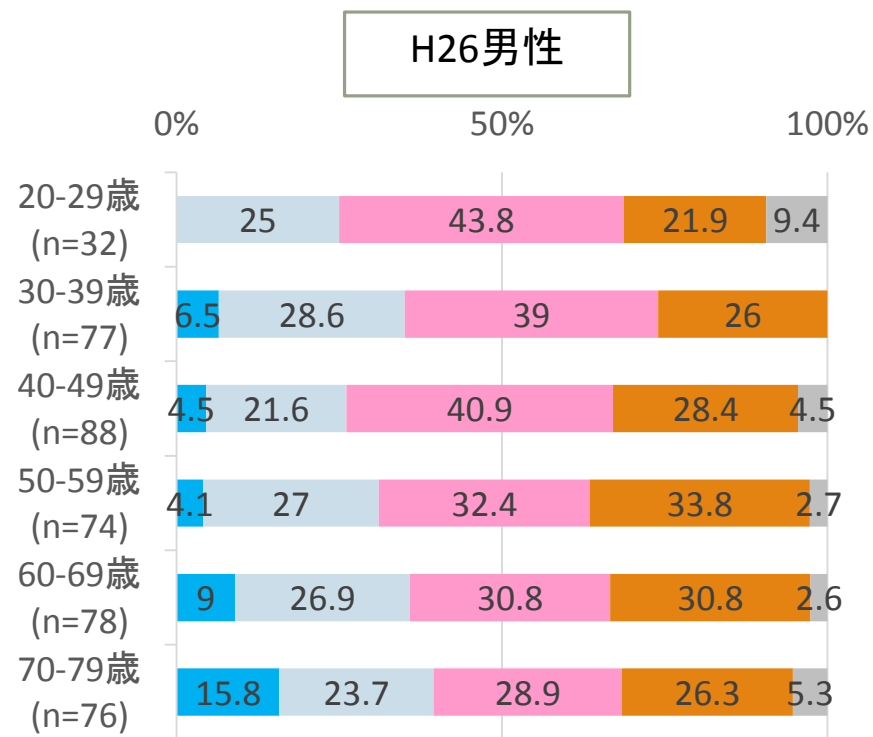
- 1) そう思う
- 2) ややそう思う
- 3) あまりそう思わない
- 4) そう思わない
- 無回答

「男は外で働き、女は家庭を守るのが望ましい」(男性)

- 男性についても、年代別で見るといずれも否定派が増加し、過半数を占めている。



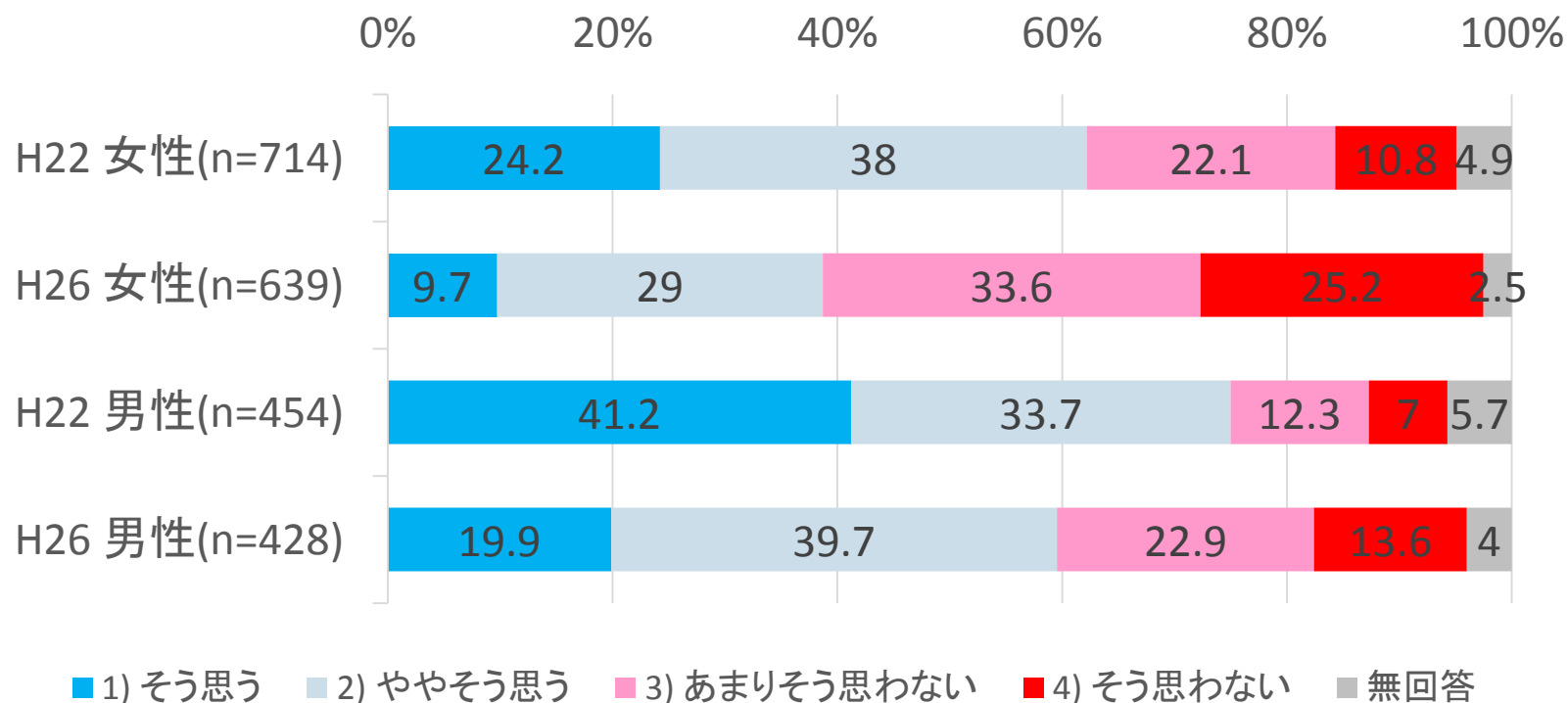
- 1) そう思う
- 2) ややそう思う
- 3) あまりそう思わない
- 4) そう思わない
- 無回答



- 1) そう思う
- 2) ややそう思う
- 3) あまりそう思わない
- 4) そう思わない
- 無回答

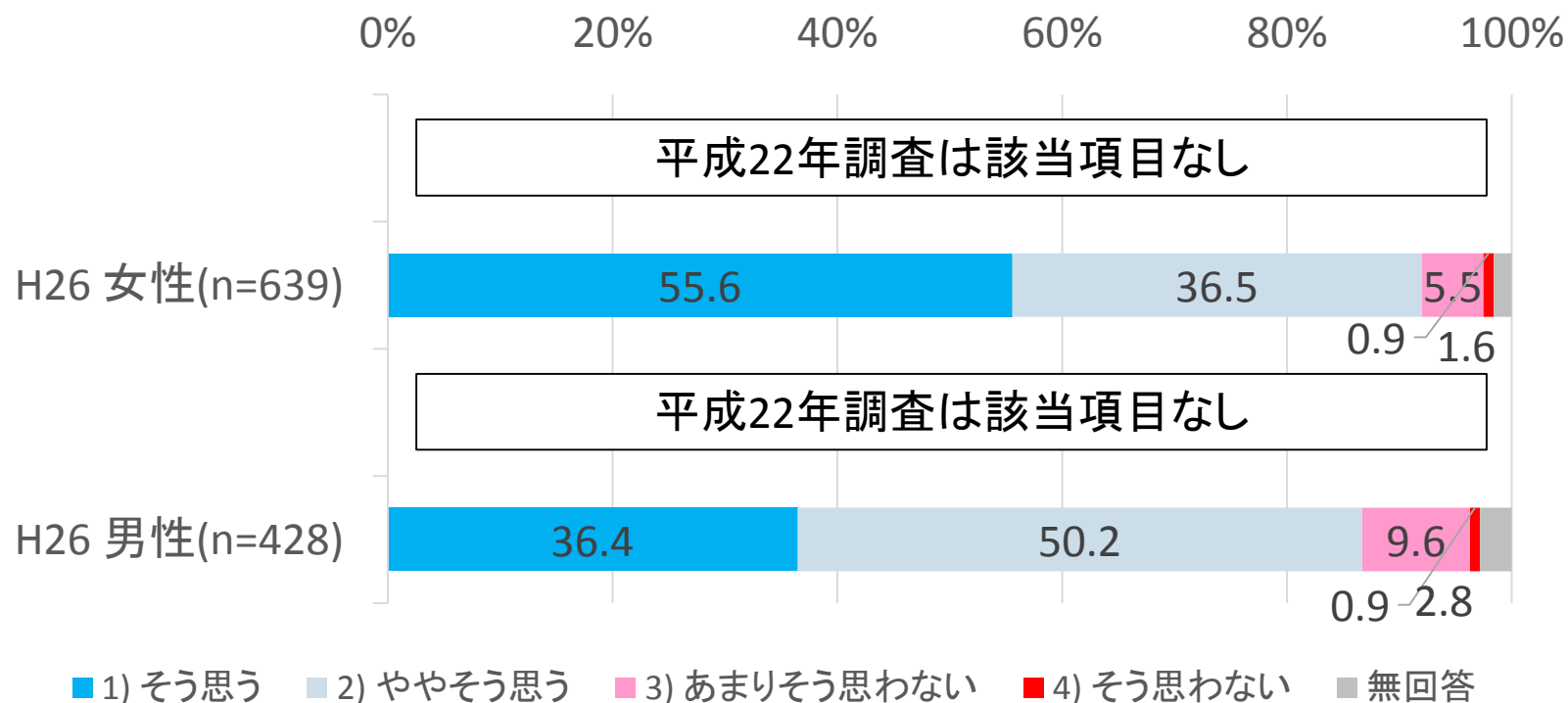
「家族を養うのは、もっぱら男の責任である」

- 「家族を養うのは、もっぱら男の責任である」という考えの肯定派は、前回調査から大きく減少し、女性では4割弱と、否定派のほうが多数派となった。
- 男性では、肯定派が前回調査から約15ポイント減少したものの、6割弱となっている。



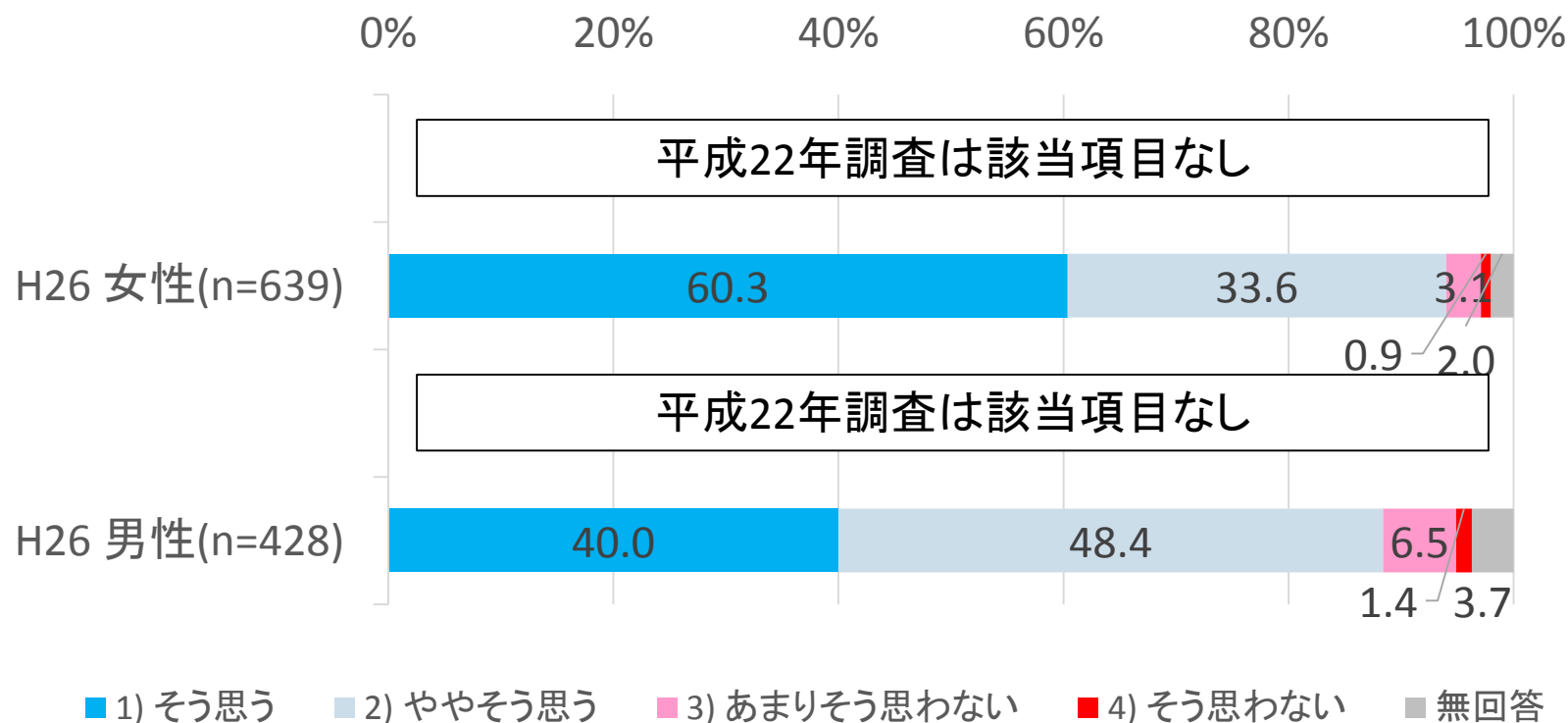
「男性も家事に積極的に参加すべきである」

- 「男性も家事に積極的に参加すべきである」という考えについては、女性では9割以上、男性でも8割以上が肯定。



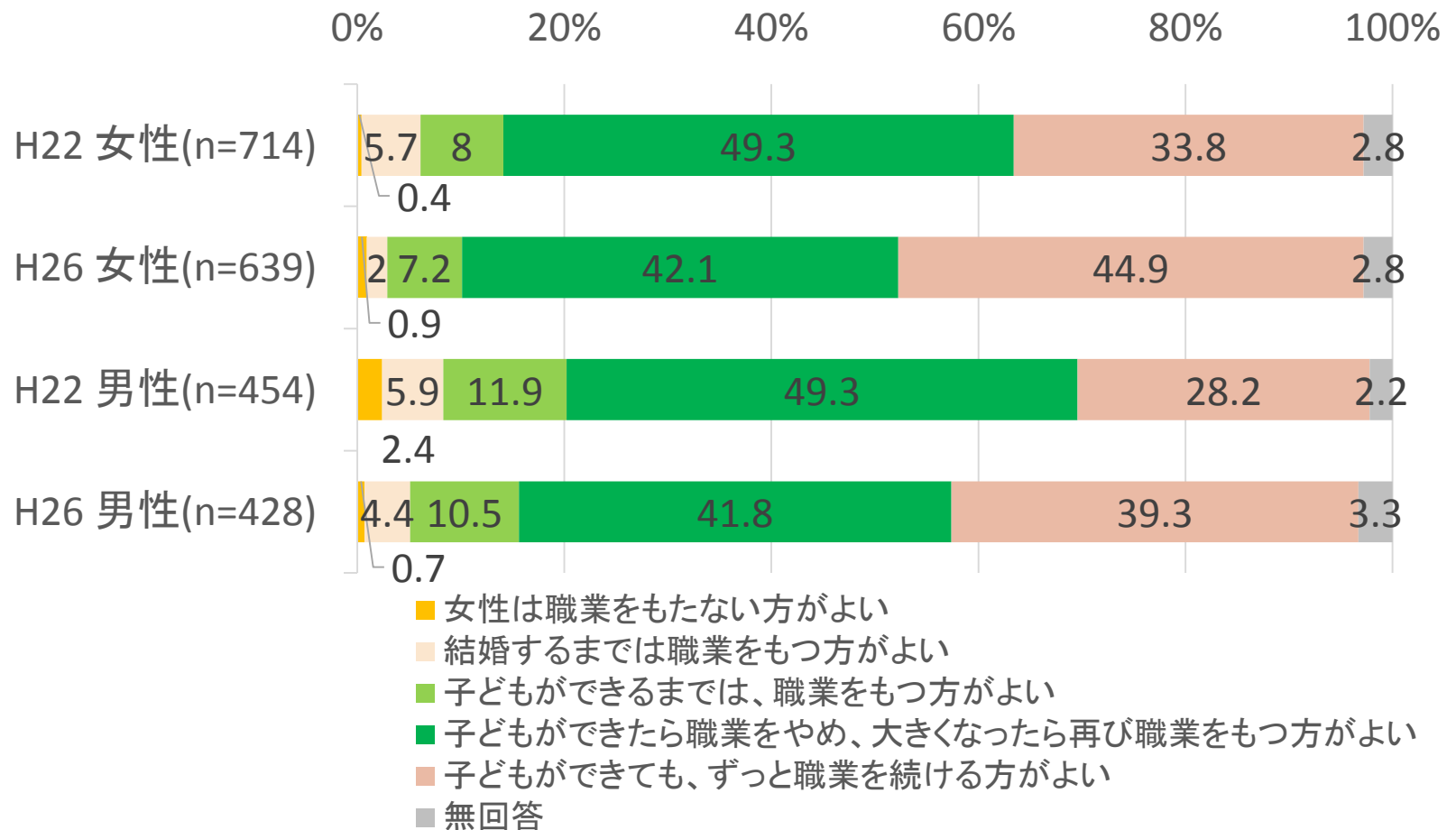
「男性も育児に積極的に参加すべきである」

- 男性の育児についても、女性の9割以上、男性でも9割近くが肯定していた。



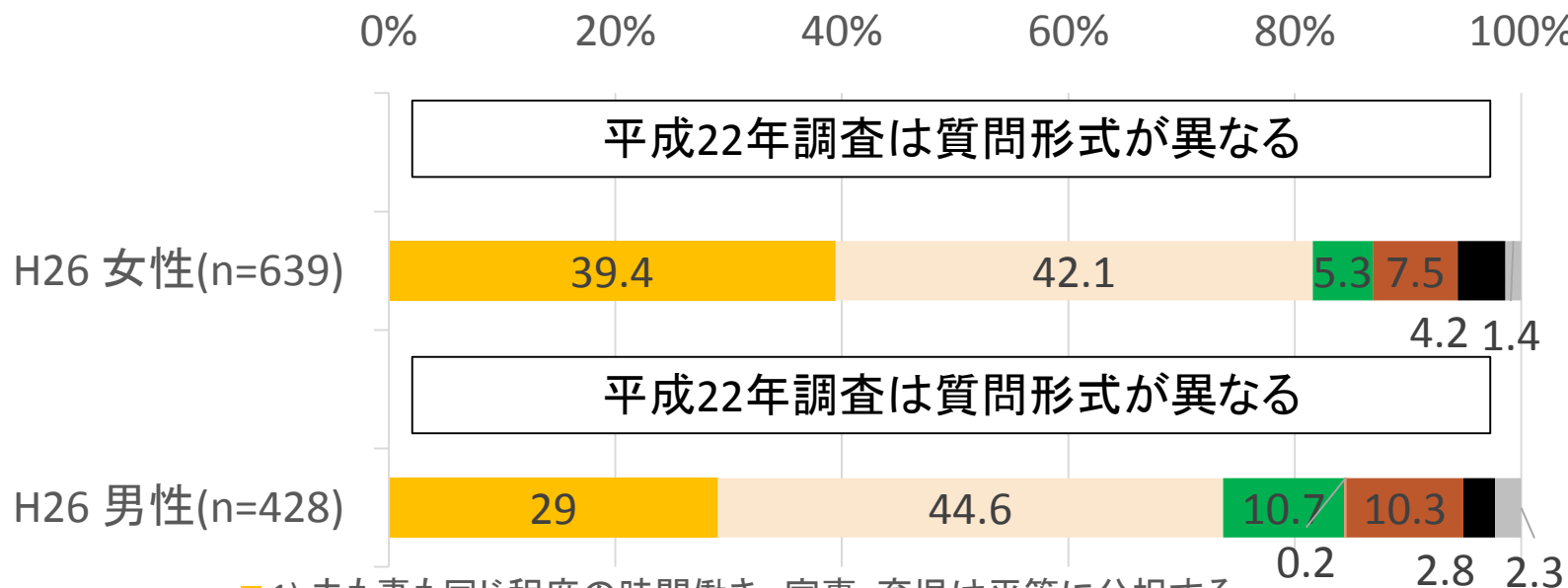
一般的に、女性が職業をもつことについて

- 一般論としては、女性が職業を持つことについて何らかの条件付きとする回答が、女性で約5割、男性で5割台半ばとなっている。
- 前回調査よりも、条件付きの回答者割合は、男女とも10ポイント以上減少している。



望ましいと思う夫婦の分担形態

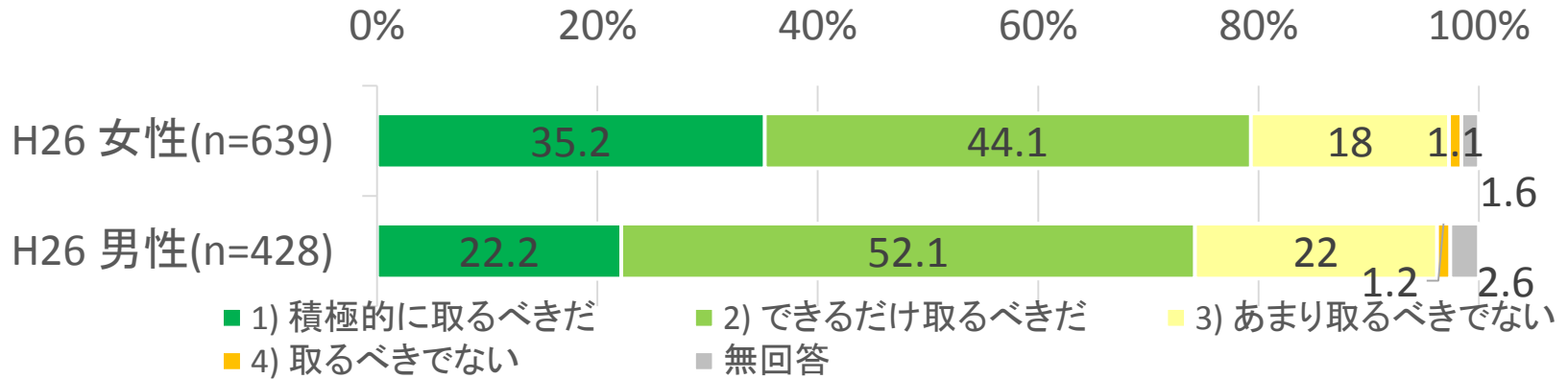
- 望ましいと思う夫婦の分担形態として、男女とも最も多かったのは〈夫が長い時間働き、妻が勤務時間を調整〉で4割台。
- 夫婦共に同じ程度働き、家事・育児も平等に分担するの回答は、女性においては約4割に対し、男性では3割弱と10ポイントの開きがある。



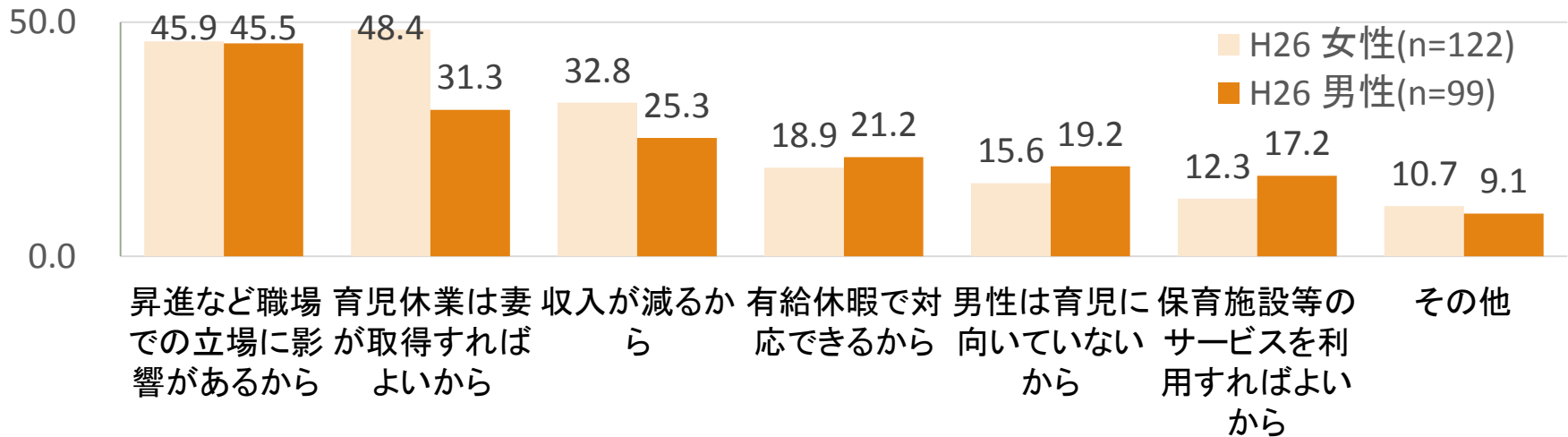
- 1) 夫も妻も同じ程度の時間働き、家事・育児は平等に分担する
- 2) 夫の方が長い時間働き、妻が勤務時間を調整し家事を分担する
- 3) 妻の方が長い時間働き、夫が勤務時間を調整し家事を分担する
- 4) 夫が働き、妻が家事・育児に専念する
- 5) 妻が働き、夫が家事・育児に専念する
- 6) 夫婦のどちらかが働き、もうひとりが家事・育児に専念するが、夫か妻かは関係ない
- 7) その他
- 無回答

男性の育児休業取得について

- 男性の育児休業取得については、女性の8割近く、男性の7割以上が「取るべき」派であった。
- 取得するべきでないとした回答者が挙げた理由として最も高かったのは、男性では「昇進など職場での立場に影響があるから」の45.5%、女性では「妻が取得すればよいから」も48.4%であった。

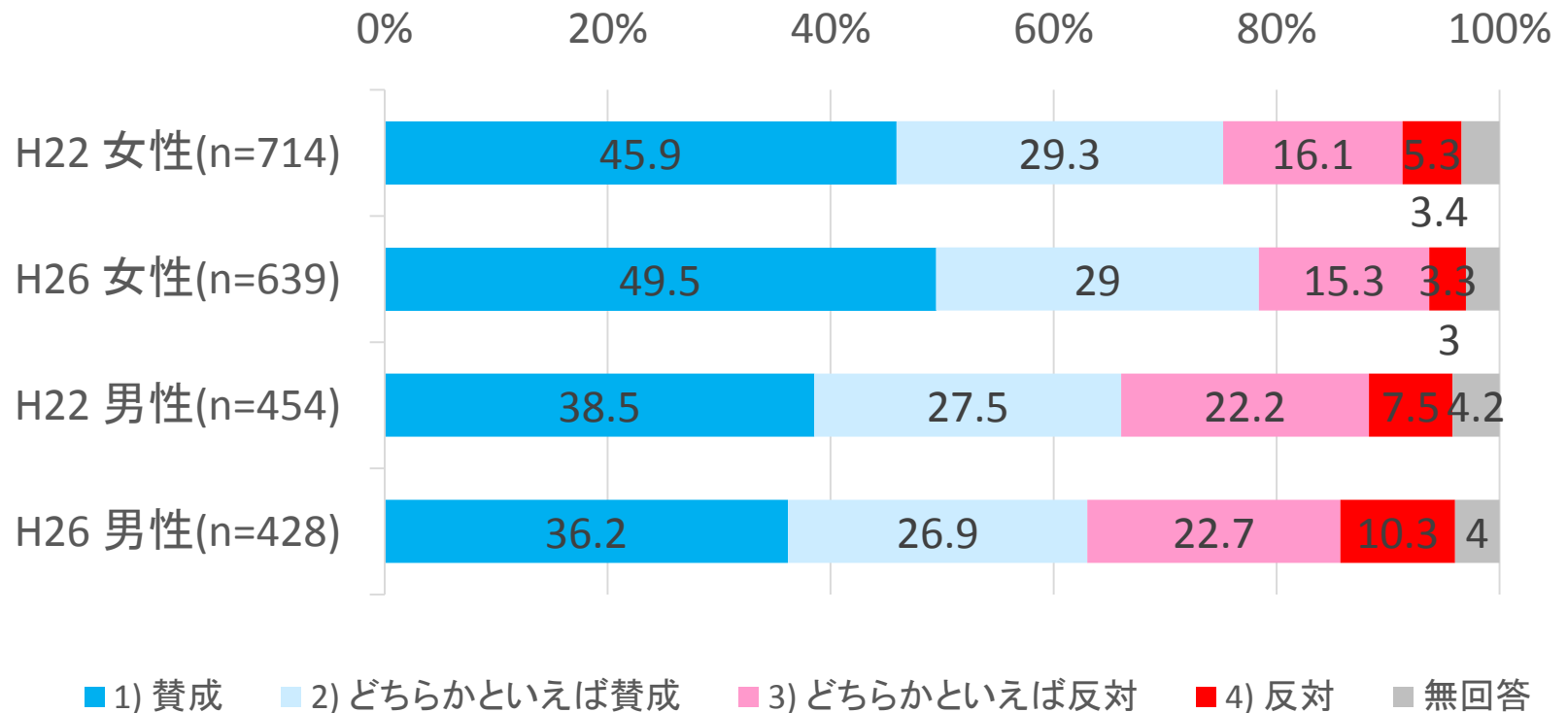


取得するべきでないと思う理由



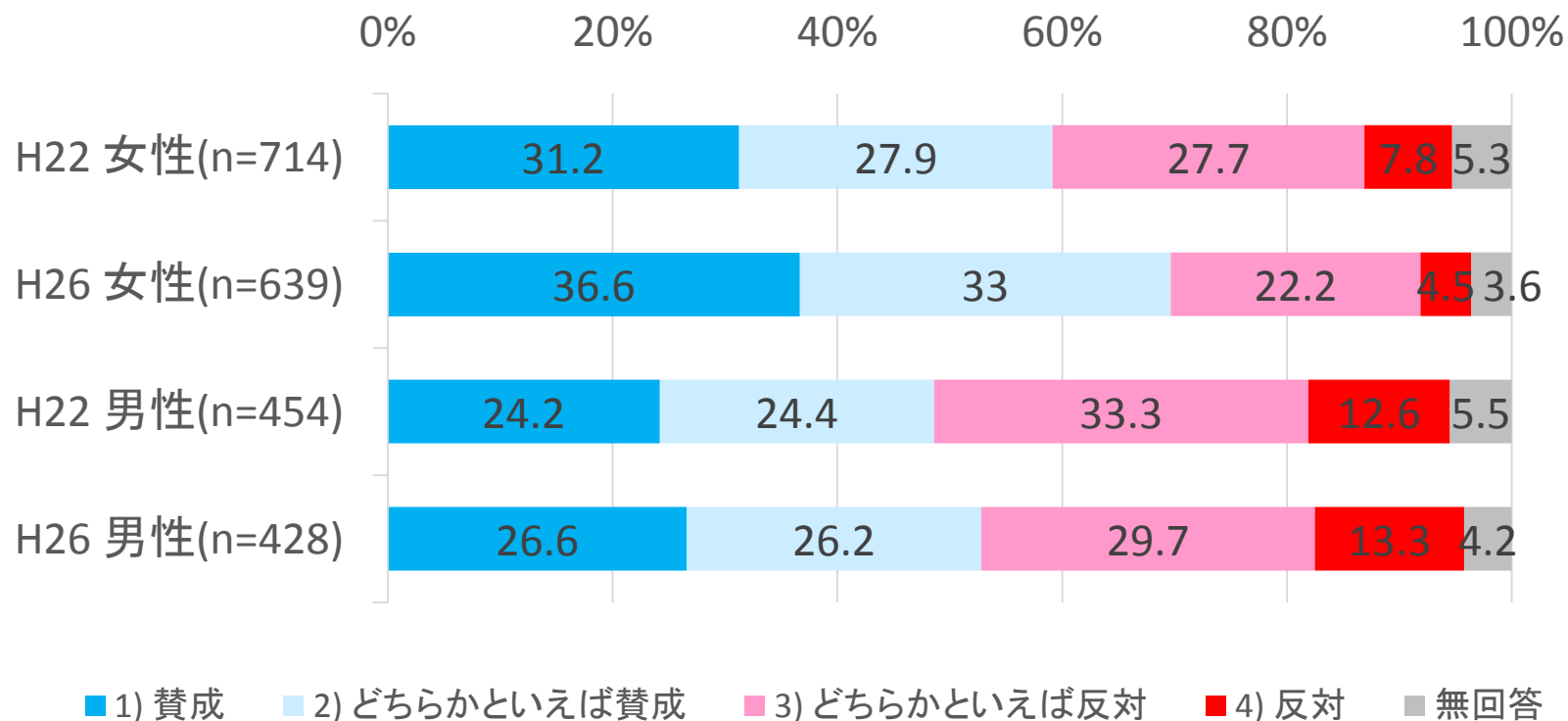
「結婚は個人の自由であるから、結婚してもしなくてもどちらでもよい」

- 結婚観について、「結婚してもしなくてもどちらでもよい」という考えへの賛成派は、女性で8割近く、男性で6割強であった。
- 男女共に、前回調査から大きな変化はない。



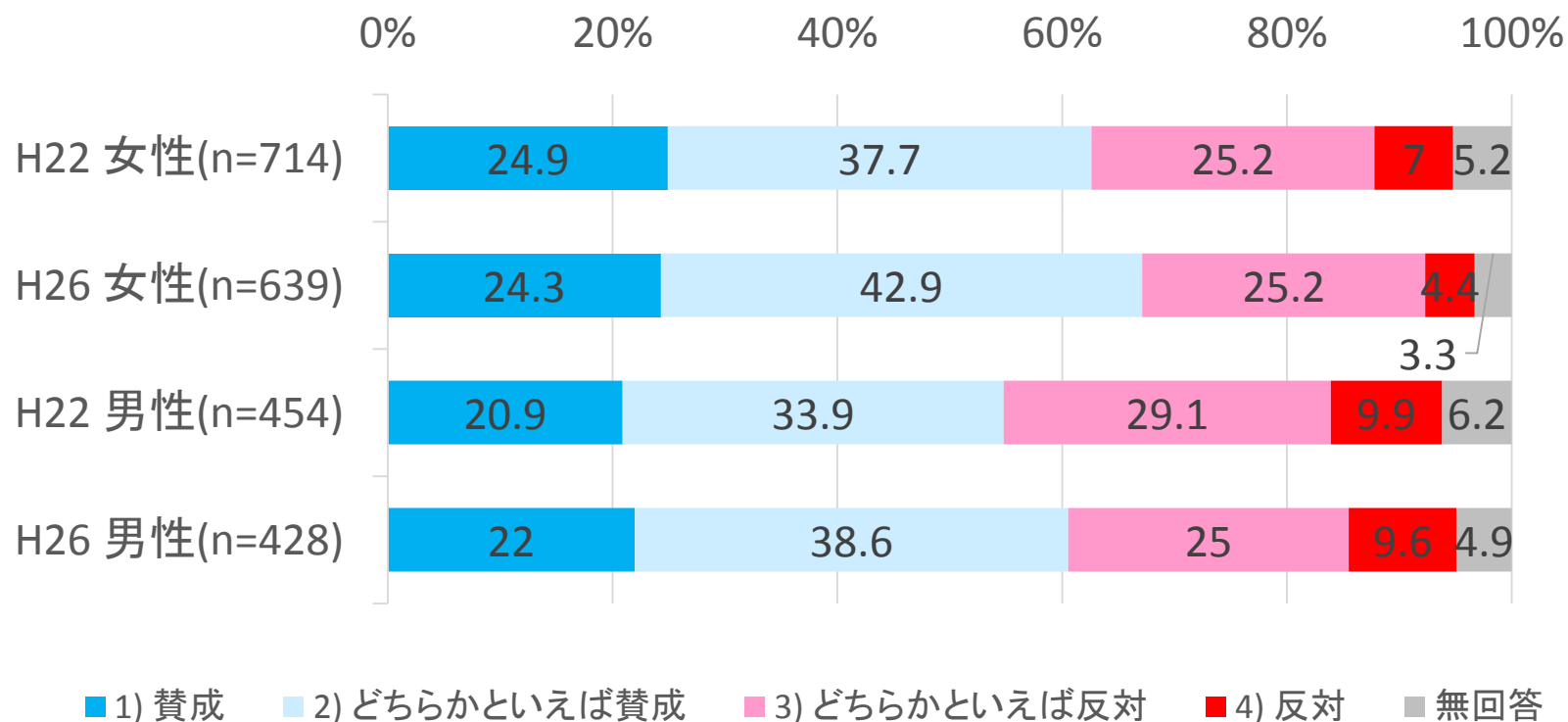
「結婚しても必ずしも子どもをもつ必要はない」

- 「結婚しても必ずしも子どもを持つ必要はない」という考えについては、女性は10ポイントあまり賛成派が増え、約7割。男性では、賛成派はわずかに増えて52,8%であった。



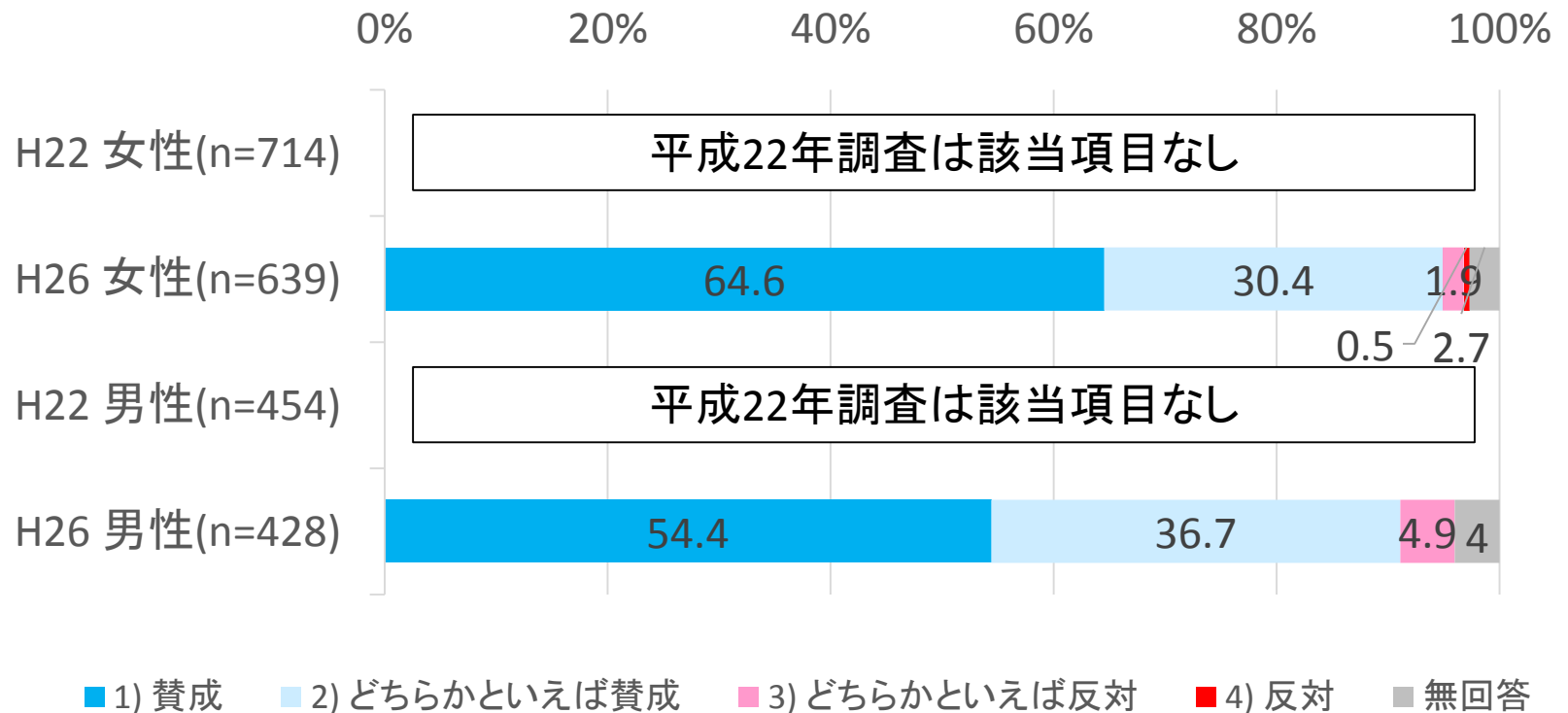
「結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい」

- 「結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい」との考え方については、男女とも前回からやや肯定派が増え、女性では6割台半ば、男性では約6割となった。



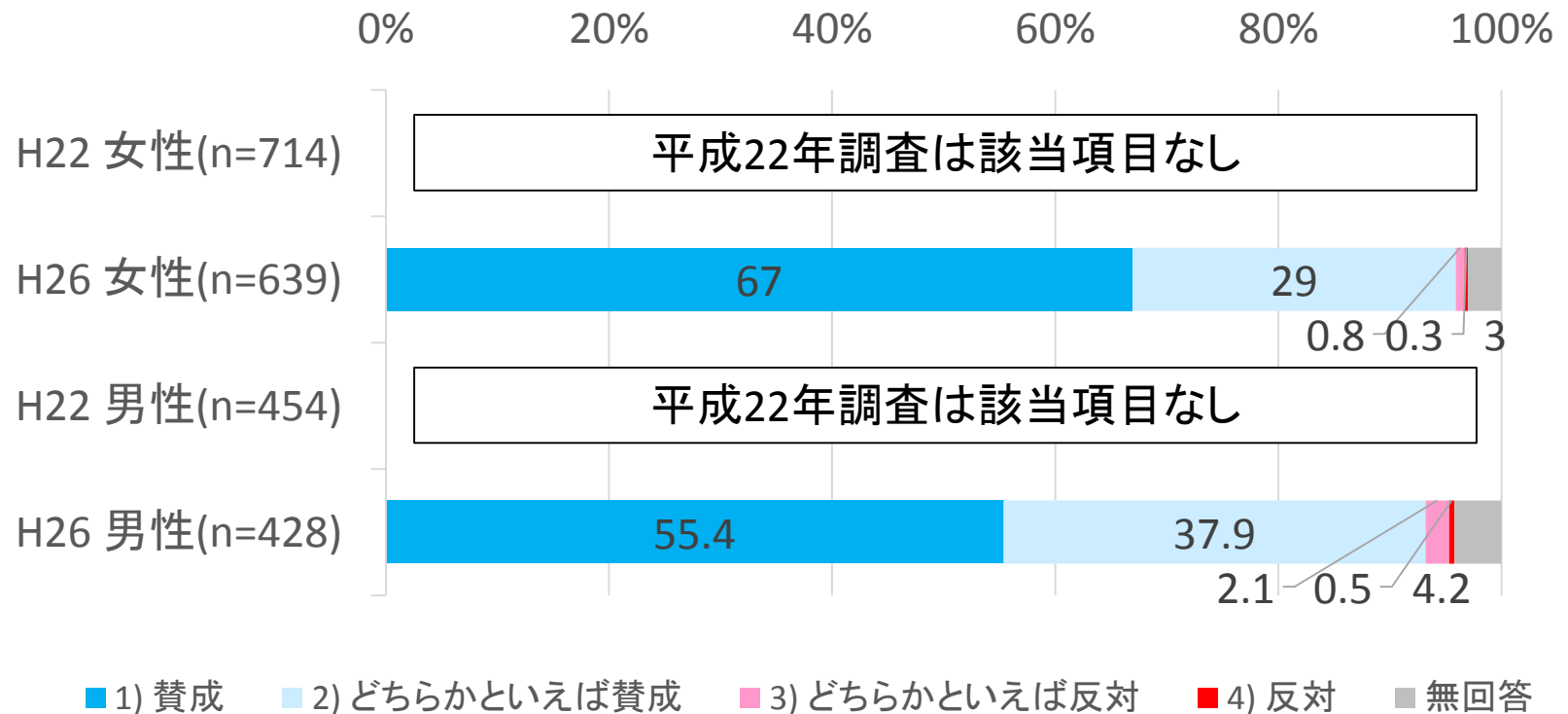
「女の子も男の子と同等に 経済的に自立できるように育てる方がよい」

- 男女の区別なく「経済的に自立できるように育てるほうがよい」という考えについては、賛成派が男女とも9割超となっている。



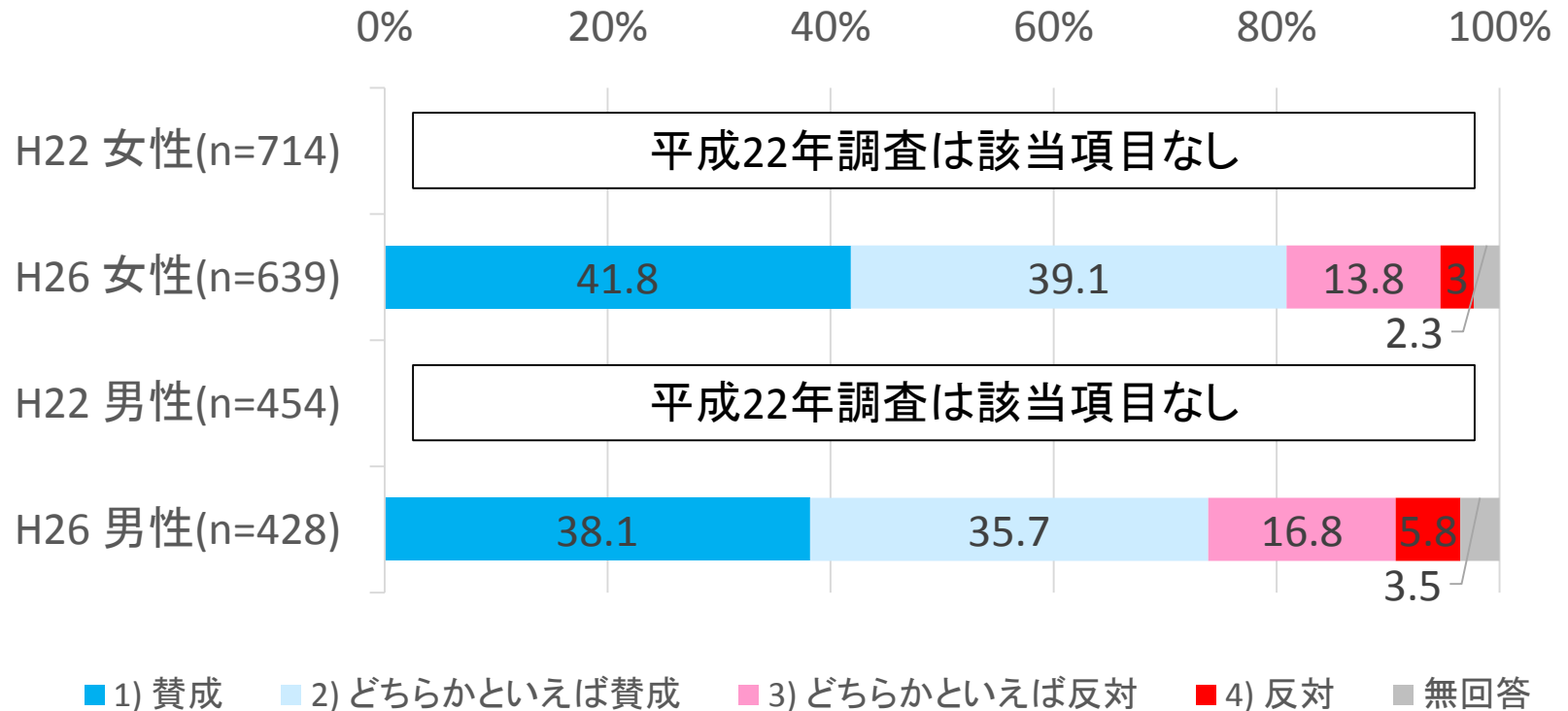
「男の子にも炊事・掃除・洗濯など、生活に必要な技術を身につけさせる方がよい」

- 男の子にも家事スキルを身につけさせる方がよいという考えについても、男女とも9割以上、ほとんどの回答者が〈賛成〉であった。



「男の子も女の子も同じように育てたほうがよい」

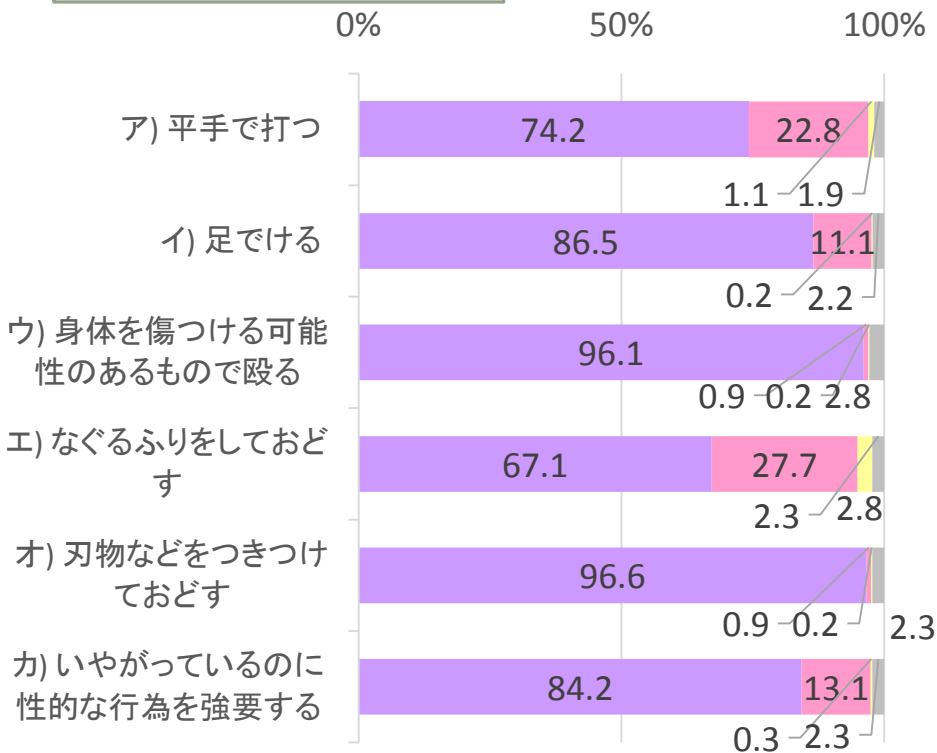
- 男女の区別なく「同じように育てたほうがよい」という考えについては、女性では8割超、男性では7割超が賛成派であった。



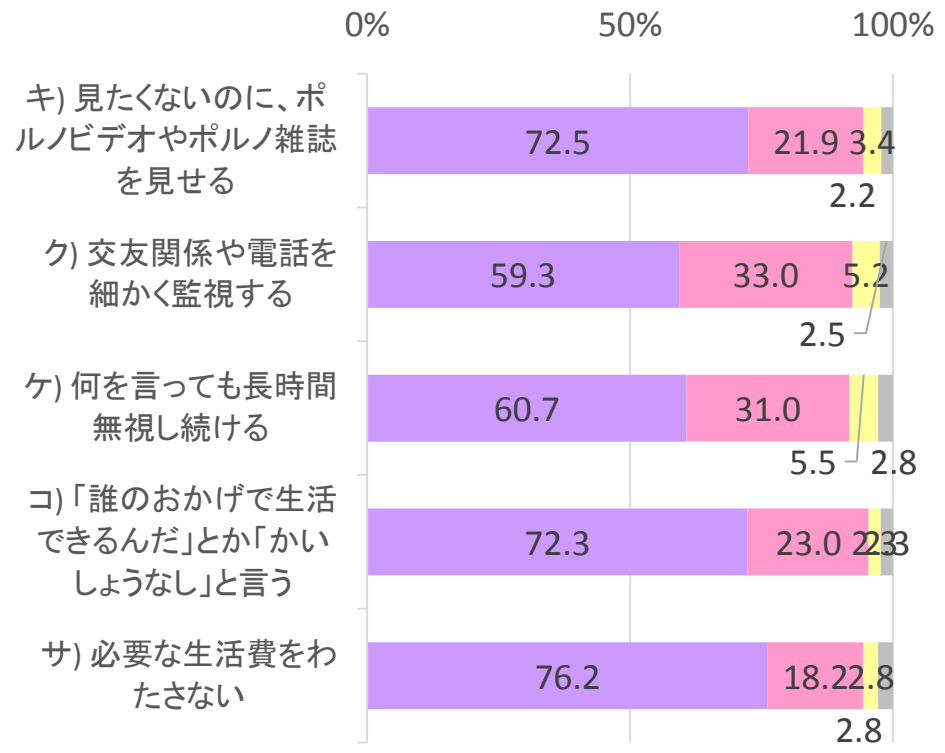
DVについての認識(女性)

- 「交友関係や電話を細かく監視する」、及び「何を言っても長時間無視し続ける」が、どんな場合でも暴力にあたると思う人は、女性では6割前後。「なぐるふりをしておどす」も、7割弱に留まっている。

H26女性(n=639)



- 1) どんな場合でも暴力にあたると思う
- 2) 暴力にあたる場合も、そうでない場合もあると思う
- 3) 暴力にあたるとは思わない
- 無回答

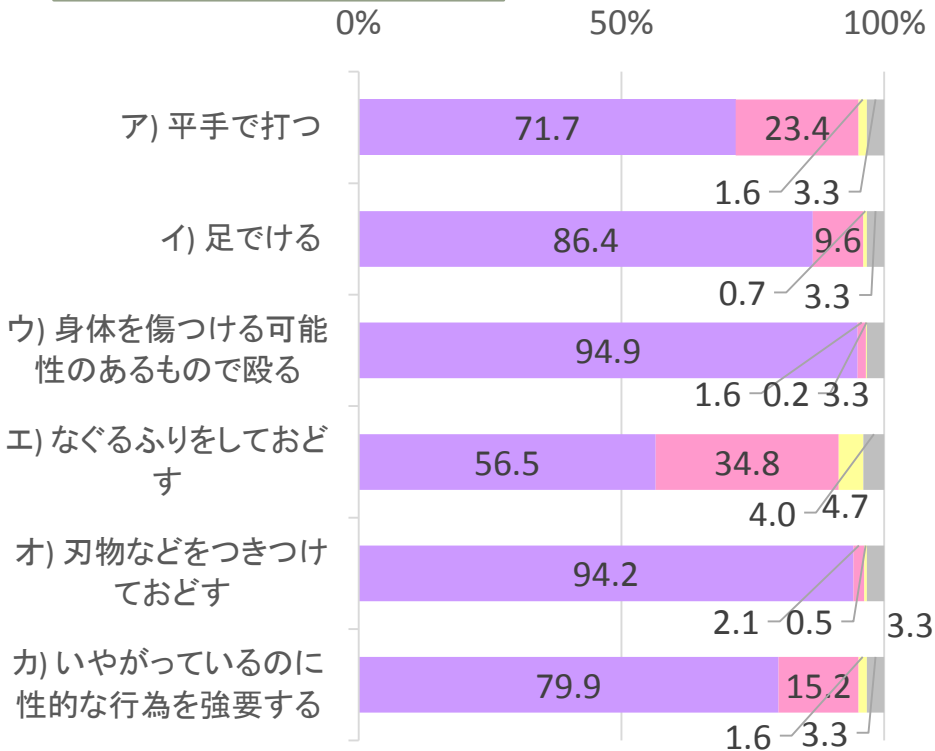


- 1) どんな場合でも暴力にあたると思う
- 2) 暴力にあたる場合も、そうでない場合もあると思う
- 3) 暴力にあたるとは思わない
- 無回答

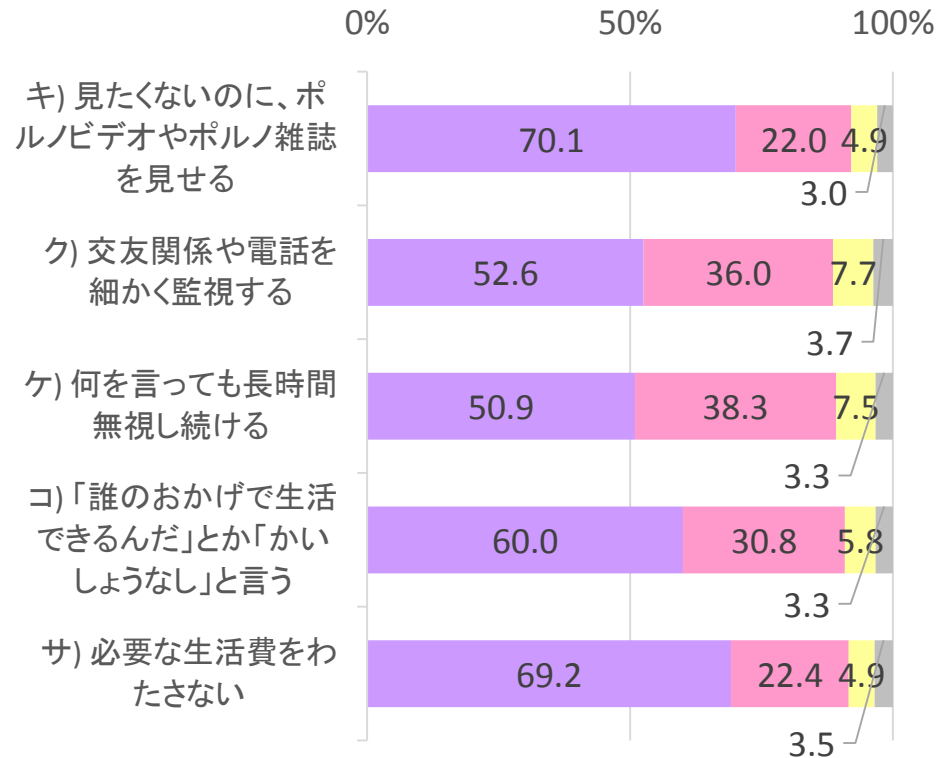
DVについての認識(男性)

- 男性では、全般的に「どんな場合でも暴力にあたる」とする割合が女性より低めで、「何を言っても長時間無視し続ける」、「交友関係や電話を細かく監視する」、「なぐるふりをしておどす」では5割台に留まっている。

H26男性(n=428)



- 1) どんな場合でも暴力にあたると思う
- 2) 暴力にあたる場合も、そうでない場合もあると思う
- 3) 暴力にあたるとは思わない
- 無回答

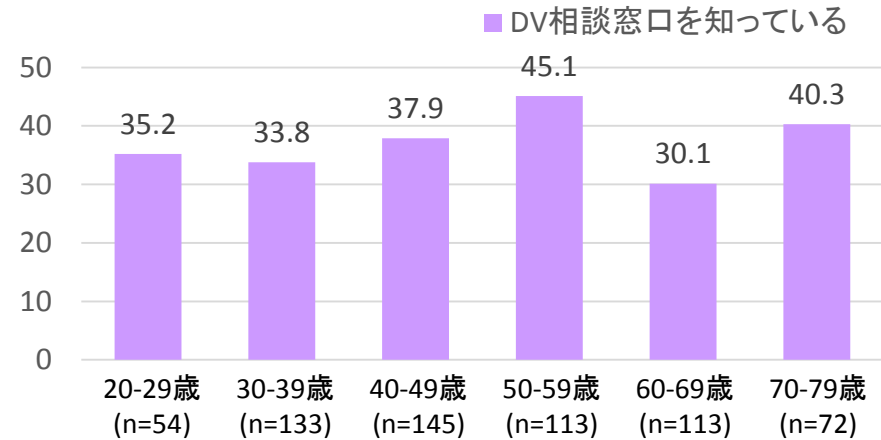
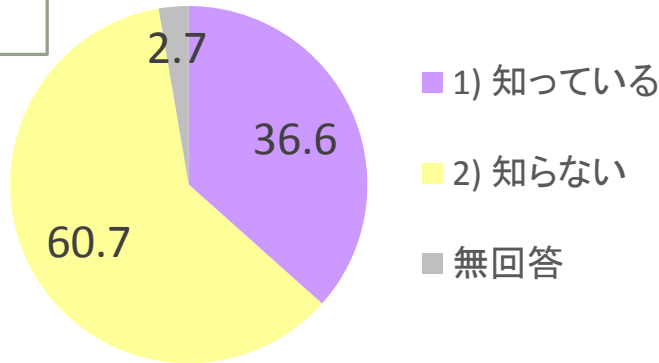


- 1) どんな場合でも暴力にあたると思う
- 2) 暴力にあたる場合も、そうでない場合もあると思う
- 3) 暴力にあたるとは思わない
- 無回答

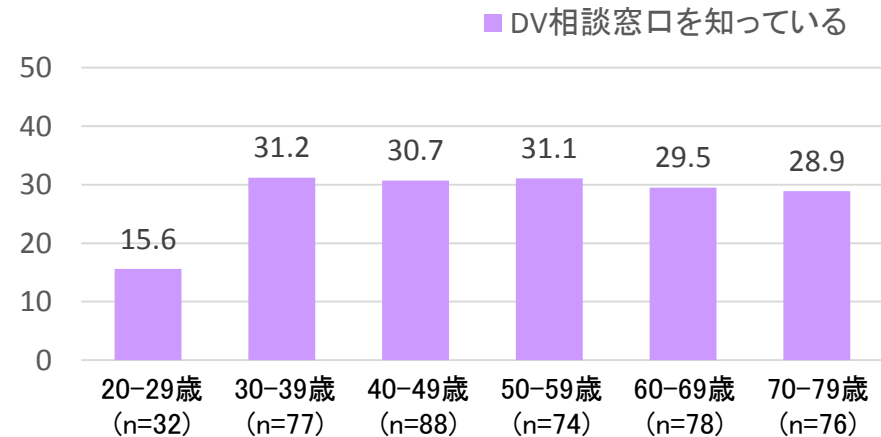
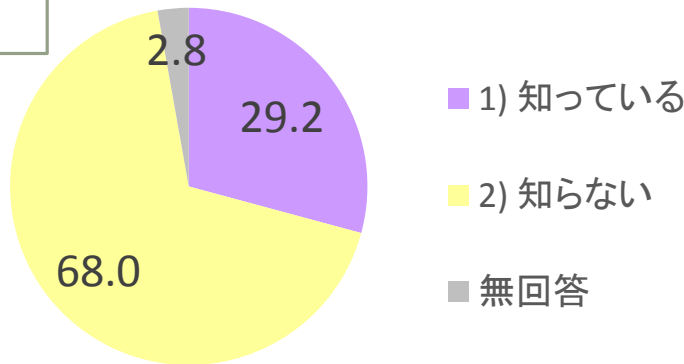
DV相談窓口の認知

- DV相談窓口の認知は、女性では36.6%、男性では29.2が「知っている」と回答。
- 年代別で見ると、女性では50代で認知が高めだが、60代で反対に低くなっている。男性では20代で認知が低く、15.6%に留まっている。

H26女性
(n=639)



H26男性
(n=428)



これまでのDV被害経験

- DV被害経験について、身体的暴力、精神的暴力、性的暴力のいずれかでも被害経験がある人を集計すると、女性では32.8%、男性では23%となる。
- 身体的暴力、精神的暴力、精神的暴力別に見ると、女性では身体的暴力に続いて性的暴力の被害経験の割合が高い。男性では、性的暴力よりも精神的暴力が高くなっている。

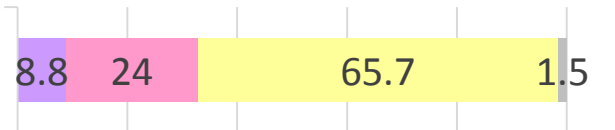
H26女性

H26男性

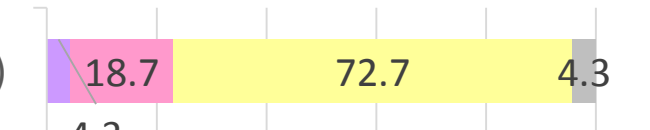
0% 20% 40% 60% 80% 100%

0% 20% 40% 60% 80% 100%

H26 女性(n=616)



H26 男性(n=396)



■ 何度もあった
■ 全くない

■ 1, 2度あった
■ 無回答

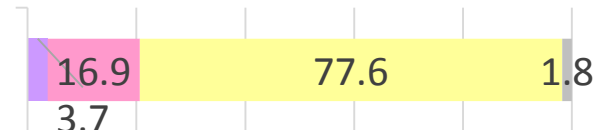
■ 何度もあった
■ 全くない

■ 1, 2度あった
■ 無回答

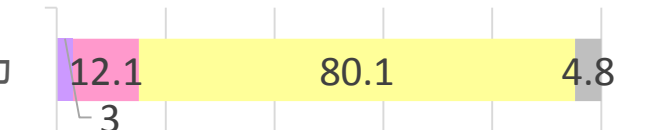
0% 20% 40% 60% 80% 100%

0% 20% 40% 60% 80% 100%

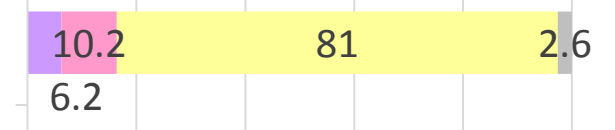
ア) 身体的暴力



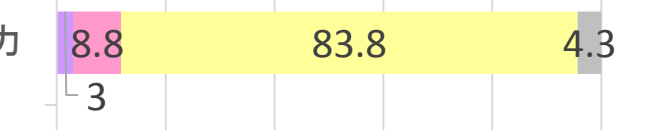
ア) 身体的暴力



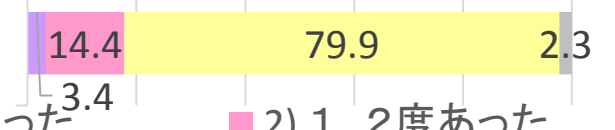
イ) 精神的暴力



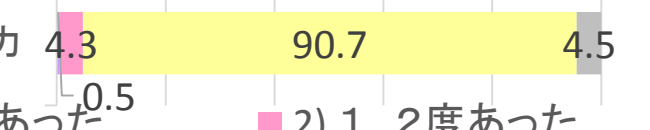
イ) 精神的暴力



ウ) 性的暴力



ウ) 性的暴力



■ 1) 何度もあった
■ 3) 全くない

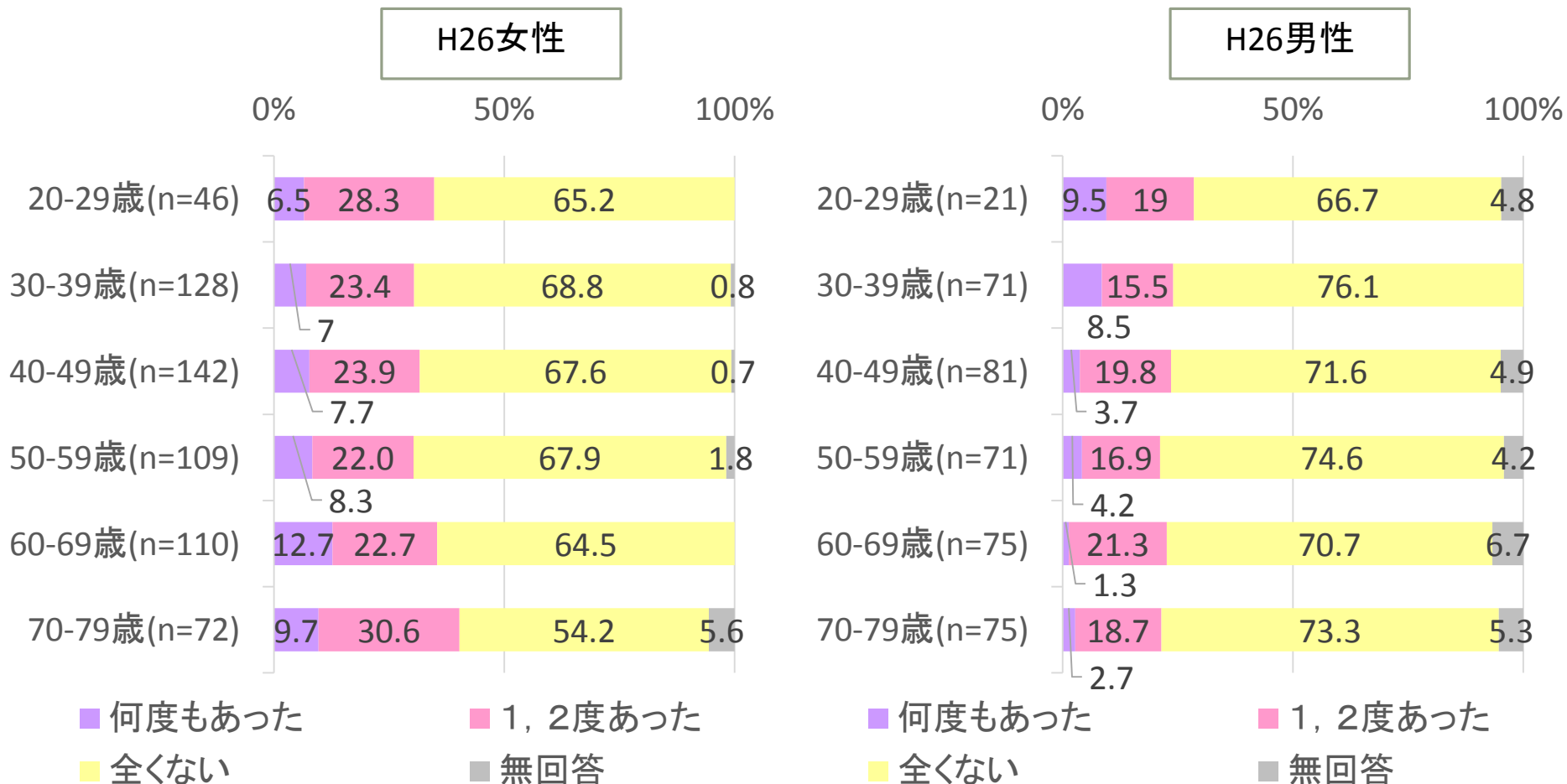
■ 2) 1, 2度あった
■ 無回答

■ 1) 何度もあった
■ 3) 全くない

■ 2) 1, 2度あった
■ 無回答

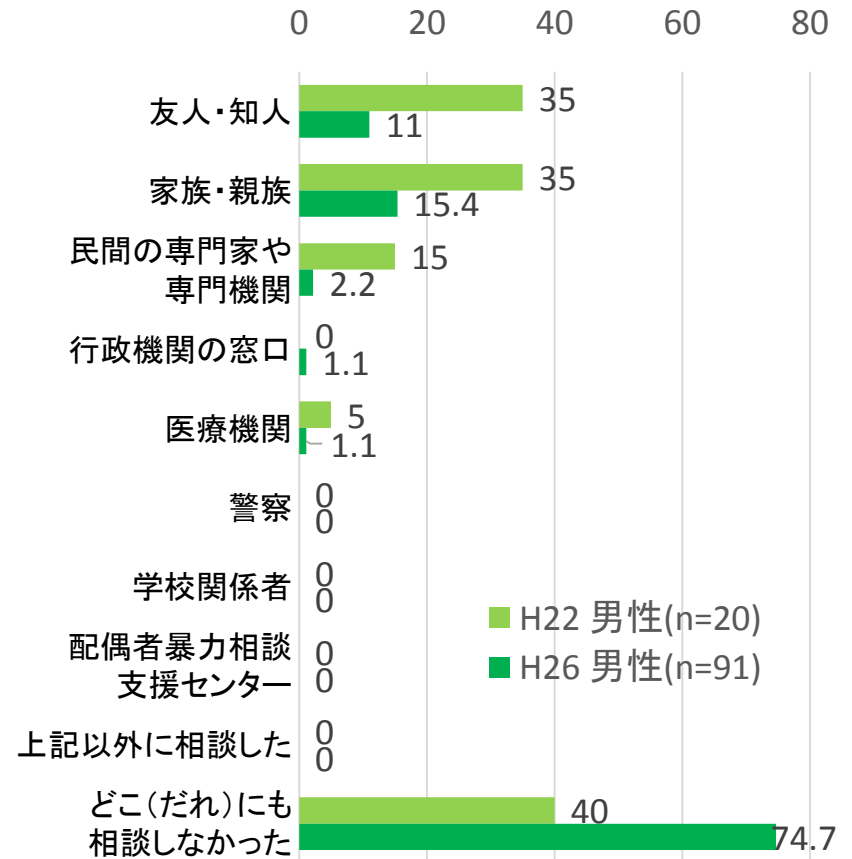
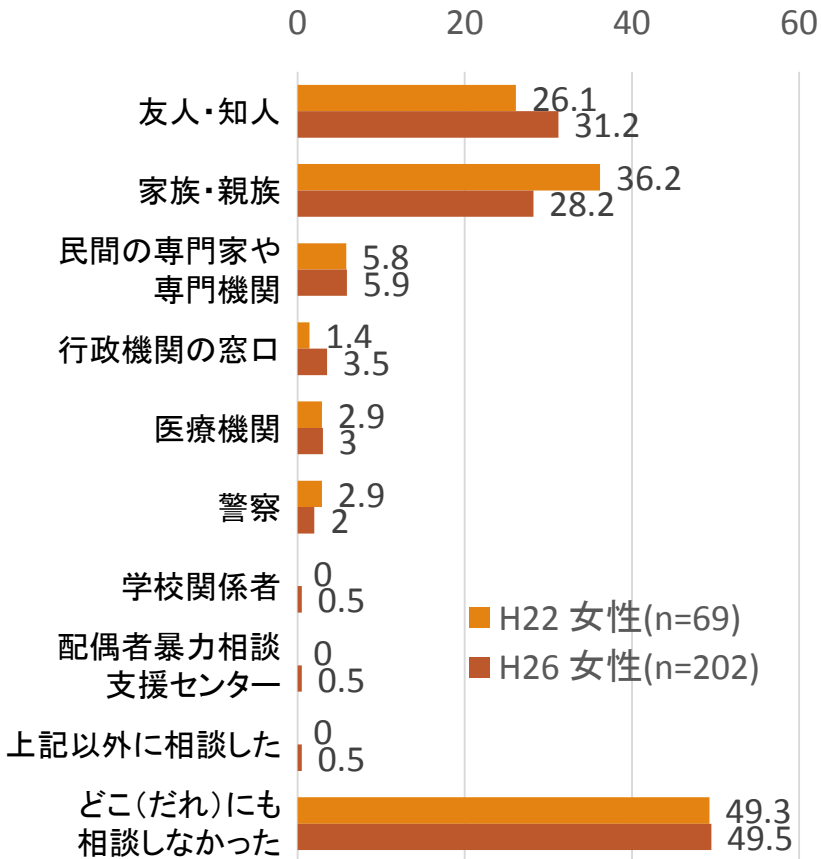
これまでのDV被害経験（年代別）

- いずれかのDV被害経験について年代別に確認すると、女性では60代以上でも3～4割が被害経験があった。男性では、年代が下がるにつれて「何度もあった」の割合が増加傾向にある。



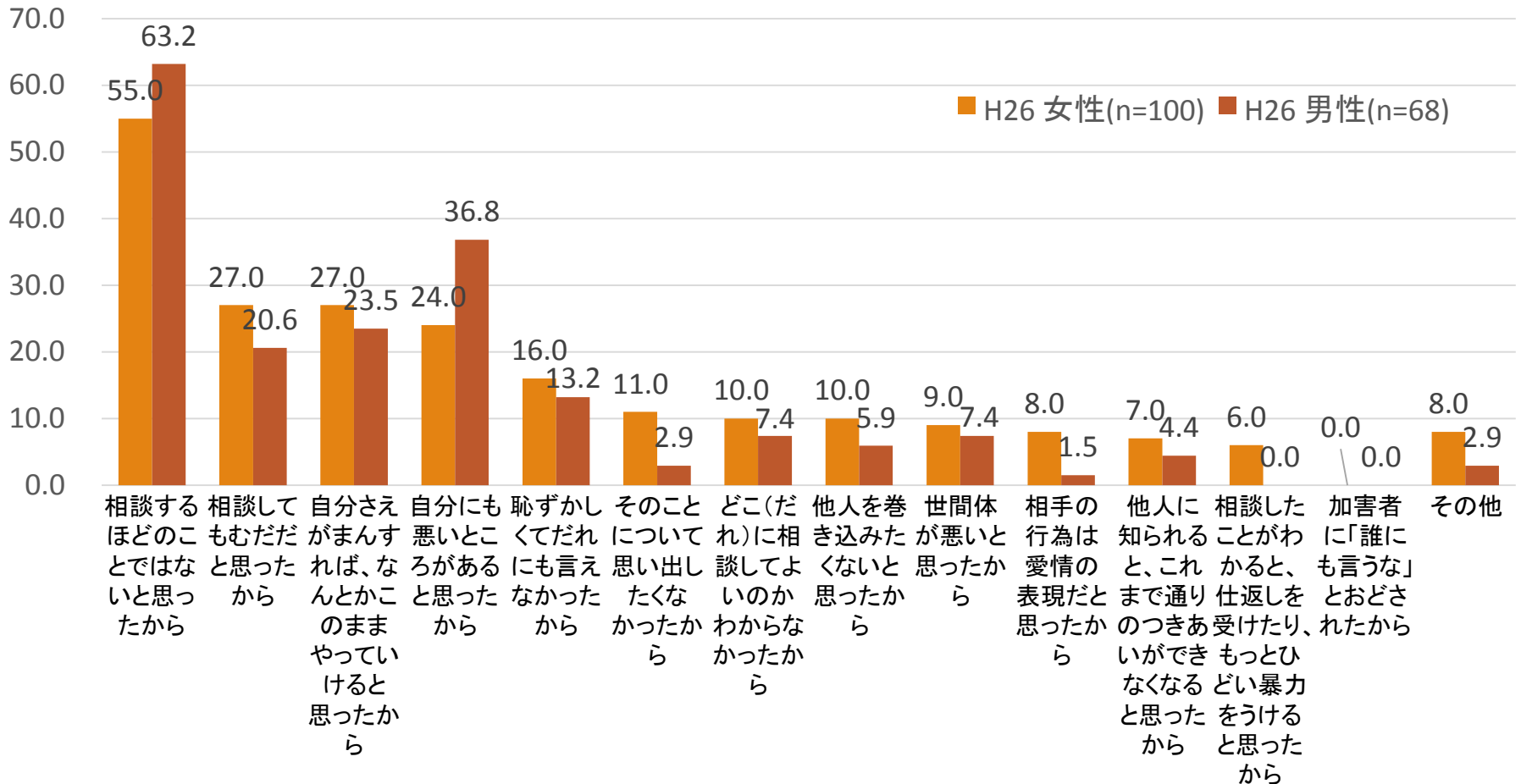
DV被害の相談先

- DV被害の相談先としては、男女とも「友人・知人」「家族・親族」という身近な人への相談が多めであったが、女性では3割前後であるのに対し、男性では1割台に留まっていた。
- 他方、「どこ(だれ)にも相談しなかった」とする人が女性では約半数、男性では7割以上を占めた。



DV被害を相談しなかった理由

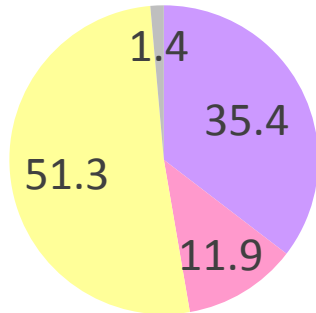
- 相談しなかった理由としては、男女とも最も多くの方が「相談するほどのことではない」と思ったからを挙げており、女性では55%、男性では63.2%となった。
- 男性では2番目に高いのが「自分にも悪いところがあるから」で、36.8%で女性と10ポイント以上の開きがある。



デートDVの認知

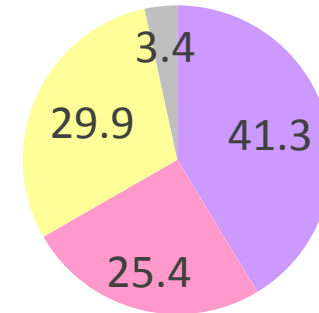
- デートDVの認知は広がっており、言葉は知っている人は前回調査が半数未満であったのに対し、男女とも6割以上となった。
- 「言葉も内容も知っている」の回答割合を見ても、女性では約6ポイント、男性では約10ポイント高くなった。

H22女性
(n=714)



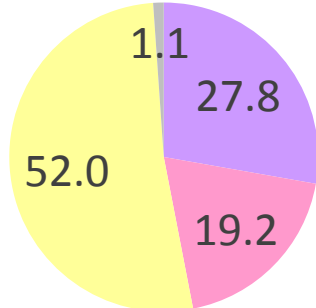
- 1) 言葉もその内容も知っている
- 2) 言葉は知っているが、内容まではよく知らない
- 3) 言葉があることを知らなかった
- 無回答

H26女性
(n=639)



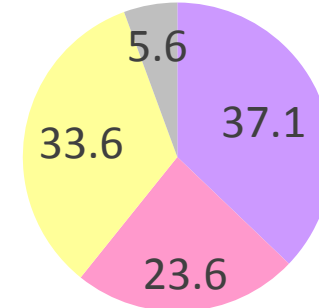
- 1) 言葉もその内容も知っている
- 2) 言葉は知っているが、内容まではよく知らない
- 3) 言葉があることを知らなかった
- 無回答

H22男性
(n=454)



- 1) 言葉もその内容も知っている
- 2) 言葉は知っているが、内容まではよく知らない
- 3) 言葉があることを知らなかった
- 無回答

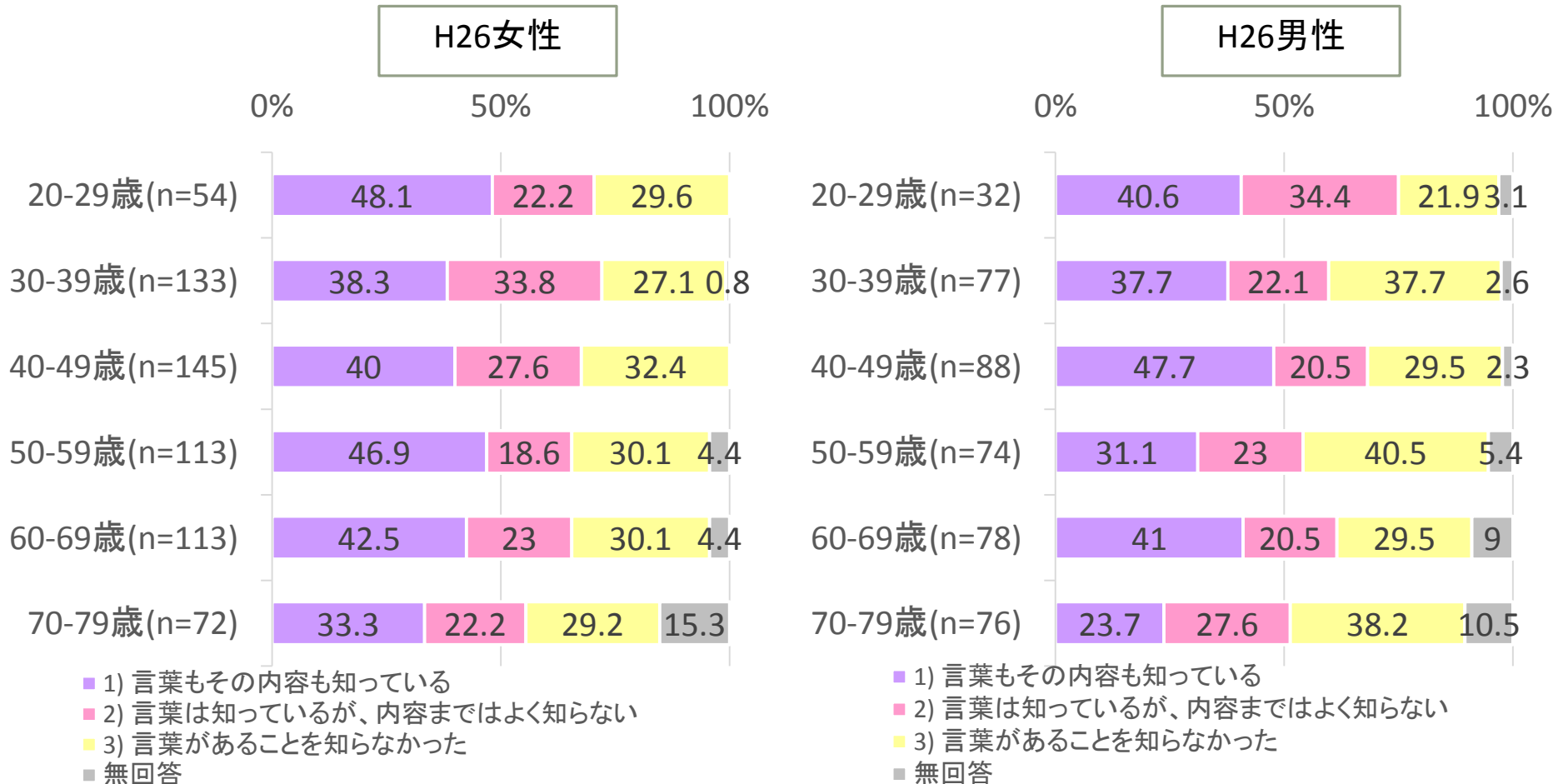
H26男性
(n=428)



- 1) 言葉もその内容も知っている
- 2) 言葉は知っているが、内容まではよく知らない
- 3) 言葉があることを知らなかった
- 無回答

デートDVの認知(年代別)

- 男女とも、どの年代でも過半数が言葉までは知っていると回答していた。
- 男性は年代によりバラつきがあり、30代、50代、70代で「言葉があることを知らなかった」が4割前後となっている。



DV防止に必要だと思うこと

- 男女とも、最も多かったのは「相談窓口の周知」で、女性約7割、男性約6割であった。次いで、「人権教育」、「加害者への処罰強化、更正教育対策」が過半数となっている。
- 全般的に女性がほとんどの項目でやや高めであるが、大きな傾向の違いはない。

